
バカとテストと鏡花水月

気まぐれのコウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと鏡花水月

【Nコード】

N0208N

【作者名】

気まぐれのコウ

【あらすじ】

とある理由でFクラスになった転校生の双子が、Fクラスの面々と共に大暴れ(?)する！

作者の初掲載で色々間違いもあるかも？

ついでに、この小説は受験生の受験生による息抜きのための執筆によって生まれるため亀更新かと…

プロローグ（前書き）

作品紹介にもあるとおり、亀更新の確立大な上駄文かも…
それでもよろしければどうぞ

プロローグ

春、俺達は転入する文月学園へ歩を進める。

「桜がすごいなあ。でも、夏とか大変そう。毛虫とか毛虫とか」

満開の桜並木を歩きながらどうでもいいことを呟く俺こと『影隠かげかくれ水月すいげつ』

よく長身痩躯とか言われるくらいには背が高く細めな感じで、黒い髪を腰までのばしている。

わかりやすい特徴と言えば水色の瞳ぐらいか？

「多分……駆除するんだと思うけど」

律儀に相づちをうつてくるのは双子の『影隠かげかくれ鏡花きょうか』。

身長は女子の平均ぐらいらしいがまず目が行くのは髪形かな？目元が隠れるくらいまでのばしていて「それで前見れるのかよ」ってつつこみたくなる。せつかく双子そろって水色の瞳なのにもつたいない……

「だろうなあ。あれ？門の所に先生？」

「クラス分け……」

「なーる。そういえばそうだな」

まあ俺達が入るクラスは分かっているんだが……

「おはようございます。えーっと……」

「生徒指導の西村だ」

鍛え上げられたであろう身体に浅黒い肌、スーツ姿でなければ何かの選手にしか見えない。

「そうでしたか。西村先生、おはようございます。」

「おはようございます……。」

「おはよう。確か影隠だったな。」

「はい。鏡花と水月です。」

指差しながら言う。

「それにしても双子で上下がわからないなんて珍しいなんてものじゃないぞ」

「そうなんですか？ いまいち実感がわかないんですが……」

「職員室でもだいぶ話題になっているぞ」

転入前から有名なのかよ！？

「そついつのつてちよつといい気はしないんですが……」

「そつだろつな。ほら、クラス分けた。」

封筒を2つ受け取り片方を鏡花に渡す。

「すまん。これもルールだからな。」

？ああ、クラス分けの事か。

「いえ、こっちの事情で迷惑をかけるのもあれなので……気にしないで下さい。」

言いながら開けた封筒からはでかかと『F』の文字が書かれた紙
が出現した。隣の鏡花も同じだ
家の事情で転入時期がずれて振り分け試験受けてないしな

「まあ、本人達が受け入れているならこれ以上は言わん。」

「ありがとうございます。それでは」

「……（ペコリ）」

西村先生に一礼してその場を後にする。

転入生なので一度職員室へ向かっていく必要があるな

ブログ（後書き）

どうでしたでしょうか…

感想、アドバイス等ありましたら更新が…早くは出来ないかもしれませんが

バカテストってやらなきゃだめかな…

第一問（前書き）

バカテストは思いついたらやろつと思いますorz

第一問

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に

選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウム

の代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希、影隠鏡花の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』は駄目という引っかけ問題なのですが、二人は引っかけりませんでしたね。

影隠水月の答え

『問題点……持ち手が熱くなった？』

合金の例……材質変えずに布でも巻く』

教師のコメント

問題点はよくある間違いですが、仮にそうだとしても合金の例を挙げてください

土屋康太の答え

『ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

俺達は担任の福原先生（冴えないオジサン先生とも言える。まさか先生までFクラス級とは……）に連れられて2・F前へ来ていた

「それではここで待っていて下さい」

「分かりました。」

返事を聞くと先生は教室に入ってしまった

「あーくそ、敬語疲れた」

「大丈夫？」

「まあ、実際にそんなに疲れた訳じゃないからな。どうしても口を
ついて出るというか……」

『では、入ってきて下さい』

おっ、呼んでるみたいだ

ガラガラッ

扉を開けた瞬間絶句。が、二秒で復活

予想してたより酷いなFクラス。まさか卓袱台に座布団とは……

「えーと、影隠 水月です」

「……影隠 鏡花……です」

『『『うおおお、女子だあ！！』』』

なんちゅー連中だ。確かに見回しても女子は一人みただし、貴重

(?)なのかもしれんが……

「双子だから基本、名前呼びでたのむ」

あのハイテンションの中で何人に聞こえるかは知らんが、一応言うておく

「ホームルームを続けますので、質問などは休み時間をお願いします」

先生の一言でみんな渋々口を閉じる

「まず」

しばらく連絡が続き、

「それでは自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。あ、鏡花さんと水月くんもお願いします」

やっぱりあれだけじゃマズいか

ちなみに俺達の席は廊下側前から二番目と三番目で、三番目が俺だ

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

鏡花の前のやつか。何か女っぽい顔してたが、それに爺言葉って……なぜかしっくりくる。謎だ

「……今年一年よろしくたのむぞい」

不思議がつてる間に終わっちまった。

「影隠 鏡花です。……趣味はパソコン、得意科目は理系全般です。よろしくお願いします」

おー、顔真っ赤。いつもの事だがここでやると……

(((かわいいいいい!!!!)))

あーあ、いたるところで死者が……

「影隠 水月だ。趣味は機械いじりと運動、得意科目は文系全般だ。一年間よろしく！」

俺の方は特に何もなく終わり、自己紹介は続くんめんどくさいから面白かったやつだけ取り上げよう。

まず島田 美波さん、海外育ちで趣味が吉井明久を殴ること。

で、件の吉井 明久、ジョークで『ダーリン』と呼べと言う 野太
い大合唱 撤回とまあ面白いバカだ。

そんなとき、一人の女子が遅刻してきた。第一印象としては髪ピン
クutte……って感じ

周りの話を聞く限り、その姫路 瑞希さんは高得点を取れるような
人のようだ。姫路さんが席についてちよつとしたら、先生が教卓を
叩きつつ注意する

しかし、この時教卓はゴミクズに変身した

「替えの教卓を取ってきます。それまで自習しててください」

と言って先生が出ていった
さて、寝るかな

side 鏡花

自習となって先生が出ていった直後にクラスの過半数の人達が寄っ
てきた。

『彼氏っている？』『どんな人が好き？』『俺と付き合って！』
『……………』『……………』『……………』

みんなが別々の事を聞かれて、何から返事すればいいんだろう…

「やめんか皆！転入生を困らせてどうするのじゃ！」えっ？

木下君の言葉でみんながしぶしぶ下がる。

「鏡花じゃったか、大丈夫かの？」

「う、うん。……ありがとう。えっと、木下君」

「ワシの事はできたら秀吉でたのむのじゃ。お主らと違ってクラスが違うがワシも双子の姉がいるのでな。」

「そうなんだ。改めて、影隠 鏡花です。よろしくひ、秀吉君」

恥ずかしくて少しつかえちゃった……

「う、うむ。木下秀吉じゃ。よろしくたのむぞい鏡花（むう、赤面しているのがこういった事に疎いワシから見てもかわいいのじゃ）」

互いに赤面した顔を背けている

「えーと……そうじゃった、落ち着いたのなら質問に答えてやってくれんかの？」

「う、うん」

そう言ってみんなの方を見ると、

『『『『『いえ、やっぱり結構です。』』』』』

と、口を揃えて言われた。

秀吉君と揃って首をひねっていると、先生が戻って来て自己紹介が再開された

（side 水月）

起きたら自己紹介が終盤に差し掛かっていた。

ぼーっと見てると最後の一人がなぜか教壇に立った。

「Fクラス代表の坂本 雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

代表だから壇上に上がったのか。では、好きなように呼ばせてもらおう

「ノッポ野郎」

「お前もな」

「ゴリラ野郎」

「うるせえ針金細工」

「バカ野郎」

「アレよりマシだ」

坂本が指差した先には吉井がいた。確かにバカっぽかったが……

「ちよつと雄二！何で僕を引っ張り出「坂本、一ついいか？」って酷くない!？」

「何だ水月」

しつかりあれは聞いてたのか。

「針金細工と言われるほど俺は細くねえ！」

「そうか？まあ、そうかもしれんな、言い過ぎた。」

あれっ？あつさり通った？

「いや、こつちこそ言い過ぎた。すまん。」

「いやいい。それより、話を戻すが……」

話を戻したかったのか。それにしてもやけに真剣な顔だな。

「皆に一つ聞きたい」

上手いこと視線を操作して設備を再確認させてやがる。

「Aクラスは冷暖房完備の上、リクライニングシートらしいが……
…不満はないか？」

『『大ありじゃあああ』』

「無い事も無い」

声をそろえるクラスメイトと、一人KYですな俺。

「だろう。俺も代表として問題意識を抱いている。」

あちこちで不満が上がる

「そこで代表としての提案なんだが、」

「FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

開戦の笛の音を聞いた気がした。

第一問（後書き）

キャラ壊れたりしてないか不安な作者です…
ちなみに水月に言ってた『針金細工』は人間シリーズの零崎双識さんの説明から。あれも好きなんですよね…

第二問（前書き）

書きだめ投下中！一応二巻の最後までは書いてあるんですが…
勉強が忙しくて誤字脱字のチェックも出来ません

都合上、工藤愛子の転校は一月から、ということにしています

第二問

よりもよってAクラスとは……

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

『俺は鏡花さんがいたらいい』

いたるところで悲鳴があがったが何かおかしい奴いなかったか？

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

一瞬俺の疑問に『そんなことはない』って言ったのかと思ってしまった

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

そう思うのも無理は無い。

聞くところによるとAとFだと1対4前後でやっとならしいからな

ヴヴヴ、ヴヴヴ

「おつ、メールだ」

俺のポケットで携帯が振動したので見てみる

『From: 工藤 愛子』

Title：残念！』

俺達が編入試験を受けたとき仲良くなった工藤 愛子からだ。たしか一月に編入したんだっけ（というか俺達がずれたただけだが……）

『一緒のクラスになれなかったね（泣）。ボクはAクラスになったよ！そっちは？』

うーむ、まさかAクラスとは……とりあえず、

『振り分け試験受けてない。』Fクラスだ。』

こんなところかな

「んで、送信つと」

「それを今から説明してやる」

坂本が勝利宣言の根拠を説明しだすようだな。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

あそこまで堂々と覗いといてしらばつくれても無意味だろうが。畳の跡ついてるし（手で隠してるけど）

「土屋 康太。こいつがあ有名な、ムツッリーニ寡黙なる性識者だ」

ムツッリとムツッリーニをかけたんだろっな。そんなに有名なのか

よ……

『ムッツリー二だと?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか?』

結構有名らしいな…

「姫路のことは説明するまでもないだろう。二人以外はよく知っているはずだ」

まあ確かに俺達は知らないがな。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらなないな』

『俺は鏡花さんが……』

やっぱりおかしい奴混じってるって

「木下秀吉だっている」

『おお……』

『ああ。アイツ確か木下優子の……』

「秀吉君……」

今、ナチュラルに鏡花が混ざってたよな?

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか?』

『じゃあ振り分け試験の時は体調不良だったのか』

『実力はAクラス並が二人いるってことだな』

そんなにすごいならなぜFで代表なんだ？

「それに吉井明久だっている」

『『『……………』』』

沈黙。どうやらすごい訳ではなさそうだ。

周りがちらほら喋りだすが知らないようだ。

「知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

『それって馬鹿の代名詞じゃ…………』

「ち、ちがうよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で、そっだ。バカの代名詞だ」肯定するな、バカ雄二！」

吉井の使い方がなんとなく分かってきた気がする。

じゃあ俺も…

「観察処分者。それは問題児につけられる肩書きで開校以来一人しか存在せず、その一人がでる前は教師内ではただの脅しぐらいに考えられていたらしい。物体に干渉できるがダメージや疲労の何割かがフィードバックされる。」

「ちよっと！……………転入生まで何言ってたんだよ！」

「水月だ。一度で覚える。ちなみに、ほとんど教師の受け売りだ」

「ほう、転入生なのによく知ってるじゃないか。」

「まあ、戦争に興味あったし。ルールも理解してるぜ」

「なら話が早い。とにかく、俺達の力の証明としてまずDクラスを潰す」

なぜAやEじゃないんだ？後で聞いてみよう。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『おおー！！』

「ならば全員筆^ペを執れ！出陣の準備だ！」

『おおー！！』

「お、おー」

姫路さんまで流されてるよ。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になつてもらふ。大役を果たせ！」

「下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？それに字が違つてない？」

雰囲気で察したか。どれ、それなら

「おい、吉井。ここはどこだ？」

「は？えーと日本？」

「範囲がデカいわ！学校だろ。んでこの時間教師は？」

「クラスに居るだろうね。」

「目の前で暴力沙汰になつたらどうする？」

「！止めにはいつてくれる！」

「そう言う事だ（ニヤリ）」

「じゃあ僕行つてくるよ！」

クラスメイトの歓声と拍手を背中に受けて吉井は出ていった。ちょ口いな

「中々やるじゃあないか、水月」

「面白くつてつい、な。どうせ坂本も似たようなことするつもりだ

「ったんだろ？」

「もちろんだ。あと、雄二でいいぞ」

「りょーかい。これからよろしくな、雄二」

（side 鏡花）

あつ、吉井君行っちゃった

「のう鏡花、水月も存外腹黒い性格なのかの？」

「面白い人に対してはそう……」

「そうなのか。お主も大変じゃのう」

「そうかも……」

第二問（後書き）

これからは本文のネタの原作でもあとがきに書くつもりだと思います（何を
書けばいいのかまったくわからないので）
こんな作者ですがどうぞよろしく

第三問

「騙されたあつ！」

吉井が帰ってきた（ボロボロで）

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

「そんなこと言われても、俺は明久に頼んだただが？」

「そうだった。おい、水月のせいでこんなになっちゃったじゃないか！」

確かに制服も所々破れてるしなあ。

「すまなかった。本当にやるとは……」

「あつ、いや、水月の言ったことが普通なんだから。あまり気にしないで」

「…思ってたがな」

「うおい！わざとだったのかよ！」

当たり前だと思っが…

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路さんが吉井を心配して近寄ってきた。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

島田さんまでやってきた。

両手に花ってか？いいねえ。

「そう、良かった。ウチが殴る余地はまだあるんだ」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

……訂正、片方は花じゃなかった。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

おっ、やっとか。

「大変じゃったの」

「水月……弄りすぎじゃない？」

木下と鏡花か。なんか仲良くなったって感じか？

「いやあ、面白くってつい」

明るく元気に言ってみました。

「……………（サスサス）」

「土屋、畳の跡ならとくに消えてるぜ」

「……………！！（ブンブン）」

「転入生にまでバレてるのに否定するなんて、さすがムッツリーニ」

「……………！！（ブンブン）」

「何色だった？」

「みずいろ」

いや、即答かよ！

「なんつーか、凄いな。」

「……………！！（ブンブン）」

そんな馬鹿をやってたら島田さんが近付いてきた。

「ほら吉井。アンタも来るの」

吉井の腕を引っ張って行ってしまった。俺もついて行かねば。

で、屋上に来たんだが。

「出入り自由なんだな。ここの屋上」

「なんだ、前の学校は違ったのか？」

そうなんだよなあ。だから、ちょっと嬉しかったり

「原則立ち入り禁止だったな。せいぜい天文部が星見るときぐらいだ」

「ふーん。そういうところもあるんだね」

フェンス前を陣取って話始める。

「しっかし、何でそんな」

「仕送りが「すべて遊びに消えてるからな」雄二、セリフ被せないでよ！」

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

「ぬ？」

乗っかってみました。反省はしてない

ヴィー、ヴィー

「スマン、電話だ。先進めてていいぞ」

さっきと違う振動で、携帯を取り出しつつ距離をとる
相手は……愛子か

「もしもし、どうした？電話なんて」

『……メール見てない？』

「メール？スマン、気付かなかった」

『まあいいや。せっかくだから昼休み中、鏡花とこっちに遊びにこない？』

「今、クラスのやつらと色々話し合ってるから、ちょっとかかるけどそれでよければ」

『おっけー。じゃあ待ってるね！』

携帯を畳みつつ鏡花に近づく

「作戦会議終わったら愛子のところに行くぞ」

「……分かった」

「雄二、予定入ったから手短に頼む」

「ん？それは構わんがどうかしたのか？」

「いや、ちよいとAクラスの友達に呼び出されてな」

「そうか。なら今の点数と連絡先だけ分かればすぐに行ってもいいぞ。詳しくはメールしてやる」

「悪いな、恩に着る。これが俺達の点数とアドレスだ」

メモに殴り書きしてそれを渡す。

「おう。携帯だけは気にしてくれよ」

「りょーかい」

「……それじゃあ」

俺達は屋上を出てAクラスに向かう。

）side 明久）

「どれどれ、点数はつと……はあ!？」

「どうしたのじゃ雄二?……なぬ!？」

「秀吉まで……なあ!？」

「?どうしたんですか皆さん」

「吉井、一体何なのよ」

「水月たちがこれ程とは……」

そう言つて雄二がメモを島田さんたちに渡す。

「何これ、ものによつてはAクラス上位並じゃない!」

「私より高い教科もありますよ」

「二人合わせれば完璧ってか」

二人の点数は鏡花は理系に、水月は文系に片寄っている。
二人合わせれば学年トップにも匹敵するんじゃないかな？

「なんでこの点数でFクラスなんだろう？」

「私みたいな理由なら0点でしょうし」

「0点になってるの忘れてるとかじゃないでしょうね」

「そればかりは本人に聞いてみないことには何とも言えんな」

そう言つて携帯をいじり出す雄二。メールで聞いてみるのかな？

「まあ、後は返信を待つとして……………作戦を言うぞ」

（side 水月）

廊下を歩いていると携帯が振動した。

先生が周りにいないことを確認して携帯をひらく

「えーと、雄二か」

メールのタイトルに『雄二だ』って書いてあるし。

「ナニナニ、何でこの点数でFクラスなんだ？だと？」

「説明してない……………」

「忘れてたなあ。それじゃあ『後で説明するが点数はマジだ』うん。
こんなもんだろ」

そうこうしてる間にAクラス前に到着した。

「失礼しまーす」

ちよつと遠慮がちに扉をあける。

「……誰」

うおっ、びつくりした。

「えつと、2 - Fの影隠水月と影隠鏡花です。そちらは？」

「2 - A代表の霧島 翔子」

いきなり学年トップとご対面とは……

「工藤愛子さんに会いに来たんだが」

「……わかった。待ってて」

どうやら呼びに行ってくれるらしく、奥へと歩いていった。

「てか、鏡花はまた隠れてるし……」

「……ごめん……」

「別に、もう慣れた」

ちよつとしたら愛子たちの姿が見えてきた。

「やつほー。久しぶり。早かったね」

たしかに会うのは久しぶりなんだが、メールや電話でしょっちゅう話してたから実感がないな

「久しぶり。代表が、点数とメアド教えれば行っている。って言うてくれたからな」

「久しぶり……愛子」

再開の挨拶を一通りかわす俺達
そこで愛子の後ろにいる、木下に良く似た人物に気がついた

「えーと、そちらは？」

「木下 優子です。よろしく」

「ああ。影隠水月と影隠鏡花だよろしく」

「……木下って、秀吉君の？」

「ああ、うちの弟知ってるんだ。秀吉の双子の姉です。よろしく」

どうりで瓜二つなわけだ

「よろしく……」

「挨拶も終わったところで、話は戻るけど点数気にするってことは
戦争するつもりなのかな？」

「ああ。この後Dクラス戦だ」

最終目的がAクラスなのは伏せておく。（元々、Aクラス戦には参加しないつもりだがな）

その時、携帯が振動した。

「すまん、多分作戦のメールだ」

そう言って、一応周りを確認して携帯を出す。
内容は

『出来れば授業開始ギリギリまでAクラスで待機して、横から攻める。P・S 今回は低得点科目だけで戦え』

「どうだったの？」

「いや、時間ギリギリまでここにいて横から攻めろって」

なんともセコいやつだ。

「あと、点数の低い科目で戦えだとか」

「温存してるのかな？つてことは連戦になるんじゃない？」

「かもな。でもまあ、はからずも時間がとれたから色んな話すつか」
「そうだね」

こうして時間は過ぎていった

第三問（後書き）

どうも作者です。

作中で言ってる『屋上進入禁止』は作者の学校まんです。

田舎だからか？いや、逆に都会の方があぶないのでは…とか思ってた

第四問（前書き）

ほかの作者様の作品で『P V』突破』や『ユニーク』とか見た事はありましたが、嬉しいものなんですね！

そんな区切りはまだまだ先ながらも、見てもらえてることに喜びまくって更新しちゃう俺って…

そんなことより、第四問どうぞ！

第四問

「いやー、自己紹介はアイツのが傑作だったな」

只今、お互いのクラスについておしゃべりしてるわけだが

「誰？」

「吉井明久。分かりやすく言うなら唯一の観察処分者」

「ふーん。そんなに面白かったの？」

「ああ。ジョークで『ダーリン』と呼んでって言ったんだが、Fクラスなんて9割以上男子な訳で……」

「何かオチが読めちゃったんだけど……」

まあ、そうだろうな。

あそこまで説明してたら予想ぐらいはつくか

「そりやもう野太い大合唱だったぜ。お陰で『ダーリン』という言葉葉がトラウマになるところだった」

ありやマジで危険だ。面白くはあったが二度とごめんだ

「ダーリン（言っちゃった／＼／＼）」

「ちょっ、愛子……」

二人して赤面して俯く。なぜ愛子まで？と思ったたが多分予想外に恥ずかしかったんだろう。

「あー、えっと……そうだ、吉井と言えば、姫路が弁当作って来るのどうのって話が出てたがどうなったんだ？」

若干気まづくなったので鏡花に話を振ってみる。

……かなり露骨な話題転換だったが、まあいいだろう

「結局…みんなに作ってくるって……」

「ふーん。結局そこに落ち着い「それってどういう事?」「うおっ!」

びつくりした。愛子がここまで食いつくとは…

「（愛子、大丈夫。姫路さんの目的な吉井君だから）」

「（それは良かったけど、うーん……）」

「（水月をお昼に誘ってみれば?）」

「（ふえっ? い、いや、それは……）」

「（大丈夫。私は引つ込むから）」

「（いや、そうじゃなくて、あの、その……）」

「（まあ、とりあえず誘ってみれば?）姫路さんって料理得意なのかな?」

何かさつきまで小声で話してたと思ったら急にこっちに話を振られた。

「さあな。ある程度は出来なきゃあんなこと言わないと思うが」

「そ、そういえば水月と鏡花って料理は出来るのかな?」

「ん? まあ、人並みには出来るつもりだが……愛子は?」

「ボクもそれくらいかな。ねえ、せっかくだからお、お弁当の交換とかしない?」

「あ、ああ。でも、今日は無理だな。寝坊しちゃってパンだからな」

今朝買ってきた惣菜パンを見せながら言う

「じゃ、じゃあ明日あたりお互い作って来ようよ!」

「お、おう。じゃあクラスのやつらにも昼は用事あるって言うとか」

「…私はみんなと食べる。仲良くなりたし……」

「?まあ俺は構わんが、それでいいか愛子?」

「うん。クラスの友達も大事だしね(ありがとう鏡花!)」

「……愛子、教室移動」

「あ、代表。そっか移動だっけ」

「真面目だなあ。まだ10分前だぜ」

「……5分前には移動し終わっているのが基本」

「俺達のクラスじゃ考えられんな。移動するなら俺達もここ出た方がいいよな?」

「……別に。問題ない」

「代表もこう言ってるし。もうしばらくここにいれば?」

「悪いな。こっちの都合で……」

「ありがとう……」

「それじゃ。戦争頑張ってね!あと、明日期待してるから」

「おう。絶対勝ってやるさ」

愛子は霧島さんと出ていってしまった。外に一瞬木下さんが見えたから三人で行くのだろう。

「ってか、いつの間にか周りも誰もいないし」

どんだけ熱心なんだAクラス。

「電気……消されちゃったね……」

そう。クラスみんながないので霧島さんが消していったのだ。誰もいない(はず)の教室に電気ついてても怪しいからな

「まあ、下手に見つかるよりいいだろ。あとは開戦を待つだけだ」

第四問（後書き）

キャラが壊れてなかったでしょうか：
第二問のあとがきで『ネタの原作をかく』とか言ってるけれど、とくに使ってなかった

第五問（前書き）

バカテストが思いつきません…

第五問

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷり指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんなことはない。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立てあげてやろう』

廊下に響き渡る西村先生の声……どんな補習なんだよ。それ

「もうそろそろ行くかな？理系が多いみたいだから俺だけ出る」

「頑張つて……」

「おう！」

で、廊下に出たのはいいが……どうしよう？

『よ、吉井、早くフォローを！……』

少し手前（Fクラス側）に島田さん（と吉井）を発見。

『島田さん、君のことは忘れない！』

『ああっ！吉井！なんで戦う前から別れの台詞を！？』

なんかドロドロとした状態に見えるが大変そうなので加勢するか。

「Fクラス影隠がいきます。試獣召喚^{サモン}」

幾何学的な陣から出てきた召喚獣。黒いスーツを着たデフォルメされた俺の姿なんだが、武器は鎖鎌。良いんだか悪いんだか…

Fクラス	影隠水月	V S	Dクラス	清水美春
化学	68点	V S		
41点				

鎖についた分銅を敵に引っかけて思い切り引く。
引っ張られて近づいてきたところに一閃。首を切り裂く

「吉井い、女子見捨てるのはまずくないかい？島田さん大丈夫か？」
「ええ、助かったわ水月。補習の鉄じ 西村先生、早くこの危険人物を補習室にお願いします」

なにやらあだ名（おそらく鉄人だろう）で呼びそうになってなかったか？

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」
さっきも聞いたが補習室ってそこまですごいのか。

「……………影隠^{いせいの}水月、必ず殺します」

怖ええ。ボソツと言うからなのこと怖ええ

「吉井」

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻って化学のテストを受けてくるといいよ」

「吉井」

「さ、行こうか水月。戦争はまだまだこれからだ」

「吉井いつ!」

「は、はいっ」

あえて吉井の言葉にも返事をせずに傍観していたのだが…
ま、自業自得ってやつだな。素直に謝ればいいものを

「……ウチを見捨てたわね?」

「……記憶にございません」

「そう。水月は聞いてたのよね?」

「この事か?」

そう言っただけボイスレコーダーを取り出す俺。

『島田さん、君のことは忘れない!』

さっきの吉井の台詞だ。実は開戦したときから状況把握のため録音している。

「す、水月、貴様何の恨みがあつてこんなこと…」

「特に無い」

「この野郎!ふざけやがただだ、し、島田さんその関節はそつちには曲がらな……(ガクッ)」

あ、死んだ(というか気絶だが)

「しょうがない…みんな聞け!部隊長が行動不能の為臨時に俺と島田さんで指揮を執る。すまんが、須川君は雄二にこれでいいか聞いてきてくれ」

「わかった。すぐにいこう」

これでひとまず安心か？

転校生が部隊長代理つてのもおかしい話だが

「島田さん、教師の科目を教えてください」

「うん。あそこにいるのが化学の五十嵐先生、あっちの布施先生も化学よ。それであっちに立ってるのが総合科目の高橋先生」

指をさして教えてくれた。理系メインの戦場か……みんなそこそこ消耗してるし、

「布施先生の方は防御に専念。多少大袈裟にでも出来るだけ避ける！五十嵐先生の方は高橋先生の方と交代しつつ戦線を維持！」

いつまでもつか知らんが今のうちに作戦の確認を

「（島田さん、この作戦の要は姫路さんでいいんだよね？）」

「（うん。今補充試験を受けてて放課後になったら紛れながら代表を討つ予定よ）」

「（そうか。どうするか……）」

「水月、代表からの伝言だ『やれると言うならやってみろ。ただし失敗は許さん』だそうだ。あと、相手は数学の木内を連れ出したようだ」

最後の方について島田さんが「採点の早い先生」と説明してくれた。

「次はおそらく戦線の拡大を狙うだろう。もう一度悪いが、先生達に対する偽情報を流してくれ。内容に困ったら雄二に指示をもらえ」
「わかった。必ず騙してみせよう。」

そう言って走り去る須川君。

雄二ならきつと何とかするだろう。頭の切れるやつのもうだからな

「さて、じゃあ俺達も適度に援護するか」

「そうね。部隊長の代わりだから戦死はしないようにしないと」

心なしか『部隊長の代わりだから』を強調してないか？

しばらくすると放送が入った。

《船越先生、船越先生》

おっ、さっき相手の部隊長らしきやつ（塚本だっけ？）が言ってた先生だ。

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

良く分からないが良いのかこれで？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

うん。忘れよう。クラスの連中が「水月、何て冷酷な奴だ」とか言ってたが、俺はここまで指示しじゃない。

「戦死！」

「こっちもまずい。応援を」

だいぶ消耗してきたな。

「水月、後ろから援軍が！」

言われて振り向くと遙か後方に雄二たちのいる本隊が。

『合流させるな！全員討ち取れ！』

ちっ、間に合わん。こうなったら、

「総員、後退しろ！」

言いつつ『ある2つのモノ』を地面に落とす。

バンツという音と共に召喚フィールドが消滅し、辺りが煙に包まれる。

『何が起きた！？』

『フィールドが消えたぞ！』

『前も見えない！』

だいぶ近づいてきたな。

「総員構えろ！合流でき次第攻めるぞ！」

視界が遮られたこの状態であえて大声で指示を出しつつ、落としたものを拾う

片方は単なる煙幕だがもう片方は特殊な電波を出して召喚フィールドを崩すものだ。

「待たせたな。行くぞ」

隣に来た雄二の声と共にスイッチを切る
もう視界は大部分回復している

「Fクラス近藤がいきます。」

「じゃあ俺も。同じく影隠いきます」

軽く追い詰めていく

『ここは退くぞ！全員遅れるな！』

まあ、そうなるよな

「あまり深追いするな。俺達も退くぞ！」

対峙した敵を鎌で切り裂き雄二の元へ

「こんなもんで良かったか？」

「上出来だ。予想よりかなり良い」

さて、Dクラスも退いたことだし

「俺達も戻って回復しないとな」

「ああ。みんな一度教室に戻るぞ！」

テストの後

「すーいーげーっ」

何か吉井が迫ってきた。包丁持って……

「なんだよ。そんなもの持って」

「死ねえええ!!」

「うおっ!」

なんだコイツ、人間離れした速さで突きだしやがって

「どうせあの放送もおまエなんだロウ。報イヲうケロ!」

「ちよつと待て吉井!放送自体はそうだが内よ「やはりヲマエカ!」
おい!最後まで聞け!」

完全に人外じゃね?今のコイツ

「内容を指示したやつを知っている。攻撃を止める」

「そんなウまいはナシがアルか」

「大体、あの放送の船越って誰だよ?」

沈黙。ながーい沈黙。そりやもうながーい沈黙

「そうだよ。水月がそこまで知るはず無いヨネ」

若干、壊れたままな気がする……

「で、内容を指示したやつは?」

「おそらく雄二だろう」

「ありがとう水月。あと、僕のことは明久でいいよ」

「そうか。頑張れよ明久」

「うん。さてと、雄二はつと」

あたりを見回しているところ悪いが真後ろにいるぞ

「俺がどうした?」

「ちょうど良かった。雄二、あの放送…」

「もちろん俺だが？」

「シャアアア！」

「あつ、船越先生」

雄二の言葉で即座に清掃用具入れに。あそこからどうやって急停止できたのか謎だ

「馬鹿はほつといて行くぞ。もうそろそろ下校時刻だ」

雄二のやつあれで止まれなかったらどうするつもりだったんだろうか…

「参戦出来なかった……」

鏡花も戻ってたのか。確かに理系か総合科目しか無かったしな。

「今度はワシらも文系の先生と共に出陣じゃ。機会はあるじやろう」
「……………（コクコク）」

みんなやる気だしてるねえ。

「おつしや。Dクラスの大將を討ち取るぞ」

『おうつ！』

みんなが教室を出ていく中、まったく動かない奴が一人。

「明久、多分だがさっきの雄二の台詞は嘘だぞ」

「マジで？」

超がつくほど小声で聞いてくる。そこまで脅威なのか？その船越と言う先生は

「おそろくな。廊下を女の先生が通ったが多分それも違う。結構若かったし」

ドバンツ！とロッカーが内側から開く

「ありがとう水月！マッテてユウじ。スグいくから」

また吉井が壊れた。

「さてと、俺も行くか」

戦況を見つつ参戦しようと思ったら、とおくで姫路が召喚してるのが見えた

「あれ？ゆっくりしすぎた？」

第五問（後書き）

明久壊しすぎたかな？でもこのくらいいいきそうですよね！うん。そうに違いない（自己完結）

第六問

Dクラス代表 平賀源二 討死

「あー面白かった。初日から戦争を体験出来るとは…」

「おい水月、どこ行くつもりだ？」

「どこ行くつもりも何も帰るんだが…」

「まあそう急がなくてもいいだろう。明久、水月と教室で待っていてくれ」

「いいけど、雄二は？」

「平賀に伝える事を伝えたら行く」

「分かったよ。じゃあ後で」

ちつ、まあいいか。

数分後、教室には明久、雄二、木下、土屋、島田さん、姫路さん、鏡花、俺が集まった訳だが、

「まず最初に、なぜその点数でうちのクラスなんだ？」

「うーん、一言で言うならこっちの都合で転入時期をずらしてもらったから強制的にFクラスって訳」

「つまり、わがママを通す代わりにFクラスにする。って感じか」

わがママで……これにはちゃんとした理由があるんだがな

「まあ、そうとも言えるな」

「じゃあ次が本題だ。戦争中に使ったあれはなんだ？」

「あれ？煙幕のことか？」

「とぼけるな。フィールドを壊したやつだ」

やはり流されないか。

「あれね。まだ試作段階だったんだが…」

そう言いつつ制服から取り出す。

「こいつは特殊な電波を出す装置でな。フィールドを作ることとはできないが、崩すだけなら簡単だ」

「つまりどういう事なんだ？」

「分かりやすく言つとつりあつてゐる天秤に重りを載せるようなものだ」

みんな何となく分かつたつて顔してゐるな。（例外として頭から煙だしてゐるやつ一名）

「つまり、つりあつてゐる天秤がフィールドじゃとして…」

「重りが載るとバランスが崩れる。そうすると…」

「……フィールドの自壊」

「まあ、そんなもんだ。元々科学とオカルトのバランスが大事なシステムらしいからな。で、他に質問は？」

「質問ではないのじゃが」

「ん？何だ木下？」

「その『木下』というのをやめてほしいのじゃ。ワシにも同学年に姉がおつての」

「ああ。そういえばAクラスにいたな」

「なんじゃ。姉上に会つておつたのか」

「昼にちよつとな。じゃあ秀吉でいいよな」

「うむ。よろしくじゃ」

「……オレも康太でいい」

「りょーかい。で、秀吉と康太以外は何かないのか？」

「じゃあウチいいかしら？」

「おう。何だ島田さん」

「さっきのやつ、自作したみたいに聞こえたけど、自作でいいの？」

「そうだぞ。趣味で作った」

「確か機械いじりって言ってたっけ」

明久にはよく覚えていたな。

「じゃあ、他にはどんなもの作ったの？」

「うーん、色々あるが分かりやすいのだと…警備ロボットかな」

「やけにハイレベル！？」

きれいにハモったな。

「でも、自爆機能ついてなかった……？」

「ええっ！？」

「他には…ピッキングツール」

「犯罪だぞー！！」

「これにも自爆機能が……」

「何故！？」

「あとは携帯式充電器「自爆機能つき……」おいつ！」

「自爆から離れる！」

「しょうがない。じゃあ……」

「長いよ！自爆禁止しただけじゃないか！」

「ああ、あれがあつた。外付け式パンチ力強化マシン」

「なんか物騒な響きね」

「そうか？単純に腕につけた機械でパンチの勢いを強めるだけだ」

「一応聞くけど、自爆は？」

「しない。腕全体をマシンアームみたいに覆うからな。自爆なんかしたら大変だ」

「（それ以外も駄目じゃない？）」

「でもそれでパンチ打つと肩がムグッ」

「（おい、ばらすな鏡花！）」

鏡花の口を塞ぎつつ囁く。

「『肩が』何！？肩がどうなるの！？」

ちっ、しょうがない。

「脱臼」

『駄目じゃん！！』

そんなに一斉に言わなくても……

「ちなみに水月は自分で試して脱きゅムゲツ」

「（そこはばらすなあああ！）」

もうみんな察してニヤニヤ顔でこっち見てるし…

「ねえ、『脱臼した』でいいのよね？」

し、島田さん。それは……

「ノーコメント！」

そう言つて煙玉の予備を発動。

「おい水月！こんなところで使っな！」

雄二の声がしたが構っている暇はない。
先ほど出口の方向は確認済だ。

「ふう。いじめにあつた気分だぜ」

とりあえずもう帰ろう。

（side 鏡花）

「窓開けてればすぐに消える……」

「分かったのじゃ。確かこの辺りじゃな」

秀吉君が窓を開ける音がする。

「風もあるようじゃし、これでいいじゃろう」

「しつつかし、アイツは何者だまったく。あんなもの作れるなら有名になつてもおかしくないぞ」

「そうだよな。その内召喚フィールドも発生させられるような気がする」

「そうじゃのう。趣味のレベルではなかったぞい。水月は何故あそこまでの技術を？」

「それは……その……」

そこを聞かれると痛い。

「すまんのう。先ほどの質問は撤回するのじゃ」

何も聞かないでいてくれた……ありがたいけど、つらい。

「まあ、人には大なり小なり秘密があるものじゃ。言いたくないなら言わんでいいのじゃ」

「ありがとう……」

「さて、水月は逃げたが聞くことは聞いたし俺達も帰るか」

もう外薄暗くなっている。

「そういえば、鏡花は家はどこなのだ？」

「……です」

「それなら秀吉の家が近いね」

「そうだな。水月は先帰っちゃったし、送っていつてくれるか？」

「もちろんじゃ。鏡花さえ良ければじゃが」

「えっと、じゃあ……お願いします」

そういったらみんなそれぞれに帰っていった。

「それじゃあワシも行かのかの」

「うん……」

それからなんてことない雑談をしながら校舎をでた。
しばらく歩くと家の近くについた。

「家あれだから。ここでいいよ……」

「うむ。ではまた明日の」

そう言っただけで、家の前で振り返ると別れた場所にまだ秀吉君が立っていた。私は嬉しくなつて秀吉君に見えるように手を振る。秀吉君も振り返してくれた。

こんな風に手を振るのは子供のとき以来だと思い返しながら家に入つていった。

第七問

翌日、遅刻しない程度の時間に教室に到着

「おう雄二。早いな」

「そうでもないだろう。お前が遅れぎみなんだ」

「遅刻さえしなきゃ大丈夫だろ。ところで、Dクラスとは結局どうなっただ？」

「条件付き和平交渉で平和的解決となった」

あんだけ派手にやっというて何が平和的だ

「条件付き？設備以外にか？」

「いや、設備は交換しない。詳しいことは……今からみんなの前で言おう」

周囲を見て大体揃っているのを確認して壇上に立つ雄二

「みんな聞いてくれ。昨日の戦争の事だが、設備は入れ替えない！」
「なんだって！？」

『昨日の戦いは無駄になるのか！？』

「落ち着けみんな！あくまで昨日のはウォーミングアップだ！それに次への布石でもあるから、断じて無駄ではない！」

そこまでは何となく予想がつくが、それ以降が分からん

「次はBクラス戦だ！Dクラスにはその作戦のため動いてもらう！ただ、どこから漏れるか分からんから作戦中に随時話す！」

結局教えないんかい！

「Bクラス戦が終われば次はAだ！気合い入れてテストを受ける！以上」

壇上からこつちに向かってくる雄二

「雄二、俺達にも教えないつもりか？」

「そんなことはない。後で話すさ。昼休みにでもな」

昼休み、だと？

「すまん、昼休みはまたAクラスに呼ばれてるんだ」

「そうか。かといってここで話すのもな……」

「じゃあ質問を変えよう。俺はその作戦に入っているのか？」

「大きな意味では入っているが、中心からはだいぶ遠い位置だな」

「そうか。ならみんなと同じく随時聞くとしよう」

その時、明久が登校してきた。ギリギリだな

「そういえば雄二、一時間目のテストって何だっけ？」

「ちよつと水月、僕は無視なの！？さっきこつち見たよね」

「ああ、いたのか明久。視界に入らなかった」

「眼中にない！？」

「水月、一時間目は数学だ」

うわっ、いきなりかよ

理数系は苦手なのにな……

「雄二まで僕を無」監督は船越だったな」ゴメン、用事ができた」

災難だな明久。だが、雄二を殺ることより逃走とは……

昼休み

（side 秀吉）

「うあー……づがれだー」

午前中のテストや船越先生の事があったのじゃ。そうなくてもおかしくないのう

ちなみに、近所のお兄さんを紹介して事なきをえたらしいぞい

「うむ。疲れたのう」

「……………（コクコク）」

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

雄二は相変わらずすごい食欲じゃのう

「じゃあ俺はここで抜けさせてもらおう」

そう言って歩き去る水月。たしか友人に呼ばれておるのじゃったか

「秀吉君……………」

「ん？どうしたのじゃ鏡花」

「姫路さんのお弁当……………」

「おお、そういえばその様なことを言っておったのう」

「は、はい。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

そう言って後ろからバッグをだしてくる姫路。明久の為に頑張っ

おるのう

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったあゝ」

明久も好意に気付かないものじやのう

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

島田ももう少し優しくすればいいじやろうに……

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「そうだね」

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

それはありがたいのう

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

島田よ、その気遣いは明久には向けられんのか？

「きちんと俺達の分をとっておけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる」

そう言って教室を出る二人。おおかた一階の売店じゃろう

屋上に出て姫路の用意したビニールシートにみんなで腰を下ろす

「あまり自信はないですけど……」

姫路が重箱を開ける。なんとも美味しそうな弁当じゃ

「美味しそう……」

鏡花も同意見のようじゃのう

「一部はレシピそのままになっちゃいましたけど」

「そんなこと気にしないよ。それじゃ、雄二には悪いけど先に……」

「……………（ヒョイ）」

明久が食べようとした時にムッツリーニが先制しおった

「あ、ずるいぞムッツリーニ」

「……………（パクッ）」

バタンッ

ガタガタガタガタ

なぬ！？ムッツリーニが倒れおったぞい

「わわっ、土屋くん？」

ムクッ

「……………（グッ）」

美味しいと伝えているんじゃないが、明らかに演技じゃない

「じゃあ、私も……………」

しまったのじゃ！鏡花が気付いておらぬようじゃ！

「（ムグムグ）美味しいれす姫路しゃん」

呂律がまわっておらんぞ？

まさか、ムツツリー二とは違い精神が……

「あれっ？鏡花ちゃんどうしたんですか？」

「何か顔赤いよ。大丈夫？」

言われてみればそうかもしれないのう

「鏡花よ、大丈夫かの？少し横になっではどうじゃ？」

「ひでよしくんわたしにやららいじょーぶですよー」

『（キャラが崩壊した！？）』

これはどうみても『あれ』じゃろうなあ

「もしかして鏡花、酔った？」

「姫路、一つ聞いてよいかの」

「何でしょうか？」

「先程鏡花が食した料理に酒類を使ったかのう？」

「えーと……そうです。使いました」

あの間から察するにあの料理はレシピどおりらしいの。そうでなければ、ムツツリー二の二の舞じゃろうし

「だったらアルコールが飛んでなかったのかな？」

「その様じゃのう。しかしこのままでは……！！こらっ、鏡花、何をしておるのじゃ!？」

後ろから抱きついてきおったぞ

「ひでよしくんおはなししょー」

「待つんじゃ鏡花。お主何をしているかわかっておるのか!？」

「うん！だきちゅいてる」

なにやら幼くなっておらんか!？

「もっとおはなししたいよー」

「それよりもまずこの後の事じゃ!」

「そうですね。このままでは午後のテストが……」

「それよりもクラスメイトの反応の方が……」

なんとも問題じゃな

「むー。ひでよしくんつめたいです。こんにゃにしゅきにゃのに……」

……なんじゃと？

『な、なななな、何いいい!??』

明久も姫路もこっちを見るでない！ワシも混乱しておるのじゃ！

「秀吉、どういうことなんだい？」

「むしろワシが知りたいのじゃ」

「何か好かれるようなことありましたか？」

「そうじゃのう……」「しちゅもんじえめからたちゅけてくれたのー」
「そういえばそうじゃったのう」

「恥ずかしがり屋な女子……むさい男子からの救出……もうこれど
ストライクじゃない？」

じゃがそう特別なことでもないじゃろう

「羨ましいです……」

姫路もそういったことに弱いのだろう

「と、とにかくじゃ、今はこの後の事をじゃな「酔った時って本音
が出やすいって言うよね？」あ、明久うるさいぞい！」

このままでは弄られるだけじゃ。かくなる上は…

「とりあえず保健室に運ぶぞい。よいな鏡花？」

……？返事が…

「秀吉、しー」

「鏡花ちゃん寝ちゃってます」

なんじゃと！？この体制のままじゃと言うのか

「むにゃむにゃ……ひでよくん……」

「／／／／／」

「どうせだからそのまま保健室行てきなよ」

「そうですよ。起こすのはしのびないですし」

「ま、まあそうじゃな。では行ってくるのじゃ」

その後保健室までに二、三度「好き」と言われ赤面したのはまた別の話

第七問（後書き）

すみません。酔っ払いイベントがやりたかったんです…
微妙だったかな？

第八問

少し遡って昼休み開始時

side水月

何かみんなに申し訳ないなあと思いつつもAクラスの前まで来た俺

「失礼しまーす。工藤愛子さんいますかー？」

「水月くんだっけ？今日は一人なんだね」

声をかけられ振り向くと木下さんと霧島さんが立っていた

「あ、木下さんに霧島さん。まあ鏡花はクラスのやつらとな」

「ふーん、そうなんだ。愛子ならあっちにいたわよ」

そう言つて教室の奥を指差す木下さん

「てか、勝手に入つていつていいのかよ」

「……大丈夫。設備は違うけど基本的には気にしないでいい」

まあ他クラス行くだけならここまでビビらないんだが、いかんせんこのクラスの設備が凄すぎて……

「そこまで気になるんだつたらこのクラスのみんなと話してみれば？みんなと知り合いなら気にせず入れるんじゃない？」

「まあ、それも一つの手だな。とりあえず今は愛子のところに行くわ」

「うん。それじゃあ私達はこれで」

「……また」

「おう。サンキューな」

さて、愛子が居るという方向へ

「えーと……あつ、いたいた」

愛子の後ろ姿を発見。来るのはわかっているはずなのになぜ背を向けて座っているんだ？

「よっ、愛子」

「わひゃあ！」

いや後ろから声かけたぐらいでそこまで驚かんでも……

「って、水月か。まったく驚かさないでよ」

「悪い悪い。ついな」

「まったくもう」

「そう怒るなつて。驚いた顔も可愛かったぜ」

「／／／／／／／／」

顔を真っ赤にして俯いちゃった。

「（可愛いって言うてくれた……嬉しいけど、恥ずかしい）」

「……やっぱセリフがくさすぎたか？」

沈黙されて不安になってきた

「いやいや、そんなことないよ。可愛かったって言われるのだってう、嬉しかったし（あんなセリフを普通に言えるのに何でボクの気持ちには気付かないのさ）」

モジモジという表現を体现しているかのような状態で言われると何か照れるな。

「……………」

「……………」

「えー、あー…そうだ。弁当食べようぜ」

流れを変えようと弁当を差し出す俺

「う、うん。そうだね」

愛子の方も鞆から弁当を取り出す

「あんまり自信はないけど……………」

「どれどれ…お、うまそうじゃん」

弁当箱には厚焼き玉子をはじめとするオーソドックスな料理たちが

「じゃあこの玉子焼きから（パクッ）ムグムグ」

「ど、どう？」

「うまい！だしの加減も俺好みだし」

「そう？良かった」（鏡花に水月の好み聞いておいて良かった…）

「うまいうまい。ん？愛子は食べないのか？」

まだ蓋もとってないし。

「そ、そうだね。えいっ」

かけ声と共に蓋を開ける愛子。かけ声は必要なのか？

「うわぁ。ボクのため美味しそう」

「そうか？俺は愛子のやつの方がつまそうに見えるが……」
「いやいやそんなことは……」

唐揚げを食べる愛子。そういえば他人にはあまり食べさせたことがなかったな

「ボクの前より美味しい気がする……」

「ま、味の好みは人それぞれだからな。たまたま愛子の好みの味だったんじゃないの？」

「そうかもしれないけど」

雑談しながら弁当をたいらげる

「いやー、旨かった。サンキュー愛子」

「いやいやこつちこそ。……また、こういう事やりたいな」

「確かに。いつそ曜日を決めて毎週やつてもいいな」

「えっ、でも迷惑じゃ……」

「いやお互いに作ってくるなら迷惑でもないだろ。さすがに毎日は大変だろうし、週二日なら火・木、週三日なら月・水・金みたいにしてさ。愛子はどうだ？」

「せ、せっかくだから週三日がいい……かな」

「俺もそれでオッケーだ。元々自分の分は作ってたからさして変わりはないし」

「じゃあ、そういうことで」

「おう。まだ時間あるし……」

《生徒の呼び出しをします》

校内放送が流れる

《2・F影隠水月、至急学園長室まで来てください。もう一度繰り返しします……》

「ちょっと水月っては何したの！？学園長室に呼び出しなんて……」

「さあ？わからない。でもまあ行ってみれば分かるだろ」

「あーあ、もつとおしゃべりしたかったな。でも呼び出しなら仕方ないよね」

「すまん。また今度な」

「うん。行つてらっしゃい」

そんな風に送り出されると何か変な感じが……

「行つてきまーす」

く Aクラス side

「まるで新婚さんのようなやりとりだったわね。主に最後が」

「な、なな何の事かな？優子」

「……羨ましい」

「だ、代表まで……」

「でも大変そうね。彼無自覚っぽかったし」

「というか、二人とも何時から聞いてたのさ」

「……一部始終」

「だって、彼に愛子の場所教えたのも私達だもの」

「えー？じゃ、じゃあ」

「『驚いた顔も可愛かったぜ』とかも聞こえてたわよ。私も一度ぐらい言われてみたいわ」

「いや、あの、その……」

「うわっ。そこまで赤くなる？顔真っ赤よ」

「…私も……雄二に言われてみたい……」

「
「（代表の驚いた顔……あんまり想像できない）」
」

第九問

学園長室前

「あー、嫌だな。多分昨日のあれだよなあ……」

フィールド崩すやつ、使っちまったし。学園長にまで話がいったのか

「さて、と」

コンコン

「先ほど呼び出された影隠水月です」

『入りな』

室内からの応答に「失礼します」と言って入る。

『ば、化物！』とか言ってみたくなるような高齢者（学園長、藤堂カヲル）がいた

「なぜ呼び出されたかはわかっているだろう？」

「昨日の事、ですよ？」

「そうさね。ただの一生徒があんなこと出来るはずがない。そこで……」

そう言っただけ資料らしき紙束をこちらに放ってきた

「色々調べさせて貰ったよ。色々ね」

「その様ですね。両親の仕事内容まで調べてありますし」

「『両親』だけじゃないだろう？」

「ええ。まさか『俺達』の方までバレてるとは……」

「そこで話を戻すが、昨日の事を不問にしてやってもいいよ」

「……条件は何でしょう？」

「なあと簡単なことさね。アンタの技術を提供してもらいたいのさ」

「こんな若造の技術を、ですか？」

「最新技術に関しては若者の力を借りるのは良いことさね。それよりもうちの技術者に欠員が出ちまってね。その穴を埋めるのにちょうど良いタイミングでアンタを見付けたのさ」

「理由は分かりました。ところで、それは学園長としての『命令』ですか？」

「いいや、これはアンタ個人への『依頼』さね。『支援者』へのね」

依頼、ですか……

「それでしつらまず、期間、報酬、その他注意点などを明示して頂きましょう」

「期間は卒業まで。報酬は昨日の事を不問にする事。諸注意としてはシステムの情報は部外秘だということぐらいさね」

「長っ！そして安っ！！ 失礼。さすがに約二年間でそれは無いでしょう」

「報酬に関してはさすがに冗談さね。じゃあ、どの程度追加すれば動くんだい？」

「そうですね……俺と せいぜい鏡花ぐらいですから、期間内において俺の個人的行動について黙認、または許可をしてください」
「つまりはよほどの事がない限り自由に生活させる。ということかい」

「まあ、そうですね。クラスがクラスだけに問題はしゅっちゅうでしょうし」

「いいだろうその条件で。ただし、今後はシステムに影響のありそうな物は一度確認をとってから使いな」

「もしかして、昨日も影響ありました？」

「当たり前さね。お陰でこっちは大忙しだったんだよ」
「それはそれは。失礼しました」

まあ試作品だったししょうがないさ。

「話は以上さね。っと、忘れるところだったよ」

そう言っただけの机の上の電話を操作する
あ、携帯が……

「連絡は今かけた番号からするから、ちゃんと分かるようにしときな」

「分かりました。では、失礼します」

やっと化物から解放された。（実質首輪つけられたようなものだが……）
さて、まだ時間はあるが……雄二達のほう行くか。また屋上に行つたようだったし

屋上

「で……何？この状況」

簡潔に表すと死屍累々

「あ、水月。呼び出されてたけど大丈夫なの？」

「気にするな明久。昨日のやつをもう使っなくなって言われただけだ。

（嘘だけど）ところでこの状況は？」

「話せば長いことながら……」

「略せ」

「お弁当型バイオ兵器の結果」

えらく小声だな。まあ、制作者（であろう人物）の前でバイオ兵器はないわな

「お弁当にお酒を使っていたんですけど、アルコールがとんでなかったらしくて……」

姫路さんがそう言うてくるが既に明久から真実を聞いているし「そうそう。みんなお酒弱かったのかな？鏡花とかスゴかったし……」
なんだと！？

「アイツは？」

「酔っ払って幼児化して保健室にて熟睡中らしいよ」

やっぱりいつも通りか

「らしい？」

「秀吉が連れていったからね。僕達はここにいたし」

「まったく、大変だったぞい。鏡花は抱きついて来る上にあのよう
な言葉を……」

何なんだ？復活した秀吉が説明しようとしたが、なぜか赤面して俯
いちゃまった

「あのね水月。鏡花が秀吉に『好き』って「これ明久！言うでない
！」」

ほう。鏡花は秀吉が好きなのか。なぜ秀吉なのか今度聞いてみよう

「そうなのか。アイツは酔うと『心から思っている事』が駄々漏れ

だからな」

「心から思っている事……」

秀吉がさらに真っ赤になっていく。もう既にトマト状態だ

「さて、雄二達を起こすか」

「でも、そう簡単に起きるかなあ？」

「荒療治になるがこれなら一発だ」

制服から取り出した物は

「万年筆？」

「それでどうするっていうのじゃ？」

「これが実は小型スタンガンでな。ペン先から電気が流れるんだ」

「それって危なくないんですか？」

「まあ市販品だし。大丈夫だろ」

「でもやっぱりあぶないよ。せめて島田さんはやめておこうよ」

島田さんまで犠牲者だったとは……どっち（アルコールorバイオ兵器）のせいなんだろうか

「わかった。じゃあこれは雄二だけに使おう。姫路さん、悪いけど康太を起こしてくれ」

「わかりました」

数分後

「明久いつか殺す」

「雄二、理由は知らんがせめて心の中だけにとどめろ」

『ねえ、ウチさっきまでの記憶が無いんだけど……』

『アルコールが残ってたから酔って寝ちゃったし、そのせいじゃな

い？」

上手いこと流したな。さすが明久

「ところで雄二、Bクラス戦はどうするんだ？」

「そうだなあ、宣戦布告は明久でいいとして……」

「よくないよ雄二！今度は二人のどっちかが行ってよ」

「断る！」

「即答するなよ！バカ雄二にバカ水月！」

「しょうがないな。じゃあジャンケンにしよう」

「心理戦ありでな」

「わかった。それなら僕はグーを出すよ」

かかったな。

「「そうか。それなら俺は」」

「何も出さない」

「えっ、そういうのありな「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」
ええっ！？ちよっ、まっ」

えげつないなあ雄二。便乗はするがな

「じゃ、いくぞ。ジャンケン」

「わああっ」

パー（雄二、俺） グー（明久）

「決まりだ。行って来い」

「絶対に嫌だ！」

悪あがきをしておって……

「敗者は勝者に従うべきだろうが」

「Dクラスの時みたい殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

まあ、そうだろうな

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する」

いやに自信満々だな。というか楽しそうだ

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

これで終わると思えんが……

「でも、お前不細工だしな……」

やっぱり。そうきたか

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

おい、それは……

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「一部から見ると美少年………？」

「9割以上不細工だがな」

「みんななんて嫌いだっ」

俺も間違えたことあるがな。……小学生の時に

「とにかく、頼んだぞー」

「心の片隅で安全を祈ってない」

「祈ってないのかよ！もう、行けばいいんでしょ」

ズカズカと屋上を去っていく明久

「さて、午後もテストだ。それぞれベストを尽くそう」

ぶっちゃけ俺達はほとんど必要無いんだが一応全教科受けている

「雄二こそ頑張れよ」

「代表が出陣なんて事態にはならないつもりだがな」

「しかし、相手はBクラスじゃぞ。下手をすれば攻め込まれかねないのじゃ」

「わかってるさ。んじゃ、教室に戻って悪あがきでもするかな」

雄二の言葉を合図にしたかのようにみんな屋上をあとにする

放課後

「……言い訳を聞こうか」

千切れかけた制服を押さえながら明久が聞いてくる

「何の事だ？」

わかってはいるんだがな

「雄二なら分かるよね？」

「予想通りだ」

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

「落ち着け」

「ぐふあっ！」

綺麗にきまつたな。あれは鳩尾だな

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

そう言つて颯爽と去っていく雄二。

「えっと、ご愁傷さま？」

俺も帰ろ。後ろで何かわめいているが気にしない

第十問（前書き）

オリキャラ三人目登場！

第十問

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

午前のテストも終わり昼飯を食った後（今日はクラスで食った）、雄二が教壇で話しはじめた

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

「そこで、前線二部隊は姫路瑞希と影隠鏡花に指揮を取ってもらっ

なんでも、姫路さん率いる部隊（25名）が特攻して鏡花の部隊（15名）が状況に応じて攻めたり、撤退の援護をするらしい。俺？俺は近衛兵らしい（理系中心で攻めるらしいからな）

「が、頑張ります」

「頑張り……ます」

『うおおーっ！』

やっぱり数少ない女子と一緒に戦えるのは嬉しいんだろうか？

「指揮官補佐は姫路に明久を、鏡花には……誰がいい？」

親しいやつを選んでいるなら多分

「じゃあ、秀吉君で……」

「わかった。良いよな秀吉？」

「う、うむ。問題ないのじゃ」

赤面してるけど本当に問題ないのだろうか？

恐らくは鏡花の気持ちを聞いて（しまって）変に意識しちゃってるのかな？

「秀吉、一つ教えてやろう」

「？何じゃ水月？」

「アイツは酔っ払うと……記憶が飛ぶ」

「なんじゃと!？」

声でかつ。演劇部で鍛えた力、フルに使ってただろ

「どうした秀吉、急に大声出して」

クラス中が視線を向けるなか、雄二が聞いてくる

「な、ななな何でもないのじゃ！本当に何でもないのじゃ!！」

「あ、ああ。了解した」

絶対に了解してないだろうが

「ねえ水月、何言ったの？」

「ああ、明久。単に鏡花が酔うと記憶が飛ぶと言っただけだ」

「…………絶対面白がってるよね？」

だって、秘めた思いをはからずも知ってしまったなんて小説みたいじゃん。

「小説の様に両想いになるかが見物だな」

「やっぱり面白がってるし。可哀想に秀吉」

キンコーンカーンコーン

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

前線部隊が出撃していった

（side 鏡花）

前線指揮を任された私と瑞希ちゃんは、皆に置いていかれそうになりながらやっと前線にたどり着きました

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

『来たぞ！姫路瑞希だ！』

『もう一人いるがそいつはどうする？』

『噂で聞くようなやつじゃない。何とでもなるだろ』

まだしばらくは撤退の援護は必要なさそうだし……

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込めます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

やっぱり瑞希ちゃんは先に倒したいのかな？

「じゃあ私はそっちの人に申し込めます」

「えっと、影隠鏡花です。よろしく願います……」

「「「試獣召喚!」」」

魔方陣のようなところから小さな私が出てくる。

黒いスーツに頭にはヘルメット型のモニターみたいな物?を被って、両手にはまるで氷で出来た様な双剣を持っている。

「う、腕輪!?ちょっと嘘でしょ!?!」

瑞希ちゃんと私の召喚獣はそれぞれ特殊能力の腕輪をしていた。

「じゃ、いきますね」

「いきます……」

瑞希ちゃんは光線を出す能力のようだった。私は能力で行動の速度を上げて敵を切りつける

Fクラス	姫路瑞希& amp ;	影隠鏡花	VS	B
クラス	岩下律子& amp ;	菊入真由美		
数学		412点	& amp ;	530点
VS	189点	& amp ;	151点	

「い、岩下と菊入が戦死したぞ」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ!」

「もう一人は転入生らしい。そちらも気を付けろ!」

私達の戦いを見て相手も驚いているみたい

「み、皆さん、頑張ってください！」

「その調子……」

『『やったるでえーっ！』』

皆も頑張っているみたい

「鏡花よ、少しよいかの？」

「何？秀吉君……」

「少し教室の様子を確認してきたいのじゃ」

確かに少し気になりけど……

「相手の代表がの、大層卑怯なやつでな。何をしてくるかわからんのじゃ」

「……わかった。お願いしていい？」

「無論。ワシから言い出したことじゃしな」

秀吉君、行っちゃった……

少し前、教室にて

side水月

「おい雄二。俺は今すぐ暇なんだが……」

「どうせお前は理系は低いだろうが。それに、向こうは文系が多いらしいからな」

つまり、最終防衛ラインとしておかれている訳か

「まあ、いいや。廊下の様子でも見て暇潰しするさ」

そう言つて廊下側の窓を開けると、見知らぬ顔が近づいてきた。

「えーと、どちら様で？」

「Bクラスの者だが、代表は居るか？」

「何が目的で？」

「協定を結びたくてな。我が代表が呼んできてくれと」

「少し待ってくれ。雄二！」

「どうした水月？」

「Bクラスが協定を結びたいそうだ」

「内容にもよるが……どんな内容なんだ？」

「詳しくは話し合うつもりらしいが……特定の時間まで戦争が続く場合、翌日に持ち越しにしよう。とのことらしい」

「ほう。ならいいだろう」

「姫路や鏡花のことを考えて、か？」

「まあな。こちらとしては願つてもない好条件だ」

そうかもしれないが出来すぎでないか？

「まあいいや。一応この会話は録音させてもらった。代表に何かし
ようものならこれを盾に抗議すればいいしな」

「ずいぶん用心深いな水月」

「うまい話の時にはとりあえず疑うようにしている」

「そうか。じゃあ、行ってくる」

「それなら近衛兵はいらないし、ちょっと前線の様子見てくるかな」

雄二と使者のやつと共に教室を出る。適当な場所で別れてすぐ教室へ

「なあにをやってるのかなあ？」

教室にはBクラスと思われる生徒が数名、ペンや消しゴムなどを手

に硬直していた

『な、なぜここに!?!』

『やつは前線を見に行っ たんじゃないのか!?!』

『落ちて皆!』

ん?何か聞き覚えが……

「紫!?!お前、何でここに?」

「久しぶりだな」

そこには幼馴染で高校に入るときに離れた水明山^{すいみょうざん} 紫^{むらさき}がいた。

「とりあえず全員、手に持っている物をおろしてもらおうか」

「待て水月、少し取引しないか?」

「何だよ、この状態でか?」

「頼む」

頭を下げる紫。その姿がやけに真剣で気になった

「……話だけ聞かせてくれ」

「すまない、恩にきる」

「いいから話してくれ」

少なくとも中学の時はこんなことするようになかっただろうが

「まず、この件を見逃して欲しい。条件はそっちが決めてくれてか
まわない」

「何故だ?そこまでして実行する意味があるのか?」

「この面子の今後の為だ」

「？意味がわからんぞ」

「あまり良い話じゃないんだが……俺達は脅されている」

「はあ！？お前もか！？」

「ああ、不覚としか言いようがない。それでこの戦争である程度協力しなくてはいけないくな」

「戦争ってことはクラスのやつか？」

「代表だ」

代表だと！？……まあ、クラスによつては独裁的なクラスもあるのかも知れないが…

「……わかった。ただし紫は少し残ってくれ。話がある」

「本当にすまない」

Bクラスのやつらはためらいつつも破壊活動を開始する。やはり気は進まないのだろう

「で、水月。話とは何だ？」

「どんな弱味を握られたんだ？お前ほどのやつが」

「俺自身の弱味ではない、とだけしか言えんな」

「？自分のじゃないのに従うってことは家族……な訳ないよな。あの『請負人』達が高校生ごときに遅れをとると思えん」

紫の家は代々請負業をしていて、紫も次期社長だ。まあ、俺も似たようなものだが。

「さすがに教えてはくれないか？」

「……………彼女だ」

沈黙長つ！てか彼女出来たのかよ！

「それは詳しく聞いてみたいが……」

「そんなことはいい。さつさと条件を言え『支援者』」

「まったくせつかちな『請負人』だなあ。どうするよ雄二？」

「！？」

ドアのほうに声をかける。しかし、紫も気付いて無かったのか？

「何だ、ばれていたのか」

「まあな。で、どうする？」

「紫、といったか？」

「ああ。水明山紫だ」

「条件はできる範囲でこういった作戦の情報をリークすることだ」

「それだけか？」

「あと、さっきの『請負人』とか『支援者』とかについて聞きたい」

「いいだろう。『請負人』はうちの『光明社』の別名、『支援者』

は水月達の『影隠支援社』の別名だ」

「ちなみにやることは別名の読んで字のごとく」

「そうか。なら両者に依頼をしたい」

「ほう。どういうつもりだ？雄二」

「お前には……いや、お前たちには全力でこの戦争を『支援』してもらいたい。『全力で』な」

「召喚獣だけでなく、物理的、頭腦的にもってことか？」

「そつだ。んで、紫には」

「……報酬は？」

「設備を入れ替えないこととそちらのクラスの状況を改善させる交渉、だ。不満か？」

「いや、いいだろう。しかし、報酬を聞いておいて何だが『請け負う』ことはできない。ただ『お願い』を聞くだけだ」

「『お願い』？どういうことだ？」

「こちらにも色々あってな」

「あくまで動くのは『水明山紫』ではないといたいのか？『請負人』として動くならその名を使わないわけにはいかないからな」

紫は片手を上げて去っていった

「まったく。そうだ雄二、俺達には？」

「そうだなあ、何か一つ言うことを聞く。これでどうだ？」

「りょーかい。んじゃ、さっそく……」

「……うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯、だね」

明久と秀吉か。様子を見に戻ってきたのか

「そのことはいい。それより前線に戻って欲しい」

「どうということなのさ水月？」

「なに。俺達が本気を出すだけさ」

そう言いながら髪を後ろで束ねる。仕事の時はどうでないと

「雄二、鏡花を退かせていいか？」

「いいだろう。ただし依頼は忘れるなよ」

「わかってるさ」

よし。じゃあ前線に行くか

side 秀吉

水月が出ていったが、まだ状態がまったくわからないのじゃ。

「雄二よ、これはどういうことじゃ？」

「水月たちに全力を出すように依頼した」

「依頼？さっきも言ってたよね？」

「ああ。水月たちは」

「なるほどのう。じゃからあのような物を持っておったんじゃない」
「ただいま」

誰じゃ？瞳が水色で水月のようじゃが……も、もしや

「もしかしてお主、鏡花か？」

「うん」

ヘアバンドで前髪をあげていていつもは隠れている目元が出ておったのか。

それにしても綺麗な瞳じゃのう

「これ、水月が」

いつもよりはつきり喋る鏡花が取り出したのはシャープや消しゴムの入ったビニール袋じゃった

「どうやったらこんなに早く用意出来るのさ」

「まったくじゃ。ありがたいがのう」

「まあ敵じゃなくてよかったってとこだな。それより、こっちはいいから前線に戻れ」

「了解じゃ」

「う、うん」

さて、この戦いはいったいどうなるのじやろうか

（side水月）

「さて、じゃあ後ろから攻めさせていただこうか」

俺の現在地3F校舎外（というか壁）

「やっぱBクラスの辺りは文系の先生がいるな。好都合だ」

ゆつくりとDクラス前を通過し、Bクラス前へ

「先生、Fクラス 影隠水月、ここのBクラスに現代文で勝負を挑みます」

「なっ!?!」

「どこから来やがった!」

「どこからって…外から?」

「ふざけやがって! 試獣召喚!」

「試獣召喚」

Fクラス	影隠水月	VS	Bクラス	十数名
現代文	620点	VS		平均161点

「ば、化物か!?!」

「一斉に行くぞ!」

「腕輪、発動。大津波」

召喚獣の腕輪が光り、召喚獣にとっての大津波（人から見たら腰く

らいまで）が発生した

「300点分はちがうねえ。全員瀕死かよ」

まだまだ行けるがな

《連絡します》

放送？何だろう

《協定による戦争中止時刻になりました。二年B、Fクラスはただちに戦争を中止してください》

お預けかよ。まあいいや

第十問（後書き）

鏡花の召喚獣の元ネタは『氷結鏡界のエデン』のシエルティスの武器に華宮の頭のやつのイメージです

『請負人』はもちろん戯言シリーズなどに出てる赤い人からきています

第十一問

「ただいまーっと」

教室には主要メンバーが勢揃いしていた。んー、何か忘れてるような……

「おう、いいタイミングだな。ちょうど今みんなに説明し終わったところだ」

「『支援者』とかも含めて？」

「ああ。全てな」

「……………（トントン）」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

ああーそうか。さっきまで康太が居なかったのか

「ん？Cクラスの様子が怪しいだとは？」

「……………（コクリ）」

「雄二、どうするの？」

「んー、そうだなー」

時間を確認する雄二。この時間ならまだ大丈夫かな？

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言っただけでやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

「ちよっと待って」

鏡花か。パソコンで情報を集めているようだ

「畏の可能性が高い」

「畏じゃと!？」

「おそらくBクラスの人達がCクラスで待ち構えている」

「そうか。水月、紫に連絡をとってみてくれ。で鏡花、そう思った理由は？」

「Bクラス代表の根本はCクラス代表の小山さんと付き合っていて、根本の知的なところがいいと言っている」

「知的、ねえ」

「卑怯の間違いじゃない？」

「雄二!紫もそんな話を聞いたらしい」

「限りなく怪しいな」

「どうするのじゃ雄二?放置しようものなら終戦直後に攻められてしまっぞい」

「どうすっかな……よし。今日はもう帰るか」

「ええっ!?!雄二、何もしなくて大丈夫なの?」

「明日の朝、ある作戦を決行する。それまでは放置するのも面白いだろう」

「じゃ、俺も鏡花も普通にしていんだな?」

「ああ。また明日頑張ってもらっ。それまでしっかり休め」

許しをもらい俺は髪をほどく。隣では鏡花も髪を下ろしている

「もったいないのう。鏡花も綺麗な水色の瞳なのじゃから出しておればよいのに……」

「えっ……………(ボンッ)」

ああっ、鏡花がフリーズした!

「秀吉、狙って言ってないか?」

「い、いや。そんなつもりは……」

天然ですか？むしろ天然記念物ですか？

「でも秀吉、あれは僕でもどうかと思うよ」

「ってか、これじゃあ帰れないじゃねーか！」

「ス、スマンのじゃ」

「じゃあさ水月、」

なるほど。お前も結構悪だな明久

「さて、じゃあ鏡花はフリーズさせちまった秀吉にお願いするか」
「な！？ななななな」

！いかん。秀吉までフリーズしそудだ

ポフン

「あ、フリーズした」

「おい！明久のせいで増えたじゃねーか！」

「な！？やると決めたのは水月じゃないか！」

そういえばそうでした

「……………はあ。じゃあこの二人は俺が見とくから皆帰っていいぜ」

「そうか？じゃあ先に帰るがあまり遅くまで残るなよ」

「……………また明日」

「それじゃあお先に失礼しますね」

「ウチらも帰るわよ吉井」

「じゃ、後よろしくね水月」

「おう。また明日な！」

さて、と

「秀吉ー。起きろー。朝だよー（謎）」

「……………はっ！ワシは何をしておったのじゃ？」

これ言ったらまたフリーズするかな？

「鏡花をおんぶして帰ろうとしていた筈だが？」

「えっ、あの、その……………やらねばいかんのかのう？」

「ここまで完全にフリーズしちまうと運ぶのも大変だし。責任をとってもらおうじゃないか。秀吉君」

「無駄に言い方を変えるでない。しかし……………」

「あーもー、うっとおしい。んじゃ、お先に！」

教室の外にダッシュ！

「あつ、こら待たぬか水月！」

その後秀吉が鏡花をおぶって帰るのを影から見守り、俺も帰路に付いた

Cクラス教室

（side紫）

「ちっ、全員帰りやがったか。なぜこちらの計画がバレた？」

「誰かが転校生の女子が情報を集めてるって言ってたわ」

小山さんとやら、意外に耳が早いな

「おい紫、どうなんだ？」

「……………」

「おい、何とか言ったらどうなんだ？ 四季よじのきのあの写真が流出してもいいのか？」

くそっ！

「…………… あいつはパソコンとか、情報に関することは得意だった。今の立ち位置まではわからない」

すまん。鏡花、水月

「そうか。じゃあ四季でも使って拉致するか」

何だと！？

「まで、待ってくれ。その役目なら俺がやる。詠々うたよみにやらせる必要はない！」

「駄目だなあ紫。彼女の事になるとすぐ慌てる。その癖、直したほうがいいぞ」

俺のことなどどうでもいい！

「頼む！ あいつを外してくれ！」

「これは代表の決定だ。それにあいつはまだあまりクラスに貢献していないからな」

くそっ！ 詠々の分まで俺が働いたのが仇になった…

第十一問（後書き）

本日最後の更新かと…

過去問一（前書き）

数日間パソコンの不調と勉強とで見てなかったら、いつの間にか1000ユニークだそう。PVもあと少しで100000のようで、記念に過去話（水月と鏡花が愛子に会う場面）をどうぞ！
ちなみに、愛子の転校時期が一月に設定されているのでそのつもりで読んでください

当初の予定ではコレ、プロローグだったんですね…（汗

過去問一

「12月半ばのとある日」

「いやー、編入試験とかめんどくさいなあ。」

と呟きながら歩いている俺

「転入するんだから、しょうがないと思う……」

鏡花も若干嫌そうだ

「まあ、しょうがないか……ところで、編入試験も『あの』方式だっけ？」

「うん……」

俺達がこれから編入試験を受けに行く文月学園は試験召喚システムだったかの試験校で、上限の無い時間制限のテスト方式が使われている。

「あんな方式のテストなんてやったこと無いからなあ、何点ぐらいとれるものなんだろう？」

「やったことある方が珍しい……」

「そりゃ言えてる。おっ、あれだ……よ、な？」

「大きい……」

頷きつつ感想を言う鏡花。うん、その感想には俺も同意するがな

「あの、ちょっといいですか？」

ん？背後から声が…

振り返るとそこには、色の薄い少し緑っぽい髪をショートカットにした一言で言うならボーイッシュな女子がいた。

「えっと、僕達に何か用ですか？」

こんな言葉をすぐに返せるのは周りに誰も居ないからだ。（何でも、俺達が緊張しないように学園側が気をつかったようだ）

「ボク、編入試験をうけに来たんですけど職員室が分からなくて…もしかしたらと思って声をかけたんですけど」

「ああ、そうでしたか。でも残念ながら僕達もまったく同じ状態ですから……」

「あつ、そうなんですか？」

どうも年上に見られているようだ……

「うん、僕達は1月から一年に転入予定なんです。」

「えっ！？同学年だったんですか！？」

彼女も一年らしい。なら敬語まで必要ないか。

「なんだ、同学年だったのか。俺は影隠 水月、こっちは鏡花。よろしく」

いつの間にか俺の後ろに居た鏡花を横に促して言う。

「影隠 鏡花です……よろしくお願いします」

「えっと、ボクは工藤 愛子。よろしくね」

「おう。じゃあ、時間もあんまり無いしそろそろ行くか。」
「そうだね。えーと、案内板とか無いのかな？」
「…あれ…」

鏡花が指差した方向にはなにやら掲示板のような物が…

「あれっばいね。行ってみよ水月、鏡花」

「その日の夕方」

「いやー、意外と怖いなああのテスト。」

「最後の方で焦ってくるよね」

「……（コクリ）」

その後、編入試験を受け、今現在、俺達三人は揃って帰宅中である

「一緒のクラスになれるといいね。」

「そうだな。鏡花なんて特にそう思ってるだろ」

「うん……」

「あははっ。最初にボクが声かけたら水月の後ろに隠れちゃったぐらいだしね。」

鏡花は赤面して、俯いてしまった。

「まあ、転入先に友達がいるのは誰でもありがたいもんだ。」

「ちやっかり連絡先も交換したしな。」

「うん。そうだね」

その後も雑談しながら歩く
しばらく行くと公園があつた

「ねえ、まだ時間あるんだつたらそこで少しおしゃべりしていいかな
い？」

工藤さんが提案してくる

「いいねえ。じゃあ自販機でなんか買ってくるよ。工藤さんは何が
いい？」

「じゃあお言葉に甘えさせてもらって、アップルジュースとかお願い
できる？」

「りょーかい。鏡花は紅茶だろ？」

「うん……」

「んじゃ、ちよつくら行ってくる。」

（side 愛子）

近くにあつたベンチに並んで腰を下ろした

「ねえ、鏡花って好きな人っている？」

やっぱり女の子どうしだと気になるんだよね

「い、いないよ…工藤さんは？」

「ボク？ボクもいないかな。」

「そう…なんだ」

『じゃあ俺達と遊びに行かない？』

『俺達が楽しい所に連れて行ってあげるよ。』

不意にかけられた声に顔を上げるといかにも不良っぽいチャラチャラした奴達がいた

「いえ、ボク達もうそろそろ帰るので……」

こういった輩のあしらい方は知らないが、逃げるべきだろう

『そんな冷たいこと言つなよ。楽しいぜ』

相手は五人、愛子と鏡花に二人ずつと数歩後ろに一人。やけに慣れた感じだ。

『ほら、早く行こうぜ』

そう言いながら一人が肩に手を置いた。全身にザワリと悪寒がはしる。

隣では鏡花が同じようにされて震えていた。自分も気を抜くと震えだしてしまいそうだが、必死に打開策を練ってみる

『ほら、とつととしやがぐはあ』

苛立ってきたのか強引に腕を引っ張ろうとした不良が突如吹っ飛んだ。

（side水月）

自販機を見つけるのに手間取ったため少し遅くなった…

「やれやれ、公園の周り約一周とは……ん？」

ベンチの所に二人を発見したが、様子がおかしい。
ってかやばい雰囲気だな、何とかせねば……

「助走をつけてっ」と

Let's ライダーキック！

『ほら、とつととしやがぐはあ』

きゅうしょにあたった。こうかはばつぐんだ
うーん、うまい具合にセリフが切れたねえ。
後ろからの強襲は成功。で、問題は……

「お前だあああ！」

工藤さんの横のもう一人を蹴り飛ばす。

『ぐあああ』

おつ、あっちも殺ったな。（死んでないけど）

鏡花の手元を見ると小型スタンガン（作、水月）が握られていて、
足元には二人の不良が転がっている。

「工藤さん大丈夫だった？」

「う、うん」

口ではそう言っているが、力なくベンチに座っている。

「まあもう少し休んどいた方が良いよ。」
『俺を無視すんじゃないねえ!!』

あつ、一人忘れてた。

「せいやー（棒読み）」

ふざけたかけ声と共に後ろ蹴りを入れる。

『ぐふう』

「もういつちょー（棒読み）」

引いた足でそのまま後ろ回し蹴りを放つ。

「今度こそ大丈夫かな？」

）side愛子）

「工藤さん……大丈夫？」

いつの間にか近づいていた鏡花が聞く。

「大丈夫だよ、ちょっと怖かったけど。」

「ちょっとじゃないだろ。」

不良をわきよせて縛り上げていた水月も言ってくる。

「いや、そんなこ」お前泣いてるじゃん「えっ？」

驚いて頬に手をやる。すると、涙が流れている。

(色々あつて混乱しちゃったかな?)

と、考えるが一番の理由はおそらく『安心』だろう。

〔side水月〕

十数分後、工藤さんが泣き止んだところで駅に向かう。

工藤さんは電車で帰るらしい。(ちなみに俺達はホテルで一泊だ)しばらく歩くと駅に着いたので、そろそろお別れだ。

「今日は色々あつたけど楽しかった。またね、工藤さん。」

「また今度……」

「その前にちよつといい?」

?なんだろう改まって、

「ボクは二人を名前で呼ぶんだから、二人にも名前で呼んでほしいな。」

数秒の沈黙の後、

「そうだね……愛子、一緒のクラスになれるといいね。」

「うん。そしたらもつとおしゃべりしよう!」

「ははっ。そうなることを祈つとくぜ、愛子」

「う、うん」

?何だか知らんが俯いてしまった……

俺が首を傾げていると、不意に工ど……愛子が鏡花に近づいて小声で何やら話し

ている。

しばらくすると鏡花が俺の隣にやって来た。

「それじゃあ今度こそ……またね」

「またな。気をつけて帰れよ。」

鏡花の挨拶に俺も続く。

「水月、ありがとね。かつこよかったよ！じゃあまた。」

満面の笑みで言われて、一瞬見蕩れてしまった。

その間に愛子は駅構内へ消えていった。

「少し遡ってside鏡花」

水月の言葉を聞いたと思ったら、ちよつとして愛子が近づいてきた。

「二人で居たときの質問の答え変わっちゃった。」

小声でそう言われた。

（質問？……もしかして、好きな人の事？）

「水月って誰かと付き合ってる？」

予想が的中した。相手に関してもほぼ1日中一緒だったから、予想はついた。

「誰とも付き合っ^て無いはず……」

「水月が気にしてる子とかいる？」

「それもいないはず。」

それを聞いて胸に手をあてて「良かった。」と呟く愛子。

これ以上は必要無いだろうから、水月の隣に立ち別れを告^げる。

過去問一（後書き）

いかがだったでしょうか？書き始めた当初の感じでうまく表現できていないところなどもあるでしょうが、読んでくださった方々に感謝を。

『きゅうしよにあたった』のくだりはポケモンより。

このときの俺はライダーキックを水月にさせてみたかったようです

第十二問

翌日、俺は朝紫から一本の電話を受けていた

「で、頼みつて何だ？」

『実は』

「おいおい、そこまで出来るかわからんぞ」

『嘘つくな。学園長と契約しているんだろっ』

「はぁー、わかったよ……いいんだな？」

『もちろんだ。アイツの命令なんかに従いたくない』

紫にここまで言わせるなんて……

「わかった。朝のうちに直々に頼みに行ってくる」

『すまない』

「んじゃ、切るぞ」

『ああ。すまない、本当にすまない』

あんなに言われると嫌な予感がしてくる……アイツがそう簡単に追い詰められるとは思えないが

「ま、学校行つてから聞いてみるか。鏡花ー、用事できたから先行くなー」

「分かった……」

またあの化物と対面か……
がくえんちょう

｝side 鏡花｝

水月も出発して十数分がたった。準備も出来たし、家を出よう

「あー」

家を出てしばらく歩いていると、後ろから声をかけられた

「影隠鏡花さん……ですよね？」

「そう……だけど」

「あの私、紫くんの彼女の四季詠々と言います」

そういえば水月が「紫のやつ、彼女いるらしい」とか言ってたような

「昨日、紫くんが昔からの友達に久々に会ったって言ってる、会って見たかったから」

昨日会ったのは水月なのに……私の事も話に出たのかな？

「そう、なんだ」

「で、ついでに昔の事も聞いちゃおうかなーとか」

それからしばらく、昔の事を少し話していると少し人通りの少ない道にさしかかったあたりで

「ゴメンね、鏡花ちゃん」

「？何が？」

「ごめん、本当にごめん」

目に涙まで浮かべて……

「どうしたの？大丈夫？」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「うっ……」

これは……スタン、ガン？

泣いて謝りながらスタンガンを押し付ける詠々ちゃんの姿が目に入る

「だい、じょ…ぶ。気にしな…で」

おそらく彼女も根本に脅されているんだろう。でなければこんな顔は出来ないはずだ

「もう、いや……こんなこと……」

遠くから歩いてくる根本とBクラスの姿が見えたが耐えきれず、ついに意識が落ちていく

皆は無事なんだろうか、それだけが気になった

side 水月

「昨日言っていた作戦を実行する」

雄二が堂々と宣言する

「雄二、考えてみたがまさか作戦って秀吉を優子さんに変装させる気か？」

「ほう、よくわかったな。そういえばお前は木下優子に会ったことがあるんだっただか」

そのとおり。違つところなんてパツと見髪の分け方ぐらいじゃね？

バンッ

急に教室の扉が勢い良く開く

「康太？どうしたんだそんなに慌てて」

「……………鏡花がBクラスに誘拐された」

「なっ！？」

「なんじゃと！？」

秀吉、声でかい。腹式呼吸で叫ぶな

「ムツツリーニ、確かか？」

「……………間違いない」

「なんて卑怯なんだ」

「どこに居るかわかるか？」

「……………二階の空き教室」

「一年のエリアか。確かに一年なら設備が全クラス同じで少し余裕があるし、旧校舎ならバレにくい」

「どうするの雄二？」

「勿論助けるさ。だが、誰が行くか……………」

「雄二、ワシに行かせてもらえんか？」

「駄目だ。秀吉にはCクラスを騙してもらつ必要がある」

「しかし雄二！「待った秀吉」水月、止めるでない」

「雄二、要はCクラスさえ騙せれば問題無いんだろう？」

「そのとおりだ。まさか、お前がやるつもりか？」

「おうよ。変装も声真似もお手のものつてな」

声真似に関しては小型変声機をつけるだけだが…………

「鏡花の救出に関しても全力をもって『支援』させてもらおう」

「いいだろう。じゃあ秀吉は鏡花の救出に、水月はAクラスのやつに変装してBクラスへ。それぞれ準備しろ」

「了解じゃ。すまないの水月」

「いえいえ。っと秀吉、これ持っていきな」

武器は無いときついだろう。包みを開けたら本物と見間違っほどの薙刀が出現した

「これは、薙刀かの？」

「ああ、刃は切れないようになってるがな。紫に習っているそうじゃないか」

「えっ、そうだったの？」

「なんじゃ、知っておったのか？」

「昨日聞いた。理由は召喚獣を劇に使用したいからその武器の扱い方を学びたい、だったか？」

「その通りじゃ」

「秀吉らしい理由だね」

「そうだな」

「じゃが、このような事態で大切な人を救い出すことが出来るなら、躊躇う事なく力を振るおうぞ」

「じゃっ、お互い全力でいこうか」

秀吉が頷いて、教室から出ていった

「大切な人、ねえ。案外早くくつききそうだな」

「帰ってきたらもうくつきいてたりして」

「俺は戦争に支障が無いなら祝福するがな」

「雄二は羨ましくないのか？」

「羨ましいことは羨ましいが、友人に彼女が出来たなら祝ってやらんとな」

「そうだよね……よりによってあんなに可愛い秀吉に先に彼女が出来たなんて」

「なんだ明久、複雑な思いだとも言うのか？」

「否定はしないよ。僕も彼女ぐらい欲しいし」

「（お前ならその気になれば簡単だろうに……）」

姫路さんや島田さん（今朝来たら呼び方が親密になってたし）から好意を受けてることだしな

「ま、あとは当人たちの頑張りしだいってことで……俺達も動きますか」

第十二問（後書き）

秀吉に薙刀を習わせてみました。劇で召喚獣を使うのも考えられるし、秀吉ならそれくらいやっても不自然ってほどじゃないと思うのですが…

第十三問

「どうでもいいことかもしれんが、明久」

「なに？水月」

「島田さんとの間に何かあったのか？」

呼び方変わってるし何もないとは思えないが

「あー、いや、その……」

「アキが昨日、少し新校舎を覗いていこうって言って」

「見に行ったらBクラスに追いかけられた次第です……」

「アホか明久。で、それがどう繋がるんだ？」

「逃げる時に煙幕がわりに消火器を美波に使ってもらおうとしたら、クレープを奢るのと呼び方を変えるようにって」

島田さん、明久に好意を持ってるのは分かったがそんなやり方でいいのか？

「そ、そんなことより水月。アンタ本当に大丈夫なの？」

「何が？」

「Cクラスの事よ。根本と組んでいるみたいだし、もし失敗したら

……」

「最終的には間違いなく俺達の負けだろうな。頼むぞ水月」

「大丈夫だって。んー、身長からいってギリギリ久保になれるかな？」

学年次席らしいし、ある程度言葉遣いも聞いたことがある

「んじゃ、ちょっとトイレで変装してくる」

「なんだ、ここじゃ無理なのか？」

「大きめの鏡もほしいし、技術は門外不出つてね」

「そうか。終わったら一度戻ってこいよ。当然だが「周りに気をつけて、だろ？」そうだ」

鞆も持ったし、ちよつくら変身タイムつてね

数分後

「水月、大丈夫かなあ？」

「どうしたのよアキ、いきなりそんなこと」

「だってさあ見たことあるわけじゃないし、ばれないかな？」

『やあ吉井君』

「あつ、久保君。どうしたの？」

「なに、少し用事があつてね。ついでに吉井君の顔を見ていこうと思っただけだよ」

「そ、そうなんだ（悪寒が…）」

「ちよつと久保、アンタどういうつもり！？」

「どうもこうも、ただからかつてるだけだぜ」

「からかつてるだけ『だぜ』？」

「あつ……」

しまった……痛恨のミスだ

「あ、あんた水月ね！驚かさないでよ！」

「すまない島田さん。しかし吉井君と話したかったんだ」

「や、やっぱりアンタはウチの敵よ！」

「水月、今は久保君のマネしなくていいから。なんか身の危険を感じるし……」

「へいへい。んじゃ、作戦を開始するかな」
「余興は終わったのか？なら出発するぞ」

雄二が会話の止まるのを待って話しかけてきた

「さっきの見てると不安になるんだけど…」
「次はちゃんと真面目にやるさ。ヘマはしない」
「ならいいけど……」
「ほら行くぞ明久、水月。早くしないと戦争が再開しちゃう」
「そうだな。いくか」

Cクラス前廊下

side 明久

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、水月」
「何をいつてるんだい坂本君。僕は水月ではなく、久保利光だよ」

もう成りきってるよ水月の奴。確かにわからないぐらい変装は上手いけど……

「そうだったな。じゃあ久保、よろしく頼む」
「気にしないでいいよ。では、行ってくる」

久保君（水月）がCクラスに入っっていった

『少し静かにしてくれないかい？』
『あんたは確か学年次席の久保よね？何の用？』

この声は多分代表の小山さん（だっけ？）だろう

『僕達のクラスも戦争を考えていてね。いわゆる下見というやつさ』
『学年次席が下見ねえ。それになんでトップのクラスが戦争なんて……』

『簡潔に言うならFクラスの最終的な目標がAクラスらしくてね。
未経験だと苦戦までいかなくとも手傷ぐらい負わされかねないからね』

水月、Fクラスを下げすぎじゃない？

『とはいっても、練習になりそうなBクラスは今戦争中だし、仕方がないからCクラスならどうかと思っただが……はあ』

『何よ！私達が弱いつて言うの！？』

『そう言うつて事は自覚はあったのかな？確かに今Fクラスと戦争しているのがCクラスだったらもう攻め落とされてただらうけれど』
『なっ！！あんなカスどもに私達が負けるわけ』無いと言い切れるのかい？』そ、そうよ！』

カスどもつていくらなんでも酷くない？

『全く、何もわかってないようだね。じゃあ、失礼させてもらっよ。
宣戦布告もしないし、のんきに過ごすといい』

『ま、待ちなさいよ！何もわかっていないつてどういうことよ！？』

あー、小山さん、凄い怒ってるなあ

『その程度、自分で考えてみたらどうだい？足りない脳味噌でもフルに使えば何かわかるかもしれないからね』

あ、久保君（水月）が出てきた

「こんなもんでいいか？雄二」

『何よあいつ、少し頭が良いからって！もうFクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラスを意地でも倒してやるわよ！』

「成果は上々のようだな。よくやった」

小山さん、可哀想に……

「水月、小山さんに言ってたわかってないって？」

「なんだ明久、お前もわかってなかったのか」

「吉井君、つまりは『DクラスはなぜFクラスに負けたのか』ってことさ」

「（なんで久保君口調なんだろう？）えーと、つまり油断してるからってこと？」

「そのとおりだよ吉井君、僕の見込んだとおりだ。『負けるわけ無い』その考えこそが敗因ということさ」

「水月、それはいいけど久保君の真似をやめてくれるかな？僕の腕がもげる前に……」

「そうか、すまなかったね吉井君。じゃあ僕は少しトイレに行ってくるよ」

「（やっと開放された……）」

「（水月のやつ……あきらかにウチをからかってたわね。今に見てなさい……）」

「（美波のほうから殺気が……少し離れておこう）秀吉はうまく助け出せたのかな？」

第十三問（後書き）

実は十三問と十四問は順番じゃなくてもいいようにがんばってみたんですが、いかがでしょうか？

久保君の口調あってるかな…

第十四問

side 秀吉

「どうしたものかのう……」

勢いで大役をかってでたはいいものの、いざとなると問題もある

「いかに早く鏡花を取り戻すかが問題じゃな」

でないと人質にされかねんのう。っと、あそこの教室じゃな

『さて、せっかくだし少し遊ばせてもらおうかな』

『んー！んー！』

鏡花であるう声が聞こえた。

『うるせえんだよ！』

バシッという音と何かの倒れる音。そして

「止めんか！」

自分の中で何かが切れた。おそらく、堪忍袋の緒が何かであろう
驚く相手を横目に一蹴りで鏡花の下へ
ものすごい勢いに相手が数歩下がる

「大丈夫かの鏡花？もう心配せんでよい」

猿ぐつわを取りながら優しく声をかける

改めて見ると制服が少しはだけている。それにいつもは見えにくい筈の両目がはつきりとあらわになっている。どうやら缺か何かで切られたようじゃ

「お主らに問う。なぜこのようなことを？」

「ああ？勝つために決まってんだろ。それとも、ソイツにやったことのほう聞いてんのか？」

「両方じゃ。あと、なぜ鏡花じゃったのかももう」

「ソイツにやったことは退屈しのぎだよ、珍妙な目をしてたしな。なぜソイツかって聞かれると、ソイツが俺らの脅威だそうだからな」

「その程度の事でここまでしたのか？」

「ああ。アイツの立てる計画は結構良質だからな」

「そうか、別に脅された訳では無いのじゃな。なら 手加減は出来んぞい」

そう言つて水月に借りた薙刀を出し、右側に構える。流石に驚き、皆さらに数歩下がる

「安心するのじゃ。刃は無いからの……叩くようなものじゃ」

「舐めんじゃねえ！」

右からの突撃。後ろに飛ばす訳にはいかないので柄で殴る

「お主らには少し灸を据えてやらねばのう」

真正面から鉄パイプを持って降り下ろしてくる

「他人の大切な人を傷付けるとどうなるか、身を持って学んで貰おうぞ」

流れるように攻撃を横に流し、柄で鋭く突く
それから幾人も迫っては倒され、複数で掛かると流されて相討ち
にされ、遂に全員が地に伏した

「鏡花よ、怪我は無いかの？」

「大丈夫……」

でも微かに震えておるじゃないか

「済まぬ。もう少し早く助け出せば……」

「そんな…秀吉君のせいじゃないよ」

「このような事があって初めて気が付いたのじゃ」

「何に？」

「鏡花の事が何より大事じゃと。想い始めたら止まらないのじゃ」

「えっ？」

「鏡花よ、ワシとつ、付き合ってくれぬか？」

「……うん！」

目に涙をためて、でも満面の笑顔で答えてくれた。
そして、どちらからともなく抱き合った

「さて、みんなも心配しておるじゃろっし、帰るかの」
「うん」

そう言って手をつないで帰っていった

（side 誘拐犯）

「なあ、俺達ってただの引き立て役じゃね？」

第十四問（後書き）

実は十三問と十四問は順番じゃなくてもいいようにがんばって見たんですが、いかがでしょうか？

短い、かな？

ウチの秀吉はあくまで男子です

第十五問

「さて、一つ聞いていいか秀吉？」

「なんじゃ？」

「進展はあったようだが、どうなった？」

「救出時の事よりそっちなのか！？」

何を言っているのやら。手をつないで帰ってきた時点で決定済みだ

「秀吉ならやると思ってたからな。で、どうなんだ？」

「どうでもよいじやろうが」

「そうかー、告白したのかー」

「なぜ分かるのじゃ！？」

「えっ！？マジで？」

適当に言って反応を見ようと思ったのに……

「デタラメだったのかの！？」

「そうかー、明久の予想大当たりだな。おめでとう、秀吉、鏡花」

「おめでとう。秀吉に先を越されるなんて……」

「おめでとうございます、鏡花ちゃん（私も頑張らないと……）」

「おめでとう鏡花（ウチも頑張らなきゃ……）」

「……おめでとう」

「おめでとう。それじゃあ今日は二人セットで動いて貰おう」

「もうそろそろ戦争の時間じゃからの。しかし良いのかのう雄二？」

「構わんさ。作戦の根幹は姫路とムツツリー二だ。あとはその他大

勢と言っている」

「で、具体的にはどう動けばいい？」

「姫路の部隊は敵を教室に閉じ込める事、水月は様子を見て援護に

回れ。時が来たら攻める。鏡花と秀吉は鏡花を中心にBクラスの連中の弱味を潰してもらいたい」

「わかった……」

「りょーかいしました。それでは仕事モードといきますか」

髪を束ねる。今日は気合い入れていくぜ

「そういえば、髪どうしよう………」

Bクラスの奴に切られたらしいその髪は見事に前髪直線状態だった

「上げとけばわからないんじゃないか？今日はそこまで遅くはならんだろうし、それから美容院でもどこでも行けばいいさ」

「雄二が言ってるのでよいかの鏡花？」

「うん……大丈夫」

「ならば精一杯頑張ろうぞ」

秀吉と鏡花もやる気充分みたいだし、俺も昨日の位置に戻るか

開戦時刻

「ただいまー」

「なんだ水月、元の位置に戻れ。もう開戦だぞ」

「それが」

「認められない？」

「どうやらBクラスが『水月は参戦していなかった』とか言ってるらしい。昨日の教師も今日は出張らしく確認がとれないみたいだ」

「そうか……まあいい。なら今からすぐに前線に向かえ」

「わかった」

Fクラスを出て新校舎へ

「ドアと壁をうまく使え！袋叩きにするつもりでいけ！」

ついて早々指示を出さねばならんとは……どうやら姫路さんの様子が可笑しいようだ

「影隠水月、そのBクラスに古典勝負を挑む！試獣召喚！」

押し戻されかけている方の入り口で戦闘にはいり、点数が表示される間もなく切り捨てる

「明久！」

明久が呼ばれて反応したところで視線を姫路さんの方へ。どうやら通じたらしく、頷いて姫路さんに駆け寄る

「こちらはしばらく引き受ける。点数の減った奴は人数を気にしながら交代で補給に行け！」

召喚獣の鎖鎌の分銅をぶんまわし、牽制する。召喚獣だと武器の性質じゃなく点数で強さが決まるから分銅でも鎖でも当たれば充分ダメージになる

「水月、ちょっと雄二のところに行ってくる」

明久か

「どうした？」

「詳しくは言えない。察してくれるとうれしい」

「わかった。じゃあついでに鏡花の状況も聞いてきてくれ」

頷いて去っていく明久。姫路さんを下げるのを忘れない所が明久らしい

「あとは計画変更が無いことを祈るか」

）side 鏡花）

根本のパソコンにハッキングしていると、吉井君が戻ってきた

「

」

「

？」

「

」

何やら坂本君と話しているみたいだけど、少し距離もあるし聞き取れない

「どうしたのじゃ明久？」

秀吉君が吉井君に聞きに行ってくれた

「あんまり大きな声では言えないけど、姫路さんの様子がおかしくて作戦から外してもらったんだ」

「そうじゃったか。ふむ、また根本が何か仕掛けてきたのかの？」
「……………」

何か言いづらそうな顔をしてしまった……

「パソコンの方にはBクラスの人達の情報が入っていただけだった

けど」

「えっ、もう終わったの？」

「うん。全部消去してついでに消去したファイル名でウイルスを置いておいた」

もう一度見ようとしたらパソコン自体がフォーマットされる筈だ

「凄いのう鏡花は」

そう言つて頭を撫でる秀吉君

「そう……かな？」

「（鏡花、すごく赤くなってるのに秀吉は気付かないのかな？）」

プシュー

「ん？どうしたのじゃ？」

「秀吉、君は天然だったんだね……」

「あ、いや、そのじゃな……」

「とりあえず僕は前線に戻るけど、ちゃんと鏡花を起こしておいてね」

第十六問

明久が教室から戻ってきた

「水月、雄二から『水月は入り口で現状維持しろ』だって。あと、保険としていざとなったら紫に『お前がマクダフ（だっけ？）だ』って」

ほう。ってか『マクベス』かよ、雄二ってそんなの読むのか？

「紫がマクダフねえ……あながち間違っちゃいないかも知れんが」
「？よく分からないけど伝えたよ」

明久は分からなくて当然だな。ってか分かったら怖い

「おう。明久はどうするんだ？」

「……ちよつとテロもどきを……」

「何があつたんだ！？」

「あつ、もうそろそろ行かなきゃ」

行ってしまった……向かうのは……Dクラス？

「まあいいか。悩んでも仕方ない」

「その通りだな」

「うおっ！？…何だ、雄二か」

本隊まで出陣とは……

「そこまでピンチじゃあないが、敵を油断させる為にも、な」

「そうかい。で、どうするんだ？」

「時間を稼いで明久に横から攻めさせる。次にムツツリー二が外から来る。それで駄目なら紫に頼る」

「そうか。さては明久、壁を壊すつもりだな。だからテロもどきだ、と」

「だろうな」

言いつつドアのすぐ前、というより少し入ったところまで進む

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

「はア？ ギブアップするのはそっちだろ？」

「どうかな？ 俺のことも止められないのに、そんなこと言えるのか？」

「なに、そっちの代表が来たなら止める必要さえないだろう？」

「……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！」

もうそろそろだ。うまくやれよ、明久

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

その油断が命取りだ、根本

『だああーっしやあーっ！』

ドゴォッという豪快な音とともに壁が崩れる

「ンなっ！？」

「くたばれ、根本恭二いっ！」

「遠藤先生！Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！試獣召喚！」

「くっ！近衛部隊か！」

怒濤の攻めに紙一重で対応するBクラス

「詰めが甘いんだよ！」

根本が勝ち誇っているがまだまだこれからだ
ダンッ！という着地音が2つ

「……Fクラス、土屋康太」

「くっ」

「……Bクラス根本恭二に「Bクラス四季が受けます！」」

「くそっ」

明久が悔しがっている。まあ、あの伝言が意味分からなかったらしいからな

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗「おい」あ？」

根本の話を無理矢理切って紫の方を向く

「ある奴からの伝言だ『お前がマクダフだ』」
「なっ！？」

根本が驚いて紫を振り向く

「そうか……あいつは俺達の秘密を知っているのか？」

「そんなはずはない。ただの偶然さ」

「おい、紫！お前ふざけるなよ！この写真をばらまいていいのか？」

根本が簡素な茶封筒を取り出す。愚かな

「水月……」

「おうよ！」

俺はその場で指先を動かす

「なにい！？」

封筒は根本の手を離れ、紫の下へ

「『指鋼糸』って言ってな。読んで字のごとく『鋼糸の指』って訳よ」

「なっ……紫！こいつらに負けると設備が悪く「少しいいか」は？」

「さつきから『紫』『紫』って、誰と話しているつもりだ？」

「はあ？お前に決まってるだろうが」

まあ、普通そうだな

「今、ここに『水明山紫』という人物は存在しない。先生、Bクラ
ス代表の根本に勝負を申し込みます。試獣召喚……」

「紫！何のつもりだ！俺がマクベスだとも言つつもりか」

充分暴君やってたと思うが……

先生も流れに吞まれて承認しているようだ
その声を聞きつつ、紫が手で目元を覆う

「何度も言わせるな。俺は『紫』じゃない。俺は」

白いスーツに棒術に使うような棒を持った召喚獣が現れる。そして『名前』と点数が表示される

「俺は『影隠^{かげかくれ} 淡雪^{あわゆき}』だ」

手をどけた淡雪の目は澄んだ水色になっている。手を見るとカラーコンタクトを持っている

Bクラス	影隠淡雪	V S	Bクラス	根本
恭二				
保健体育	324点	V S	203点	

淡雪の召喚獣が根本の召喚獣の脳天に棒を降り下ろす。

これにより、文月学園始まって以来の『謀反』による終戦が訪れた

第十六問（後書き）

爆弾発言！的な設定を出してみました。実は紫を登場させたところで描写がまったく無かったのもそのためだったり…（書いたら失敗しそうだったので）

水月の『指鋼糸』は戯言の『曲弦糸』をベースに汎用性を高めてみました

第十七問

「明久、随分と思い切った行動に出たのう」

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

「大丈夫？」

秀吉と鏡花が明久に声をかける

「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

「とてもまつすぐで吉井君らしいと思うよ」

「じゃな。後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男氣溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……二人揃って遠まわしに馬鹿って言ってるじゃない？」

どこか似た者同士みたいだからな。考えることも似ているんだろう

「まったく、明久らしい馬鹿な作戦だったな」

「水月！直接的に言えっていう意味じゃない！」

「何か相談してくれれば『支援』ぐらいしたのに……」

「自分から『手伝おうか？』ぐらい聞いてくれてもいいじゃないか
！」

「その直前に『そこにいろ』という意味の伝言を聞いていたし、『依頼』は来るまで待つのがうちの流儀みたいなものだからな」

まあ明久は放っておいて、問題は雄二のほうだ

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……………」

残念ながらこのマクベスは負け。死じゃないからな。むしろさらに苦痛だろうな

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

クラスを問わずざわめきが起こる

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

Fクラスの連中だけでなくBクラスの連中まで鎮まった。ほんの少し話ただけでここまで鎮めるとは

……

「……………条件はなんだ」

「まず、お前にはクラスにおける権限を全て放棄してもらう」

「元々、代表って言っても権限なんてほとんど無い筈なんだがな……」

「つまり、代表とは名ばかりになる。ということか？」

「そうだ。その代わりは紫……つと、今は淡雪だったか？を『代表代理』とでもして任せよう」

「皆が良いなら喜んで拝命するが……………」

『あいつなら安心して任せられる！』

『落ち着いてて、根本より代表っぽいし』
『ぜひやってくれ!』

人望あるなあ。根本とは天と地ほどの差だ

「じゃあ決まりだ。それでは淡雪、もうひとつの条件だ」

もう代表代理として扱ってやがる

「Aクラスとの交渉を有利にする作戦か？」

「そうだ。戦争の意思と準備があると言ってきたもらいたい。使者はそうだな……一応代表の根本に行ってもらおうか」

間が空いたが、絶対に前から決めてたな

「それだけでいいのか？」

「甘いわ！俺はそれだけじゃ不満だ！」

「まあ落ち着け水月。地獄はこれからだ」

地獄？……ならいいだろう

「な、なにを……」

「これを着て行ってもらう」

バー……ン

文月学園の制服（女子）

「雄二待った。もっと悲惨なやつを用意してやる。少し待っててくれ」

数分後

「根本く〜ん、ふれぜんとふぉーゆー」

取り出したのはハ　ヒの制服

「待て！それはいくら何でも……」

「そうかぁ、お気に召さなかったかぁ……じゃあ、好きなの選べ」

ハンガーラックで登場した数々の衣装（A11コスプレ）

「ねえ水月、こんなのよく集めたね……あんな短時間で」

「まあ色々あってな」

「ラインナップも何かあれだし……」

制服中心で持ってきたただが？断じて俺の趣味では無い！

「　盤台中学の制服なんてどうだ？」

「この学園の制服にさせて下さい！」

恥も外聞も気にしない域に入ったらしい

「やだ」

真っ白に燃え尽きちゃったよ、根本のやつ

「んじゃ、Bクラスの皆様、どうか宜しく」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

変わり身早っ！

Bクラスの連中が着付けに入った。結局　ルヒの制服になったよう
だ。……ん？

雄二が明久に根本の制服を渡した？

「なんだ？」

『……あつたあつた』

取り出したのは封筒のようだ。あれはまさか姫路さんの物か？

「ま、覗くような野暮な真似はしないでおう」

教室に入る明久を黙って見送った。さて、変化は訪れるかな？

第十七問（後書き）

『常盤台中学』は禁書目録や超電磁砲より。
インデックス レールガン
ハルヒのほうも学校名にしようかと思ったのですが、わかりづらい
と思い、この形にしました

第十八問（前書き）

キャラの設定を投稿しようと思うのですが、初期の設定（現在と違う）しかなくて……
そのうちちゃんとして更新しようと思います

第十八問

終戦後、Bクラスの一角にて

side 鏡花

「ふう」

少し意識が飛んでたらしく、急いで来たが一步遅かったようだ

「……………」

気まずそうに俯いて近寄って来た詠々ちゃん

「えつと、その……………ごめんなさい！謝って許してもらえるような事じゃないけど…本当にごめんなさい」

「いいよ。もう気にしないで」

望んでやった訳ではない事はわかっていているつもりだ

「えっ？」

「さすがにちょっとも恨まない自信は無かったけど……………」

「けど？」

「おかげで秀吉君に告白して貰えたから、その点では感謝したいくらいだから。それでプラスマイナス0って事にしようと思うの」

「……………ありがとう」

「もしよかったらこれからも仲良くしよう？」

「いいの？こんな私なのに……………」

「そんなに自分を落としてしまわないで。これからは対等な友達でいたいもの。それとも、私と友達は嫌？」

「そんなこと無い！でも……………」

「……じゃあ今度、クレープでも奢ってもらおうかな。そしたら少しは楽になると思うし」

「！うん。じゃあ改めて、これから宜しくお願いします鏡花ちゃん」

「（まだ固い気もするけど）よろしくね詠々ちゃん」

「……鏡花は髪を上げておると、本当にしっかり喋るのう」

秀吉君が近寄って来たようだ

「自分ではあんまりわからないけど」

「そうじゃったのか。どれ……」

あつ、ヘアバンド……

「えっと……返してもらえないかな……」

「うむ。すまんのう、少し反応が見たくての」

「（うわー、鏡花ちゃんと彼氏君すごく熱々だ）えーと、そちらはさつき少し話に出た彼氏君でいいのかな？」

「う、うむ。そちらは？」

「紫くんの彼女の四季詠々です。あと……今回のゆムグツ」

「（詠々ちゃん、今はその話を出さないで。私から言いたいから）」

「（でも……）」

「（お願い。私のワガママだけど聞いてくれるとうれしい）」

「（……わかった。お願いね）」

「ちよつといいかその三人」

坂本君が水月や吉井君と共にこっちに来た

「色々聞きたいこともあるし、紫が『なら詠々も』とか言ってたんでな。ここじゃあなんだし、屋上でも行こうぜ」

「わかった……行こ、詠々ちゃん」

「うん」

屋上

side 水月

「おつし、全員揃ったな。じゃあ話してもらおうか」

「いいぜ。ただし、誰にも言うなよ」

「わかっているさ」

他の皆もそれぞれに頷く

「影隠の家と水明山の家は繋がりが深いんだが、あるとき水明山の跡取りが出来ずに困っていたな」

「そこで影隠の三つ子の一人を情報操作で『実子』として養子にした」

「それが俺だ」

「両親は隠そうとしたが俺達はちよつとした事で知ってしまった。いまだにこの事は両親にしらせてない」

「気付いてからもただの幼馴染みとして接してきたからな」

「まあ、そんなところだ。何か質問は？」

けつこう異質な話だったせいか皆黙ってしまった

「一ついいか？」

「なんだ雄二？」

「結局誰が上で誰が下なんだ？」

「ああ、それもあつたな。答えは簡単だ。全員同時、だ」

「は？」

「俺達はどうも母親の胎内で寄り添うようになって、自然には無理だと判断されて帝王切開でひとまとめに出てきた。故に全員

同時ってことだ」

「帝王切開ねえ……」

「だから雄二が紫を『マクダフ』としたとき驚いたぜ」

「まさしくマクベスを倒す役に最適な人材だったと言うことか」

「どういうこと？」

明久は知らないんだっとな

「シェイクスピアの『マクベス』ぐらいは聞いたことあるよな？」

「名前ぐらいなら」

「オーケー。その中でマクベスという人物は魔女に『女の股から生まれたものには殺されることはない』みたいな予言をうけるんだ」

「しかし、マクダフという男は『母の腹を破って産まれた』つまり『股』ではなく『腹』から産まれ出たのでマクベスを倒せた、という話だ」

俺と紫で明久にあらすじを教える

「なるほど。だからあのとき、『あながち間違ってない』みたいなこと言ってたのか」

「そういうことだ」

「なるほど、話はわかった。じゃあ次はAクラスとのことだな」

「では俺達は席を外そう」

四季さんを呼んで屋上を去ろうとする

「いや、そうする必要はない。ここに居てもらってかまわん」

「……なら、まだここに居させてもらおう」

「さて、今更ではあるが水月」

「ん？何だ雄二」

「Aクラスの友人つてのは誰だ？」

「ああ、そういえば言ってなかったな。工藤愛子だが？」

「記憶にないな。ムツツリー二ならわかるか？」

「……転入生」

「転入生？いつ頃転入したんだ？」

「去年の終わり、というか実質1月からの筈だぜ。本当なら俺達もその時期だったんだがな」

「家の事情で予定変更、だったか？」

「まあ、ぶっちゃけ依頼の関係でな」

「そうか。ひとまずその話は置いておいて、そいつは『交渉』に関わりそうか？」

「どうだろうな。クラス代表の霧島さんとも一緒に居たけど……ん？」

何か霧島さんの名を出したとたん、雄二が少し硬くなった

「どうした雄二、霧島さんと知り合いなのか？」

「ま、まあ少しな」

明らかに嘘っぽいんですけど……

「なら直接霧島さんと交渉すれば……」

「それはない」

即答かよ！

「ワガママ言っちな雄二。っとそういえば雄二、俺達の報酬まだもらってなかったな」

「言うことを一つ聞くといいやつか。言っておくが俺に出来ることだけだぞ」

「わかってるよ。それは……『俺達二人のAクラス戦不参加』だ」
「そうきたか……一騎討ちに持ち込めれば問題は無いが……」

何やらブツブツと一人で考えにひたっているようだ

「いいだろう。ただし、交渉には参加してもらおうぞ」

「それぐらいなら勿論いいさ。だが、愛子が交渉に参加しないのならあまり意味無いかもな」

「他の奴らとも少しは面識があるだろう。その程度でいいさ」

「わかった。それなら協力しよう」

「ちよつといいかな水月？」

「何だ明久」

「何でAクラス戦に出たくないの？やっぱりその友達の為？」

「ああ、愛子と編入試験の時に会って、仲良くなつて、それだけで転入するとき気が楽になったんだ。そんな恩人とも言える人を倒すのに参加は出来ない」

「……そっか」

「まあ、皆の力だけで勝った時は仕方無いけどな」

「勝つさ。んじゃ、今日はこれで解散にするか。交渉は補給の具合を見て行つ」

雄二の言葉で各々荷物を持ち、歩き出す

《吉井明久！至急職員室に来い！》

「げっ、鉄人……」

「頑張れよ明久」

「雄二！他人事だと思って！」

「報酬出すなら、早く終わるようになら『支援』できるが？」

「……報酬って？」

「んー、明久じゃあ金も無さそうだし、かといって雄二の時みたい
な条件は微妙だしなあ」

「じゃあ僕の自慢のゲームを「いらない」じ、じゃあエロ本を「帰
れ、いや説教受けて来い」酷い！」

「明久、発言には注意したほうがいい。島田から異様な気配を感じ
るぞ」

「職員室行かなきゃ……」

明久猛ダッシュ。島田さんも追いかけてようとしてやめた

「（……ずいぶん個性的なクラスだな水月）」

「（だろっ？おかげで退屈だけはしなさそうだ）」

「（でも問題起こすと大変だよ……）」

「（気にしないで大丈夫そうだな。罰されても動じないやつらだ
し）」

第十八問（後書き）

Bクラス戦しゅりょう！次の更新はいつになるやら……

マクベスのくだり、実は自信なかったり…なにぶん前に一度読んだ程度でして……違っていたらご指摘ください

第十九問

「その問題は 『大化の改新』」
「はい？」

遅刻して教室に入るなりこのセリフだ。俺の反応はそこまでおかしくもないだろう
補給試験も終わったBクラス戦終了二日後。今日にでもAクラスに向かうだろうとは思っていたが

「話が読めん。明久、なんなんだこれは？」
「あ、水月遅かったね。雄二が霧島さんの弱点？を説明していたんだ」

その他にも、純粋な点数勝負だとかも教えてくれた

「で、大化の改新か？ある程度掘り下げたところで学年首席が間違えるようには思えんが」

「いや、掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いだ」

「単純というと 何年に起きた、とかかのう？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

雄二がミスしなければ、の話だな

「雄二、何でそんな情報を持っている？本人から聞いたのか？」

「少し違うな。アイツとは幼馴染みだからだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

それはいわゆる嫉妬の成せる技だろう

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと!？」

「多分、綺麗な女子と幼馴染みだという立場がまずいんだ」

「そ、それなら秀吉はどうなる?しっかり鏡花とくつついてるじゃないか」

髪を切られた鏡花はあのと短く切り揃えて、目を隠そうとしたりもしない。おかげで雰囲気明るくなった気がする

『なにいいっ!?!』

俺達の中でしか言っていなかったからそうなるよな

『標的を変更。目標、木下秀吉』

うおっ!完全に感情が排除されてる。凄まじく平淡で機械的な声だ

「なんじゃ?かかってくるならばし寝てもらうぞい」

そう言いながら薙刀を構える秀吉

「秀吉君、やめようよ……」

「じゃが、あちらが「秀吉君……」分かったのじゃ。鏡花がそう言うのならそうしようかの」

『駄目だ!入り込める隙が無い』

『仕方がない……標的を変更。目標、坂本雄二』

「くっ……なら水月はどうだ?Aクラスの工藤と仲が良さらしいぞ」

『仲が良くないなら……第二標的、影隠水月』

『坂本雄二に制裁をくわえた後、裁判を行う』

「なんでも、水月と工藤は弁当を互いに作ってくる関係らしいぞ」

ちい、雄二め余計なことを……

『影隠水月を第一標的に変更。排除します』

「ってか雄二はなぜその事を……」

「翔子が言っていたんだ。『羨ましい』とな」

「くっ……」

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

「む。秀吉は雄二たちが憎……い筈無いよね」

「当然じゃ。ワシは鏡花一筋じゃからの」

うわっ、真顔で恥ずかしい事を……向こうで鏡花がトマトになっているし

「それに相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

「確かに……じゃあ、」

まずい！標的が減るだけだった！

「サラバだ！」

煙幕使いすぎだな最近……

「酷い目にあつた……」

あのと、しばらく様子見をして帰ったがすぐに囲まれて、結局大半を気絶させてやつと終わった

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

雄二が木下さんと交渉している。俺達はその後ろに並んでいる

「うーん、何が狙いなの水月くん？」

俺かよ！確かに知り合いの方が話し易いのかも知れんが……なら秀吉で良くない？

「とりあえず勝利、かな？」

「愛子がFクラス設備の教室になっても良いの？」

「皆の希望も大事だからな。俺達が出ないし、そのFクラスに負けたら……しょうがないさ」

実際は嫌だけどな

「そつか。でも、手早く終わる代わりにリスクを犯す必要も無いかな」

「だよなあ。ところでCクラスとの戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？」

「Bクラスとやりあう気つてある？」

「Bクラスって……前に来てたあの……」

「あのコスプレ野郎が代表のクラス。まあ他の人達はマトモだけど」

「でも、BクラスはFクラスに負けたから宣戦布告出来ないんじゃない？」
「……」

「残念。あれは『和平交渉により終結』になってるし勿論Dクラスもそうだ。戦争に問題は無い」

「いい性格してるね水月くん。それとも代表かな？」

いい性格しているのは全面的に代表です

「うーん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「さすがに信頼されてるな。霧島さんは」

「でもさすがに一本勝負じゃ万が一ってこともあるから五回やって三回勝った方が勝ちでどう？」

「だそうだが？どうする雄二」

「良いだろう。ただし、教科の選択権はこちらに貰おうか」

さっきの弱点を突く作戦の為か

「うーん……」

「……受けてもいい」

「うわっ！」

「うおっ！？」

明久の声に驚いてしまった

「……雄二の提案を受けてもいい」

若干の気配は感じていたが、普通だと気が付かんぞ……
心の中で霧島さんにそういつて霧島さんの方を向く

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

「して、その条件とは？」

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

俺達がBクラス戦の時に言ったのと同じだな

「もちろんこちらの出来る範囲内で常識的な事、だよな？」

こくりと頷く霧島さん。そこでさっきまで考え事をしている風だった木下さんが言った

「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

「交渉成り」異議あり！！」

某裁判ゲームのように叫ぶ俺。実はやってみたかったんです

「はい？」

「仮にも最上位と最下位の決戦だぜ？その条件じゃあAとCか、FとDぐらいのハンデじゃないか？」

「うーん、そうとも考えられるけど……」

「と、言うことで選択権を全てこちらに譲ってくれないか？」

「でもそっちはBクラスを倒す位だし……」

「あれの結末は『謀反』だぜ？こちらの戦力を測る要因にはならない。それにDクラス戦も姫路さん頼りだったから同じだ」

「でもさすがに全部は……」

「なら四つだ。それならいいか？」

「代表、どうする？」

「……それでいい」

「話の分かる人達で助かった。じゃあ今度こそ交渉成立ってことで、
良いよな雄二？」

良くない訳がないんだがな

「ああ。上出来と言っていい」

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

話し方だけなら康太に似ているが大分イメージが違うな

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「……水月」

「ん？どうした霧島さん」

「……落とし所は最初から決めてた？」

さすがにバレてますか……

「仰る通りです。それでは私は私わたくしは舞台を降りさせて戴きます故、失礼
いたします」

芝居掛かった口調で恭しく礼をして立ち去る
さて、どうなることやら……

第十九問（後書き）

交渉に水月を出すのが不自然じゃなかったかとちょっと心配なのですが…

某裁判ゲーム…大抵の人はお分かりかと思いますが『逆転裁判』です

第二十問

「では、両名共準備は良いですか？」

学年主任の高橋先生が雄二と霧島さんに問う

「ああ」

「……問題ない」

代表二人の返答も実に落ち着いたものだ

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

「ワシがやるっ」

おっと、いきなり姉弟対決ですか。これは下剋上に期待だな

「頑張つてね……秀吉君」

「うむ。行ってくるのじゃ」

両者が中央に出てくる

「彼女が出来て良かったわね秀吉」

「そうじゃな。告白されることも減れば良いのじゃが……」

そんなにもてるのか？秀吉って

「アンタ告白とかされてるの？」

「困ったことじゃがな……男子からじゃしの」

ピシッ

そんな音がこの空間に響く（気がしただけ）

「……………秀吉、ちょっとこっち来てくれる？」

あつ、秀吉が廊下に連れ出された

『何でアンタにはわかりそういつことがあるのよ!』

『きつと姉上の本性を無意識に感じ取って あ、姉上っ!ちがつ

……………!その関節はそっちには曲がらなっ……………!』

木下さんだけが帰ってきた

「秀吉は急用ができたから帰るってさ。代わりの人を出してくれる？」

「い、いや…………。ウチの不戦敗で良い…………」

返り血を拭きながら言われればそう言いたくもなるさ

「そう?教科選択権はどうする?」

「唯一の選択権をここで使ったことにして後でどうこう言われても困る。こっちが選んだことにしよう」

「そうですか。それではまずAクラスが一勝、と」

Aクラス

木下優子

VS

Fクラス

木下秀吉

生命活動

WIN

DEAD

「秀吉君……」

鏡花が秀吉の様子を見に行った。さすがに死んではないと思いきすけど……

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

ここで使ってきたか。流れを作って俺達のやる気を挫くつもりか？

「よし。頼んだぞ、明久」

おめでとう佐藤さん。きみの勝ちも確定だ
まあ、ここはカットでいいか。実況する気にならない
結論：明久、死亡

「死んでないからね！」

心を読むな

「そうだな。死んだのは召喚獣だけだったな……（ちっ）」

「今舌打ちしたよね!？」

「そんな細かいことは気にするなよ明久。先生、バカは放っておいて次どうぞ」

「わかりました。では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

康太か。なら勝てるな

「じゃ、ボクが行こうかな」

相手は愛子か……

「やつほー水月！参加はしないんだって？」

「ああ。愛子のクラスを落とす可能性がある戦いに参加したくはないからな」

「（雄二、水月のあれは無自覚だよな？）」

「（だろうな。ま、どうでも良いがな）」

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

愛子の方は知らんがまず無理そうだな

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

まあ、俺だって前の戦闘で一瞬見ただけだったから知らなくても無理はない

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……………キミとは違って、実技で、ね」

……………ああいう方面ではありませんように……………

「水月にも保健体育なら教えてあげようか？もちろんじ、実技で……………」

明らかにそっち方面ですよねぇ！？

「（どうする……下手な返答は愛子を傷付けることになるし……）」
「……まあ、その話はまた今度にしようか」

ありがたい。質問を取り下げられるとは

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試獣召喚つと」

「……………試獣召喚」

康太は小太刀を二本、愛子は巨大な斧を装備している。
が、決着は一瞬だった

「……………加速」

「……………えっ？」

「……………加速、終了」

康太の召喚獣が消えたかと思うと、次の瞬間には愛子の召喚獣を切り裂いていた

Aクラス	工藤愛子	VS	Fクラス	土屋康太
------	------	----	------	------

保健体育	446点	VS		
------	------	----	--	--

572点

強っ！愛子も凄い筈なのになんか霞む……

「そ、そんな……！このボクが……！」

そこまで落ち込む事なんですか？愛子さん

「これで二対一ですね。次の方は？」

冷静だな。次で決まると思っているのかな？

「あ、は、はいっ。私ですっ」

姫路さんが出る。相手は多分……

「それなら僕が相手をしよう」

やはり久保くんか。外見を借りた時を思い出さず

「ところで、Fクラスの人達に聞きたいんだが……」

「どうした学年次席？」

「Cクラスで僕が挑発的な行動をとったらしいんだが、記憶になくてね。何か知らないかな」

「さあな。そんな態度が挑発に見えたんじゃないか？」

「Cクラスに行ったことも無いんだが？」

「それじゃ知らないな。ただのいちゃもんか、または個人的理由だろ」

「……まあいい。ところで姫路さん、ものは相談なんだが……教科は総合科目にしないかい？」

「ちよつと待ったあ！それは」

「構いません」

「姫路さん？」

明久の制止ももつともだったが、姫路さんは提案を受けるようだ

「それでは……」

高橋先生がパソコンを操作する

Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	V S		
4409点				

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

軽く一教科分は差があるぞ！？

「ぐっ……！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

姫路さんが勝ったので勝ち数が並んだ

「これで二対二です」

高橋先生も少しは驚いているようだ

「最後の一人、どうぞ」

「俺の出番だな」

Aクラスからは霧島さん、こっちは雄二で代表対決になった

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

ウチのクラスには伝えてあったが、Aクラスは予想外の様でざわめきだした

「水月、そっちの代表は何を企んでるのかな？」

「愛子か。雄二のやつが霧島さんと幼馴染みらしくてな、間違える問題を知っているらしい」

「……聞いておいてなんだけど、言つて良かったの？」

「いいだろ。どうせ今から言いには行けないからな」

ついさっき二人は出ていったからな。今はディスプレイのみだ

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

日本史担当の……何だっけかな？まあいいや。日本史の先生が確認する

『……はい』

『わかっているさ』

『では、始めてください』

ついに始まった最終決戦。なのだが……

「嫌な予感がひしひしと……」

「その問題が出なかったりして」

簡単に言ってくれるな

『システムデスクに！』

クラスのやつらから歓声があがる

『最下位に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！』

『うおおおおっ！』

「何か違う感じだな……当たり前の問題を間違えるような、そんな感じだ」

《日本史勝負	限定テスト	100点満点
《Aクラス	霧島翔子	97点
《Fクラス	坂本雄二	53点

俺の勘はバカにできないらしい。

おかげで卓袱台はみかん箱になった……

第二十問（後書き）

これを書いてて思った。「木下姉弟戦どうしよう」と……
で、この結果なのですがいかがだったでしょう？

エピソード

「三対二でAクラスの勝利です」

現在地、視聴覚室。人波に流されて流れ着きました

「……雄二、私の勝ち」

内面的ダメージで膝をつく雄二に霧島さんが声をかける

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

姫路さんが明久に抱きついて止めている。自覚はないようだが……

「姫路さんの言う通りだぞ明久。お前なら……一桁くらいだろう？」

「そこまで酷くないよ！」

「でもアキだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

お願いだから否定してくれ…

姫路さんも大変そうだから少し手伝うか

「姫路さん、1、2の3で明久を放してくれるかな？」

「えっ？で、でも……」

「1、2の……」

「わわっ！」

「さんっ！」

無理矢理カウントしたら放してくれた。やっぱり優しいな

「明久、動くと首が飛ぶぞ」

「はいっ！？今、何と！？」

「今のお前は操り人形だ。マリオンネット根本の時と同じく鋼糸だから下手に動く
と切れるぜ」

実際は首を飛ばすほどの技能はまだ習得してないがな。だがそんな
ことを知らない明久はとたんに大人しくなる

「……ところで、約束」

霧島さんが雄二に言った。さて、何を頼むのやら……

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

康太は何をしているんだ？カメラを構えて……予測がついてるのか？

「わかっている。何でも言え」

おとこ漢だねえ。さすが代表

「……………それじゃ」

この部屋全体の空気が張りつめる

「……………雄二、私とデートして」

………はい？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

わお、雄二も隅に置けないねえ

「しかし、意外だな。お前のことだから『付き合え』とくるんじゃないかと思っていただが……」

「……嫌々付き合うぐらいなら、今のままでいい。でも諦めたくないから……必ず雄二を振り向かせてみせる」

乙女モード全開ですね霧島さん。さあて、雄二の反応は？

「……そうか。だが期待に答えることは出来んと思うぞ？」

「……大丈夫。雄二は友達と遊びに行く感覚でいい」

「まあ、それくらいなら付き合ってやるよ。約束だしな」

「……じゃあ今から計画をたてる」

雄二の首根っこを掴んで引きずって行ってしまった

『し、翔子、逃げたりしないからその手を放せ』

『……これは私の気分』

『気分で引つ張られてたまるか！』

………大変そうだな、雄二

「いやー、代表も大胆だね。まさか皆の前で言うなんてね」

「ん？愛子は知ってたのか？」
「もちろん。だって友達だし」

まあそうだな。もしかしたら相談されたこととかもあるのかも知れないな

「あつ、西村先生だ」

愛子がちょうど入ってきた先生を見つけたようだ

「本当だ。しかも明久の方に向かっていったぞ」

『ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな』

明久の声は聞こえなかったが西村先生の声は聞こえた

「……………えーと？」

『我が』つて？嫌な予感しかしないんですが……

『おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうさ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ』

「なあ愛子、あの先生って補習の担当だった先生だよな？」

「う、うん。そうだよ」

例の『趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎』になるやつだろうか？
出来れば遠慮したいものだ

「俺が出ていれば……」

「後悔してるの？」

「いんや。愛子のクラスを落とすのも嫌だったからな。後悔はしてないさ」

「そっか……ありがとね、水月」

「さてと、じゃあ帰るかな。一緒に帰るか？」

「いいの!？」

な、何をそんなに驚いてるんだ？

「まあ、雄二はアレだし、明久はさっき姫路さんと島田さんに連れて行かれてたし、秀吉と鏡花は楽しそうで入る余地無いし……親しい面子が残ってないからな。気にすることもない」

「そっか。じゃあ行こっか」

満面の笑みで俺の手を引つ張り、歩きだす

「おい、そんな急ぐなって!」

引つ張られながらも、これはこれで良かったと思えた

試召戦争 結果

対Aクラス戦 惜敗

エピソード（後書き）

本日最後の更新（かな？）

次回から清涼祭編にはいります

オリキャラ設定（前書き）

校内推薦通ったあ！

試験はまだ先なんですけどね…

もし受かったら12月からは更新速度上がるかもしれません

オリキャラ設定

・影隠 鏡花（かげかくれ きょうか）

性別…女

身長…美波と同じくらい

外見…黒髪で長さは肩ぐらいまでで目元が隠れていて、仕事るときだけヘアバンドで上げる。瞳は水色

性格…極度の恥ずかしがり屋

趣味…パソコン（主に情報収集や情報操作）

成績…理系Aクラス級、文系E〜Fクラス級

召喚獣…顔の上半分を覆うヘルメットのようなもの（華宮みたいな）を被っていてスーツを着ている武器は双剣（氷結鏡界の蒼氷コーティングみたいな）

腕輪…高速化（ムツツリー二のとは違い、各動作の速度が上昇）

クラス…Fクラス

・影隠 水月（かげかくれ すいげつ）

性別…男

身長…雄二ぐらい

外見…黒髪で腰辺りまでのびていておろしている。仕事するときだけ後ろで束ねている。瞳は水色

身長もあって、実年齢より高く見られる

事もしばしば

性格…明るく、面白い事が好き

趣味…機械いじり、身体を動かすこと（空手を少々やっている）

成績…文系Aクラス級、理系E〜Fクラス級

召喚獣：スーツ姿で武器は鎖鎌

腕輪：水を操る。点数によって量が変わる（召喚獣から見た津波サイズぐらいまで）

クラス：Fクラス

・水明山 紫（すいみょうざん むらさき）・影隠淡雪（かげかくれ あわゆき）

性別：男

身長：水月と同じくらい

外見：黒髪で肩ぐらい。瞳は水色だが、カラーコンタクトで黒くしている

性格：冷静（というか冷徹）だが根は面白いこと好き
成績：全教科Aクラス並（が、一教科名前を忘れBクラスに）

召喚獣：白いスーツ姿で武器は棒術の棒

クラス：Bクラス

三つ子設定

・水月と紫は一卵性、鏡花とは二卵性の三つ子

・あることがきっかけで真実の一端を知り、そこから鏡花が調べて全てが判明した

・幼稚園から中学三年までずっと一緒に高校で紫が離れるまで大抵一緒にクラスだった

・四季 詠々（よつのき うたよみ）

身長：168cmぐらい

外見：色素が抜けた透き通るような白髪をショートカ

ットにして紫のカチューシャをしている。瞳は黒

性格…明るく元気でムードメーカー

成績…平均的なBクラス成績

召喚獣…要所要所にサポーターのついた胴着のような
格好。武器は肘まで覆う手甲ガントレット

腕輪…強化（周囲の味方の能力アップ）

クラス…Bクラス

諸設定…紫に（仕事で）助けられて惚れた。その為、
紫の仕事について一通り聞いている

名前の由来

・鏡花、水月

まんま四字熟語「鏡花水月」から

・紫

四字熟語「山紫水明」を半分で切り、並べ替えた

・淡雪

三つ子で「雪月花」を完成させたかったため。淡雪である必要は
無かったりする

・詠々

「黄昏色の詠使い」を読んで「詠」の字がなんか気に入ったた
め

オリキャラ設定（後書き）

キャラ設定ってこんな感じでいいんだろうか？
そんなことを考えながら作業する作者でした

第一問

桜の色も消え、代わりに緑が増える頃、俺達は……

「明久！こいやっ！」

「勝負だ、水月！」

野球をしています

「（明久よりも問題なのは雄二だな。どのコースに来るか……）」

「それ反則じゃないの！？」

どんなコースを指定したんだ！？雄二のやつ！

まさか直撃コースか！？……本^{マジ}気で投げてくることはなさそうだが、狙いは頭か？なら……

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

おつとまずいな。じゃあ、名前の通り影に隠れるように逃げさせて貰おう

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

ずいぶんとやる気無いな雄二

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

オイオイ、トップが役目を放棄するなよ

その後、島田さんが副実行委員つきでやることになったんだが……

候補？……吉井

候補？……明久

わーすごい。明久が副実行委員だって

議論はつまらなそうだから省略させていただこう

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

西村先生が来た……特に何も言っていないが俺も野球やってたのバレてるのかな？

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

島田さんが言うが、あれだとまずくないか？

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウェディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

「……補習の時間を倍にした方が良さかもしれんな」

ですよ〜。中華喫茶とかだけなら『まだ』マシだろうに……

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

西村先生が一喝する。この先生ならおそらく……

「そつだぞ皆。鉄人先生がおっしゃっているのは、明久を選んだのがバカだ、ということだ」

「その通りだ。稼ぎをだしてクラスの設備を向上させるつもりは無いのか？」

鉄人の一言で教室が騒がしくなる。そんな方法ありだったんだ……

このぶんだと勝手に決まりそつだから放っておくか

内側でそんな風に考えていると鉄人が近寄ってきた

「水月、先生に対して敬語なのは良いが『鉄人』と呼ぶんじゃない」

「あつ、すいません鉄人先生。どうも最近、影響されてきています」

このクラスは珍じゅ……ユニークな人が多いからな

「はあ、せめてこれ以上影響を受けない様に心掛けろよ」

「努力します」

ふと周りを見ると、島田さんが皆をまとめようとしているがまとめられていない様子が見えた

それにしても五月蠅い。出来るはずのない意見とかまででているよ
うだし…

スウツ

ビクッ！！！！！

『『『……………』』』

ちよつと目を細めて殺気を放つたら静かになった

あ、もちろん女子や関係の無い秀吉、雄二、明久には放ってないぞ

「す、水月、今のは何なの？」

「ああ、ただの殺気だよ明久」

『『『（ただのってレベルじゃ無かったぞ！？）』』』

「さて島田さん。面倒だろうからその三つから決めるってのはどう
かな？」

「そうね。じゃあ、一人一回手を挙げること！まず写真館の人！

はい、次はウェディング喫茶！ 最後、中華喫茶！」

パツと見た感じだとよく分からないな……せめて中華喫茶であるこ
とを祈るが

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

良かった。祈りが通じたのか？

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

須川か……確かこの意見を出したのも須川だったな。ならおかしくもない

「……………（スクツ）」

康太が立ち上がった。料理出来たのか……なにか嫌な予感がしたと思っただけ、周りの話では『チャイナドレス見たさに中華料理店に通ってるうちに見様見真似で出来るようになった』という説が有力らしい。確かに否定できない（汗）

「じゃあ俺も厨房にしようかな」

「分かったわ。じゃあ厨房班希望はさっきの三人の方、ホール班はアキの方に集まって」

明久がホールで大丈夫なんだろうか……客に『頑張つて』とか言われそうなんだがなあ

厨房希望の人達をまとめていて知らなかったが、この時バイオ兵器の作者（姫路さん）も厨房を希望していたらしい

「水月、ちよつといい？」

放課後、帰る支度をしていたら島田さんが声をかけてきた

「どうした？島田さん」

「喫茶店が成功するように『支援』して貰いたいの」

「つまり依頼って事？……そこまでするような事か？」

「実は」

どうやら姫路さんが『学校の状況』を理由に転校するおそれがあるらしい

「なるほど。ではその依頼、受けさせてもらいましょう」

「ありがとう。で、報酬なんだけど……」

「それなら今度何か奢ってくればそれでいいぜ」

「えっ？それだけで良いの？」

「半分は俺の意思だからな。むしろ、もっと少なくてもいい。例えばジューズ一本とか」

「じゃあ最初の条件でお願い」

文句は言わないけど最初の条件でいいのかな？

「了解。で、何からするべきかな……まず雄二を何とかするか」

「あ、それはアキに頼んでおいたから多分大丈夫よ」

わお。行動が早いねえ

「なら学園長室の前で待ってるか」

「？何で学園長室の前なの？」

「姫路さんの転校の理由の中で厄介なのが『教室のボロさ』だからな。雄二ならおそらく学園長に直訴する筈だ」

「ふーん。じゃ、任せていい？」

「勿論。友人の依頼を疎かにはしないよ」

それだけ言って学園長室へ向かって歩く

……雄二が来なかったらどうしようか…

第一問（後書き）

水月に鉄人と呼ばせてみました。
今はまだ「鉄人先生」とか言ってますが、最終的には「鉄人」だけにしようと思ってます

第二問

「遅かったな雄二」

現在地… 学園長室前

雄二と明久が連れだつてやって来たところだ

「やはり雄二もこの結論を出したのかな？」

「当然だ。学校に許可無く出来る事じゃない」

「水月、学園長は中に居るの？」

「ああ、今は教頭とお話中だ」

「それは好都合じゃないか。さつさと行くぞ」

「失礼しまーす！」

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

ガキどもとはご挨拶だな。文句の言える立場ではないが……

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

「いえいえ、これは私の計画ですよ竹原教頭」

「は？」

全員目が点になってるなあ。まあ、いきなりこんなこと言い出したらな

「竹原教頭は私達の事をご存知でしょうか？」

「『支援者』だったか……誰の差し金だ？」

やはり知っているか……

「ここで言ってしまったては信用がた落ちでしょうから言えませんが……まあ、学園長ではないとだけ言っておきましょう。ここは退いて下さいませんか？」

「……いいだろう。それでは、この場は失礼させて頂きます」

学園長に挨拶を忘れないあたり冷静だな

「行ったか……で、水月。そっちのガキどもは？」

「我がクラスの代表とキングオブバカです」

明久が何か喚いてるが気にしない

「二年F組代表の坂本雄二です」

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」

雄二の自己紹介を聞き、学園長が言った
明久の事は共通認識らしい……哀れ明久

「で、アンタは誰に雇われているって？」

「ああ、あれはハッターですよ。我々の交渉に邪魔だったので」

自分の意思だから言ったこともあながち間違っていないしな

「そうかい。そういうことなら話くらいは聞こうじゃないか」

「ありがとうございます。その事は代表から」

視線で雄二を促す。こういったことは代表者が言うからいいものだ

「Fクラスの設定について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

敬語使ってるから感心したのに、もういつもの雄二のようだ

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

完全にいつもの雄二だな。最後に『です』がついているぐらいしか違いが分かん

「あの、学園長……？」

明久が恐る恐るといった感じで話しかけている。さすがにヤバいと思っ

「（……ふむ、丁度いいタイミングさね……）」

何か言ったか？よく聞こえなかった

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」

それで済むとは思えな……

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久。もう少し態度には気を遣え」

「雄二もだがな」

予想した通りだがナチュラルに暴言はくなよ

「ではこういうのはどうでしょう?」

「ん?なんだい、藪から棒に」

本当はこういうのは嫌なんだけどな……

「この三人に何か『依頼』をして、その報酬という事にするというのはどうでしょうか」

おそらく学園長はこれに近い提案を考えている筈だ。これなら体面的にも『生徒が必死に頼んできたので断れなかった』ということに出来るしな

「……いいだろう。その提案、受けようじゃないか」

「ありがとうございます」

「その内容だけど……清涼祭の召喚大会、その賞品は知ってるかい?」

「優勝は……如月ハイランドのプレオープンプレミアムペアチケット二枚と白金の腕輪……だっけ?雄二」

「ああ。んで、準優勝はプレオープンのペアチケット二枚……プレミアムじゃないやつな」

「最後に第三位はプレオープンのペアチケット一枚と銅あかがねの指輪、でしたよね?」

「そうさ。でもちよいと問題があつてね」

「どの賞品にですか?」

「プレミアムペアチケットさ。アレに関して良からぬ噂を聞いてね。回収したいのさ」

「回収?出さなければいいだけじゃないんですか?」

「明久、これは多分正式な契約になっているんだ。こちらの都合で変更は出来ないんだろう」

変更すればただでさえ目立っているこの学園だ、周囲に叩かれること間違いなしだな

「その通りさ。相変わらず頭の回転は早いねえ」

「で、ババア。その良からぬ噂ってのはどんな噂なんだ？」

「あるジंकウスをつくる為に無理矢理に事を進めるらしいんだよ。そのジंकウスは『ここを訪れたカップルは幸せになる』というものらしくてね」

「？そのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

確かに無理矢理というのは気に食わんが、概ね明久に同意だ

「それが『結婚までをコーディネート』でもかい？」

「な、なんだと！？」

「あ？どうした雄二」

「い、いや……翔子にデートに誘われて、『プレオープン』のチケットが手に入ったらな』って言ったんだ。アイツならきっと優勝を狙ってくる。そしたら……（ダラダラ）」

さすがに結婚はな……

「そこで、だ。そのチケットの回収を吉井と坂本に頼みたいのさ」

「なっ！？なぜ俺では駄目なんですか？」

「アンタには別の依頼があるんだよ」

「……どういった依頼でしょう？」

「まあそう焦るでないよ。そっちの二人はそれでいいかい？」

「わかりました。この話、引き受けます。ただ……」

雄二の目が変わった。何かを試すような、そんな感覚だ

「『ただ』何だい？」

「トーナメントの組み合わせが決まったら科目の指定をさせていた
だきたい」

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していた
けど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

今度は何かを確信したような表情になったな……

「さて。そこまでしてやって優勝出来なかった、なんてのはなしだ
よ」

「無論だ」

「じゃあそっちの話は終わりだ。席を外してもらおうかね」

「………分かりました。失礼します」

雄二が何か喚いている明久を連れて出ていった

「……さて、じゃあ本題に入ろうかね」

「本題？教頭の事でしょいか？」

「そうさね。アタシの失脚を狙っているらしくてね、白金の腕輪の
暴走はうってつけらしくてね」

学園長の言った『白金の腕輪の暴走』だが、どうやら高得点の人が
使っていると暴走するらしい

「ちゃんと調整してくださいよ。俺の『銅の指輪』は完璧なんです
から」

「馬鹿言っんじゃないよ。そっちの機能は觀察処分者の応用じゃないか。こっちとは訳が違うよ」

銅の指輪の効果は『物理干渉能力（フィードバック無し）』だ。ちなみに俺の作だが自爆機能は無い

「まあそこは置いておいてだね、アンタ達には竹原を追い詰める手伝いをして欲しいんだよ」

「分かりました。報酬は先程言ったことですよね？」

「ああ、よろしく頼むよ。本格的に動くのは清涼祭当日でいいから下準備を忘れるんじゃないよ」

「承知しました。ああ、あと俺も誰かと召喚大会に出場しても平気ですよ？」

「大丈夫だけど、それがどうかしたのかい？」

「強敵でも倒しておこうと思ひまして……ということでは紫たちやらせてくれませんか？」

「いいだろう。ただしこれは報酬の前払い分ということにさせてもらうよ」

「了解しました。それでは……あ、そうそう」

学園長室を出ようとして、ふと思ひ立つて言った

「我等が代表は何か感づいたようですよ？」

「……………そうかい」

「以上です。では今度こそ失礼します」

第三問

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにな」

「そうか？勉強以外ならそこそこ頭いいと思うぞ」

なんと言うことでしょう、教室がまるで喫茶店のような空間に変わっているじゃありませんか

「スマンな、出来るだけ教室設備を使えという規則さえ無ければ…

…」

「いいわよ別に。このテーブルなんて、パツと見は本物と区別つかないんだから」

「それは木下君と鏡花ちゃんが作ってくれたんですよ。二人で楽しそうに、でもしっかりと作業してました」

秀吉が演劇部の小道具からテーブルクロスを借りてきたらしい

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

「さすがにこれ以上は……」

捲られたクロスの下にはみかん箱が覗いている

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「その時は俺が何とかするさ」

外部から持ち込んでも、使い始めてしまえばこっちのものだ
ただ、気になるのは竹原教頭だ。人を使って明久達、もしくは店を

妨害してくるかも知れない

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

「明久五月蠅い」

「酷い！」

康太が手に皿とティーセットを持ってきた

が、何だこの嫌な感じは……………とりあえず、様子を見よう

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても　んゴパっ」

緊急警報発令！バイオ兵器が紛れ込んだ模様！即刻退避せよ！

「お、俺も厨房だし、様子みて手伝ってくるわ」

あくまで自然に、でも早急に撤退する。明久の死体もどきは無視

く少し遡りside鏡花く

土屋君が味見用の胡麻団子を持ってきてくれた

「わぁ……………美味しそう……………」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの。ほれ鏡花」

楊枝が無いせいか、秀吉君が胡麻団子を口元に持ってくる

「えっ、あ、その……」
「ん？どうしたのじゃ？」
「（ねえ瑞希、あれってわざとだと思う？）」「
「（いえ、多分わかっていないのかと……）」「
「（木下って案外天然だったのね）」「
「（そうですね）」「
「なんじゃ、食べんのか？鏡花よ」
「た、食べる……」

口を開けたら秀吉君が胡麻団子を入れてくれた

「ムグムグ……」
「どうじゃ？美味しいじゃろ」
「美味しい……」

その後も同じことをして、周りから『いい加減にしろ！』と言われるまで秀吉君は気付きませんでした

）side水月）
「もうこんな時間か……須川、ちょっと召喚大会行ってくるわ」
「わかった」

料理中のせいかな、少し返事が素っ気ない

「えっ、水月もやっぱり出るの？」

明久がちょうど近くに来ていたらしい

「ああ（依頼では無いがな）」

「（そうなんだ）水月は何で出ようと思ったの？」

「（銅の指輪の回収だ）なんとなく面白そうだったしな」

「ふーん。そうなんだ（何で回収？）」

「（俺の作品なので手元に置いておきたいからだ）んじゃ、行ってくる」

まずはAクラスだな

Aクラス、メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』

「……お帰りなさいませご主人様」

「似合ってるね霧島さん。悪いけど愛子借りていいかな？」

「……わかった。待ってて」

とりあえず外に出て待つ。あの様子を見るに、少し時間がかかりそうだったしな

「お待たせ！」

早っ！ってか早っ！！きちんと制服着てるし……

「……………早かったな」

「そうかな？」

「まあ、早いにこしたことはない。んじゃ、行くか」

「うん。楽しみだな」

特設ステージ前

「不戦勝お!?!」

「どうも風邪を引いて寝込んでいるらしく、辞退すると……」

風邪か……食中毒だったらウチの外れを引いたやつかと思ったが違うらしい

というか、あれは食中毒のレベルでは無い気もするがな

「それじゃあ仕方ないか。あーあ、ボク結構楽しみだったのに……」

「まあ次があるって。それまでの我慢だろ」

「……そうだね。前向きに考えなきゃね」

「そうそう、楽しみは後に取っておくもんだ」

二回戦はおそらくアイツらだろう。俺も楽しみだなあ

中華喫茶『ヨーロッパアン』

「ただいま、つとどうした?」

やけに騒々しいな

「あ、水月。それが……」

「営業妨害が出たのじゃ。テーブルの事で……今から雄二達を呼びに行くところじゃ」

あーそうだ、開催しちゃったら外から持ってくるの無理だってこと忘れてた……仕方ない

「ちょっと待った。秀吉は演劇部から有るだけテーブルを持ってきて欲しい。鏡花は使っていない机のある場所を調べてくれ。あと、あの二人組も」

「了解じゃ」

「わかった……」

さてと、あのソフトモヒカンと坊主だな。どう料理してやろうか……

『まったく、責任者はいないのか！』

やれやれ、せつかちなお客様だ

「失礼ですが、今代表は外しております……代理ではありませんが私、影隠と申します。何かご不満な点がございましたでしょうか？」
「ご不満も何も、このテーブルは何だよ！」

五月蠅いなあ。もっと落ち着いてくれよ

「それに関してはこちらのミスでして、テーブルが届いていなかったので代用にと。あと、少し声を控えて頂けませんか？周りに迷惑です」

「んな事知るか！」

顔面に向かって拳が飛んでくる

ガッ

右からのパンチは俺の左頬に直撃した

「声を控えて頂けませんか？」

まだ拳が当たったまま、殺気と共に言う
途端、硬直する二人組

「あ、ああ……」

「分かって頂けて何よりです。それで、用件のほうですが……」

「いや、やっぱり止めておこう。邪魔したな」

本当にね

去っていく二人組を見送ると、入れ替わりに秀吉がやってきた

「おお、いいタイミングだ！そこに置いてくれ。あとは俺の『指鋼糸』でシヨーに見立てる」

「そうかの。では、頼むぞい」

鋼糸で持ち上げる。パツと見は浮いている様にしか見えない

「申し訳ありませんでした。只今からテーブルを入れ替えさせていただきます」

一人で入ってくるようで、実は後ろにテーブルが浮いている（鋼糸で持っているが）

『何だあれ？』

『シヨーでもあるのかな？』

『どうやって浮いているんだ？』

「申し訳ありませんが、お客様は一度こちらにお集まり下さい」

そう言つて教室の隅にあつめ、鋼糸でクロスを持ち上げる。もちろん、こちらは傾いたりしないように細かい網目状に組んである

『おお！』

『完全に浮いてる！』

『念動力か！？』

違います

『あのクロス……生物だったのか……』

そんな事はありません

持ち上げたクロスの下にテーブルを滑り込ませる

「テーブルの到着が遅れておりますので、窮屈でしょうがしばらくこちらでおくつろぎ下さい。到着し次第、随時入れ替えをいたしますので」

何とか一件落着、かな？

「さすがだな水月」

「うおっと、何時から居た？雄二」

「シヨ一の開幕あたりからだ」

「水月、あれも鋼糸つてやつ？」

「ああ、結構便利だぜ。っと、テーブル調達に行くか」

「そつだな。二回戦まであまり時間が無い、急ぐぞ」

雄二と明久が使つてないテーブルを隠して俺が回収・入れ替えを担当して、何とか必要数を集めた

第三問（後書き）

水月の技、応用しすぎた気がしてなりません：
あと、鏡花と秀吉の絡ませかたがイマイチわかりません。強引過ぎ
たかな？

第四問

「やっぱりこのペアか」

会場で相手ペアと対面した訳だが……

「どうした水月、不満なのか？」

「いやいや、どうせ紫とやるならもっと上のほうでやりたかっただけだ」

そう、対戦相手は紫と四季さんだ。どうせなら一般公開のあるあたりでやりたかった

「科目は英語だろう？お前は大丈夫なのか？」

ステージに向かいつつ、紫が聞いてくる

俺は文型だが英語はBクラス下位レベルが常だ。鏡花もそのぐらいらしく、本当に平等（？）な学力っぽくなってる

「今回は結構イケたんだよ。退屈させるような点数じゃあない」

「そうか。で、そっちが……」

「俺のペアでAクラスの工藤愛子だ。愛子、コイツは水明山紫、俺の親友であり三つ子の内の一人。で、隣がその彼女の四季詠々さん」

愛子にもBクラス戦後に事情は説明済みだ

「はじめまして、工藤愛子です」

「はじめまして、四季詠々っていいいます。よろしくね」

「水明山紫だ。よろしく」

そうこうしている間にステージに到着した

「さあて、やりますか！」

「それでは二回戦、英語の試合を始めてください」

「「「「試獣召喚！！」」」」

四人のデフォルメされた姿が現れる

ガントレット
「手甲？」

四季さんの召喚獣は各部にサポーターを着けた道着のような姿に、手には頑丈そうな手甲を着けていた

Fクラス	影隠水月	& a m p ;	Aクラス	工藤愛子	V S
Bクラス	水明山紫	& a m p ;	Bクラス	四季詠々	
英語	4 0 1 点	& a m p ;	4 4 0 点		
V S	4 5 3 点	& a m p ;	4 2 5 点		

皆400点オーバーかよ！でも、思ったより差が小さい……

「いくぞ、水月」

「かかってこいや、紫」

紫の棒術での攻撃を鎖で流しつつ、分銅で攻撃をはかる。向こうでは愛子と四季さんが戦っている

「大分扱いに慣れてるな紫」

「コツさえ掴めばあとは簡単だ。お前だってそうだろう?」
「まあな」

攻め辛い……棒の両端を使って多角的に、攻めては守ってを繰り返しているためだろう

「……………詠々、アレをやるっ」

「わかった!ちゃんと守ってよ?」

「当たり前だ」

ん?何をするつもりだ?

思うが早いか、四季さんの召喚獣の腕輪が光を放つ。しかし、召喚獣は……

「動きが止まった?」

そう、両拳をあわせて動きを止めてしまった。それ以外に変化は無い……

Fクラス	影隠水月	& a m p ;	Aクラス	工藤愛子	V S	B
クラス	水明山紫	& a m p ;	Bクラス	四季詠々		
英語	3 2 1 点	& a m p ;		3 5 8 点	V S	
	3 7 1 点	& a m p ;		3 4 3 点		

戦闘で減ってはいるが、特に点数にも変化は無い

「考え事してる暇は無いぞ」

紫の召喚獣が愛子の召喚獣を叩く。だがまだ平気なはず……

「えっ！？」

「何っ！？」

愛子の召喚獣が戦死した

「な、何が……」

「詠々の腕輪は範囲内を一定時間のみ点数〓攻撃力に出来る」

待て待て、普通は点数の何割かだろうが！

何だそのチートもどきは！！……待てよ、範囲内って事はこっちもかでも、攻撃は全部避けると？

ピンチだ。四季さんは動けないように助かったが……

「くっ、腕輪発動！」

20点分を出して上手く使う！

「いつけー！」

小さな円盤状にして飛び回らせる。水自体も超回転させているので切れ味が発生する

「まだまだあ！」

右から左から飛んでくる円盤に対応しようとする紫に分銅による追撃を加える

やはりあの効果はこちらにもあるらしく、分銅をよける為に円盤に掠めることも出てきた

「隙あり！」

ほんの少し軸がぶれたのを見て一歩で近づき、首に一閃。これなら点数で負けようが一撃だからな

「ちっ、詠々！スマン！」

Fクラス	影隠水月	& a m p ;	Aクラス	工藤愛子	V S	B
クラス	水明山紫	& a m p ;	Bクラス	四季詠々		
英語	3 0 1 点	& a m p ;	0 点		V S	
	0 点	& a m p ;	3 4 3 点			

腕輪は解除した様で接近してきた

「おりゃあ！」

鎖を振って分銅で横から叩く

「甘いよ！」

体制を下げ、さらに加速して避けきつた

「くそっ」

先ほどの水をレールにして即刻撤退

「凄いね四季さん。まさかここまでとは……」

また円盤状にして牽制する

「まあね。最近自分も鍛えてるし、召喚獣の扱いも練習したから」

「鍛えてる？格闘技か何かか……なぜ？」

「いつか紫くんのお仕事を手伝えるようになるためだよ」

凄いな愛の力。紫は若干呆れ気味だが……どうせ『危ない目に合わせたくないんだが……』とか思ってるんだろう

「さて、仕込みは終わった。俺の勝ちだ」

「えっ!？」

唐突に四季さんの召喚獣の首が切れた。……首狙ってばかりだな、俺

「『指鋼糸』の応用で、名前は……『指水糸』ってところか」

そう、トドメをさしたのは糸状になった水だ。糸のまま仕込んで一気に引いた（引いたなんてレベルでは無いのだが）ので切れた、という訳だ

「工藤さん、影隠くんペアの勝利です」

勝ち名乗りを受けてステージから降りる

「まさかあそこまで操れるとはな水月」

「いやいや、ただの苦し紛れが成功しただけだ。マトモにやってたら負けてたよ」

「そんなこと無いですよ！あの分銅を避けられたのもマグレみたい

なもので……」

「じゃあ、今回は水月の運がよかったってことかな？」

「そんなところだろ。っと、そうだ。三人にプレゼントだ」

そう言つてチケットを渡す

「ウチの中華喫茶の一品無料券だ。是非ともご来店を」

「そうか。悪いな水月」

「やった！紫くんに行かせて頂きまーす」

紫が無料券を受け取り、去っていった

「ほら、愛子も」

「あ、うん。じゃあボクからも…はいコレ」

「何々…スペシャルチケット？何が起るんだ？」

「一品無料か、または特別メニューとかかな？」

「メイド一人と保健体育の実習ができます」

「そこ！？あえてのそこですか！？」

「…と、いうのは冗談でスペシャルメニューが食べられるんだよ」

「冗談じゃなかったら責任者の頭は大層狂っていることだろうさ」

「そ、そうか。暇が出来たら行かせてもらつよ」

「うん。じゃあボクはここで」

「おう。じゃあな」

さて、クラスに戻るか

第四問（後書き）

いつかやりたかった対戦を実現させてみました！

物語の展開上、こうしましたが実際にやるとどうなることやら…

本日の更新はこれにて終了、かな？

出来れば推薦入試までにもう一度更新したいのですが…できるかな？

第五問（前書き）

何かすつごく間が空いてしまった……

本当は合格発表の後には更新するつもりだったんですが（汗
大学入ってからあんまり更新速度は上がらなそう……なのでその
お詫び（？）に今回は二巻の最後までいっぺんに更新します！

第五問

「さっきぶり……」

「早かったね、水月。暇はできたの？」

「まあ、そんなところだ」

俺達は今、Aクラスのメイド喫茶に来ていた。
そんな理由は少し前……

Fクラスにて

「勝ってきたぜ」

「あ、お帰り水月。遅かったね」

明久が反応してくれた。小さな女の子をくつつけた状態で……

「明久、それは犯さ「ちょっと！それは誤解だよ！！」そうなのか
雄二？」

「ああ、島田の妹らしくてな。何やら前に会ったことがあってなっ
ているらしい」

そうか。それはすまなかったな明久

「謝罪は声に出してよ！」

「お前はときたま心を読むのをやめろよ。俺は影隠水月っていうん
だ、キミは？」

「島田葉月です。よろしくです！」

葉月ちゃんは元気いいなあ。何か良いことでもあったのかい？

「水月！僕に謝罪してよ！」

はいはい、すいませんでしたあ

「また声に出してないよ！」

「だから心を読むなど言ってるだろ」

「そんなバカは放っておいて、行くぞ」

「どっか出かけるのか？」

「どうも外部で悪評が流されているようでの……何とかしなければ
いけんのじゃ」

「悪評？まさかあのバカそうな二人組か？」

「かもしれん。じゃから確認しに行ってもらうのじゃ」

「ついでに飯も食っておくつもりだ。もし常夏コンビだったらそっ
ちが優先だな」

「常夏？」

「あの二人組、3 - Aの常村勇作と夏川俊平を坂本君が略した（？）
の……」

そんな名前だったのか……常夏コンビね、ナイスなネーミングだ

「と、言うわけで行くぞ」

「おう」

Aクラス前

「明久、水月、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言っているのさ！早く中に入るよ！」

「俺は行ってみたいんだが……」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

「無理」

「水月、貴様……」

そんなに憎々しげに睨まれても……

「確認しない訳にもいかないだろう？だったら早く済まそうぜ」

「ん、それも一理あるが……」

「あーもう！うっとおしい。行くぞ！」

島田さん達はもう入ってしまったている

雄二を半ば蹴り入れると、そこには霧島さんが

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

大分段階をすっ飛ばしたな。雄二の話じゃ、まだ付き合っていないはずだが

「おかえりなさいませ！ってあれ？水月？」

と、まあこんな感じで冒頭に繋がった訳だ

「さつきは見れなかったが愛子も似合ってるな」

「ありがと 何なら保健体育の実しゅ「何でもそこに繋げるな！」

あははっ、冗談だよ冗談」

「まったく……」

いちいちビツクリさせやがって

「お席にご案内いたします」

霧島さんの案内で席につく。ちなみに愛子は誰かに呼ばれて行った

「……では、メニューをどうぞ」

凄っ！普通の店みたいなメニューとは……

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

女子は仲良く同じメニューか

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

ここまで来てそれなのか明久！？ ……まあ、いい。それよりも

「霧島さん、これってどうすればいいの？」

無料券を見せながら聞いてみた

「……それはまずメイドを1人指名する」

「ふむふむ。それで？」

「そのメイドの料理が出される。はい雄二、私の分のチケットあげる」

「これって皆持つてるのか？」

「……大半が持つてる。あげる人は家族だったり恋人だったり親しい友人だったり、人それぞれだけど」

じゃあ俺は親しい友人だな。雄二はさしずめ意中の人ってところだ

ろう

「じゃあ俺は愛子を指名で」

「俺は翔子以が」

「……ご注文を繰り返します」

気配で察したのか雄二が汗だくになっている

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、スペシャルメニューの『工藤愛子』と『霧島翔子』指名が一つずつ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

雄二が動揺している様は愉快だな。いつもがアレなだけになおのことな

「……では食器をご用意致します」

女子三人にはフォークが、明久の前には塩（食器…なのか？）が、俺の前には箸、雄二の前には

「しよ、翔子！コレうちの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ!？」

説明が不要になったな。しかし凄いな、恋する乙女達は……（断じて食器ではないがな）

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

「ちよつと待て翔子！まだ付き合ってもいないのにいきなり結婚なのか!？」

「……………電撃結婚」

「電撃なんてレベルじゃないなあオイ！」

「工藤愛子特製スペシャルメニューをお持ちいたしました！」

「早いなオイ！」

「入店直後に作り始めたからね」

上から霧島さん 雄二 霧島さん 雄二 愛子 俺 愛子の順だ。
念の為。

メニューは肉じゃがにワカメと豆腐の味噌汁、白飯と漬物のようだ。
明らかに時間を超越している気がするが……

「もし俺が別の奴を選んでたらどうするつもりだったんだ？」

「えっ……………考えてなかった。というか、その可能性もあったの
？」

「いや、ないけどな」

「よかったあー。ビックリしちゃったよ」

「悪い悪い。んじゃ、いただきます」

きちんと手をあわせてから食べ始める

「ん！美味いっ！前にも思ったが愛子って料理上手いな」

「あ、ありがとう／＼／＼（鏡花、水月の好物教えてくれてありがとうー！）」

箸が進んで、瞬く間に平らげてしまった

「あー美味かった！ごちそうさま」

ん？島田さんに姫路さん、なぜ俺の方を見ている？

「（……さっきのセリフも無意識よね？）」「

「（おそらくは……）」

「（ああいうセリフって無意識に出るものなのかしら？）」「

「（さあ……でも、羨ましいです）」

？よく分かんが、気にしないことにしよう

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

標的を視認。一時様子を見る……

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さっきいった2・Fの中華喫茶は酷かったからな！』

殺っていいかな？

「待て、明久」

タッチの差で早く動いた明久に制止がかかる

「雄二、どうして止めるのさ！あの連中を早く止めないと」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評はさらに広まるだけだ」

一理あるどころか全面的に正しいんだが……

そう考えていると雄二が霧島さんと呼んだ

話を聞かぎり、あの二人は何度も来ているらしい

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

「……わかった」

凄いなあ。こんな要求、普通なら却下だろうに……あれっ？視界が急に……

「水月は見ちゃダメ」

あ、愛子？何が起こっているんだ？

「き、霧島さん！？こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ！」

「そうよ！ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」

「わあゝ。お姉さん、胸おつきいです」

霧島さんに何が起こった！？

その後、メイド服（予備）を借りられたようだ

「着るのはお前だ」

ご愁傷さま明久。お前の事は3日は忘れない

「で、もう一着は水月だ」

「何い！？」

おのれ雄二め……

「じゃあ水月、お願いできる？（これも支援の内よ）」

そっくるか島田さん

「……いいだろう。ただし、変装はある程度させてもらっぜ」

「そうか。だが、他人の姿は使うなよ」
「わかってるって」

明久は渋っているがどうせ雄二が丸め込むだろう

数分後

「これでよろしいでしょうか？」

俺は変装を終えた。明久も似合ってるじゃないか
俺の格好は長い黒髪は高めの位置で一つに縛って（いわゆるポニーテールってやつだ）メイド服を着ている

「二人ともずいぶん似合ってるな。それなら大丈夫だろうから行ってこい」

「かしこまりました」

常夏に近づいていく……この言い方だと夏真っ盛りな感じだな

「お客様、掃除をいたしますので、少々よろしいでしょうか？」
「おっ！えらく綺麗なメイドだな。手早く頼むぜ」

視線がキモい！お望み通り手早く始末してやるよ

「あっ……」

ドスッ

「ウグッ」

よろけたフリして肘鉄を鳩尾に叩き込んでやったぜ

「も、申し訳ありません！お怪我はございませんか？」

「あ、ああ。（大人っぽいのにドジっ子……）」

一瞬ブルツとしたぞ……次の一撃で仕留める！

『さて、痴漢行為の取調べの為、ちょっと来てもらおうか』

「くっ、行くぞ夏川！」

モヒカン頭が逃げ……えっ！？

「こ、これ、外れねえじゃねえか！畜生！覚えてる変態めっ！」

何も見てない。何も見てない。俺は何も見てない。

アレは幻覚。アレは幻覚。アレは幻覚だ。そうに違いない……

「逃がすか！追うぞアキちゃん、おい、フリーズしてんじゃねえスイちゃん！」

だって、ねえ……あれは反則だろう。変態にもほどがあるぞ

「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

「私は水蓮です」

女装するときはいつもこの名だ。……変な趣味とかじゃないぞ！仕事でだからな！

「明久！水蓮！奴らは四階に逃げたぞ！」

「ごめん！やっぱアキちゃんをお願い！なんだか周囲の視線が刺さるんだ！」

ふっ、馬鹿め。つと、電話？しかも愛子だと？

「もしもし？」

『三回戦まで時間がないよ？』

しまった！時間気にするの忘れてた！

「何とかする。会場で会おう。」

雄二すまん！三回戦の時間

だ！」

「わかった。さっさと行け水蓮」

ありがたい。まだ変装をとく時間はあるな

第六問

「いらっしやいませー！」

四回戦である実験を終えたり、皆が四回戦で戦って雄二の一人勝ちになったり、チャイナ服を着ることになったり、まあ色々あった。おかげで客も増えたし、文句は無い

次は準決勝なんだが、先にあるのは俺達の方だ。なんでも常夏が相手だとか……

「水月、もうそろそろだから呼びに来たよ」

「おう。今いく」

お盆を厨房に戻す。チャイナ服を着ることになった時、俺までホルにまわされてしまった（あくまで男物を、である）

「よし。じゃあ行くか」

「それにしても水月似合ってるね。今回はこのまま行くの？」

前はこっそり着替えて行っていた。だが準決勝となると見る客も多い、アピールになるだろう

「愛子、前にも話したがこの試合」

「わかってるって。負けるんでしょ？」

「ああ。銅の指輪が目的だからな。でも、ある程度の戦いは演出しないとな」

「だね だとすると……ボクは召喚獣の扱いに慣れてない感じにした方がいいかな？」

あれだけの高得点だからな。それしか無さそうだ

「じゃあそれで。マグレで一体ぐらい倒しても良いがな」
「りょーかい」

特設ステージ

『お待たせいたしました！これより準決勝第一試合を開始したいと思います！』

会場もだいぶ盛り上がっているようだな

『それでは選手の入場です！』

俺達、常夏の順に入場する

「よう、センパイ？ここまで勝ち上がったんだな」

「抜かせ！どうせお前はパートナーの力だろ？」

「否定はしないよ。事実、理系は全滅だしな」

「なんだ？いまから負けた時の言い訳づくりか？」

「『負けた時』？ちがう。俺達は『負け』に来たんだ。なあ、愛子？」

「そうだね。でも、ある程度は動かなきゃね」

『それでは始めてください』

「――試獣召喚！――」

Fクラス	影隠水月	& a m p ;	Aクラス	工藤愛子	V S
Aクラス	夏川俊平	& a m p ;	Aクラス	常村勇作	
保健体育	3 3 3 点	& a m p ;		4 7 4 点	V

S 427点 & a m p ; 350点

さすが最上級生のAクラス。主要科目以外もずいぶん高いな

「前より点数上がってるな愛子」

「もちろん！次は負けないよ！」

まだ康太に負けたこと根に持ってるのか

「先輩も中々じゃないですか。これじゃあ負けるかもなあ」

「棒読みしてんじゃないやねえ！」

愛子は斧を横薙ぎに振るう。運悪く（？）モヒカン頭が吹き飛ばす（頭だけ）

「あっ……………」

「避けるよモヒカン……………」

大変グロテスクな死に方になったな……………

「くっ、どうせマグレだろう！俺はそうはいかない！」

相棒が殺られてキレたようだ

とは言え、相手は俺達より二年近く経験に差がある（俺達が転校生なのもあるのだが）

「くっ！」

相手はオーソドックスな鎧と剣だが、扱いが上手い（明久ほどでは

ないが)

俺の召喚獣も首を斬られて戦死。これで一対一だ

『点数の高さで一人を撃破した工藤・影隠ペア！しかし夏川・常村ペアも一人撃破！これにより個人戦となってきました！』

斧を上から降り下ろす。しかし横に避けられ、反撃を受ける。慌てて後退した演技のところで追撃を受けて愛子も戦死

『工藤選手が奮闘するも、経験の差を見せつけて夏川・常村ペアの勝利！』

敗者はとつとと去ろうかな

「うつつ、また負けかあ……」

どうやら負けたのが嫌みたいだ。科目が保健体育だから特にか

「すまん愛子。こんなことさせて……」

「い、いや、ボクだって了承した訳だし、水月が悪いわけでは……」

「うーん……そうだ。この後俺が何か作ってやるよ。ウチのクラスで」

「いや、でも……」

「食べたくない、か？」

「そんなことない！あっ……」

「じゃ、決定な ちよつと先に行つててくれ。雄二たちのほうを覗いてくる」

「えっ、あ、うん……」

よし。行きますか

side 愛子

勢いにおされて返事しちゃったけど……

「そう言えば水月の普通の料理を食べるのは初めてだよね？」

いつもお弁当なら交換してるけど、こういうことは無かったし

「せっかくだし、精一杯楽しもうかな」

side 水月

「明久。今日という今日はお前をクロス」

「あはは。やだなあ雄二。目が怖いよ？」

俺がついた頃には戦闘は終了していたが、作戦の結果雄二お持ち帰り事件が発生するところだった

「まったく、作戦を考えると5、6個考えるものだけ？」

「それが出来たら苦労しない」

そりゃごもつとも

「……………雄二」

「ムツッリーニか。何かあったのか？」

教室前で康太が駆け寄ってきた

「……ウェイトレスが連れて行かれた」
「ええっ！？姫路さんたちが！？」

嫌な予感がする……

「愛子は居るか？」

「フルフル」……

首を横に振る康太。 やっぱりか…… おおかた鏡花あたりと話して
いたんだろう

「俺が誘ったから……」

「落ち込む暇があつたら助けに行くぞ」

雄二がそう言った。その通りじゃないか

[illegible]

「水月、某池袋最強みたいになってるよ?」

「残念ながら自販機は投げられないぜ？」

「当たり前だよ……」

まあそりゃそうだ

「……行き先はわかる」

康太がある機械を出す

「盗聴の受信機？」

「……………（コク）」

「ムツツリーニは何で持ってて、水月は何でわかるのさ……………」

「だが、それじゃあ不充分だな。鏡花も連れて行かれたんだろう？」

「……………（コク）」

「ならこれで大丈夫だ」

取り出すのは発信器の受信機である

「俺達は有事の際はこれを起動することになる」

いつもは仕事中とかなんだがな……………

GPSとリンクするタイプなので一発でわかる

「近くのカラオケボックスみたいだな……………よし。行くか！」

「うん！」

「……………こうして、姫を助け出すための冒険が、今始まる！」

「康太、そのナレーションはいらない」

「……………すまない」

第七問

「ここか……」

パーティールームの一つ、誘拐犯と愛子たちのいる部屋の前

『さてどうする？坂本と　吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

呼ばれる前に来てますが……

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしてたらしいからな』

『坂本つて、あの坂本か？』

『ああ。できれば事を構えたくないんだが……』

『気持ちにはわかるがそもいかないだろ？依頼はその二人を動けなくすることだから』

依頼ねえ……そういうことなら遠くに逃げれば、もし失敗しても俺達に戻る可能性は下がるのに

『お、お姉ちゃん……』

『アンタたち！いい加減葉月を放しなさいよ！』

島田シスターズの声だ。葉月ちゃんが捕まってるから抵抗出来ないのか

「……………ゴミ野郎共が」

『お姉ちゃん、だつてさ！かわいー！』

『ギャはははは！』

声からすると最低でも七人ぐらいか

明久が雄二に止められたようだ。康太がバイトの格好をしている

『……灰皿をお取り替え致します』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ やっちゃっていいの？』

『だったら俺はコツチの巨乳チャンがいいなー！』

『なら俺はこっちの活発そうな子もーらい！』

ピシッ

まずいな……我慢の限界が近い。だが今入ればさらに大変なことになるかねない……

『あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせて下さい！』

『だつてさ。どうする？』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

『やつ！さ、触らないで』

『ちよつと、やめなさいよ！』

『そうだよ！こんなことして恥ずかしくないの？』

『あーもう。うっせえ女だな！』

『強気のやつつて従わせてみたいよねえ』

『きゃあっ！』

突き飛ばす音に島田さんと愛子の悲鳴、何かの倒れる音に破れるような音……

ガシャン

俺の中で何かが切り替わった

「「おじゃましまーす！」」

同じくキレたであろう明久と一緒に入る

最初に目にはいったのは愛子だった……服の右肩の辺りが破れている

「死にくされやあつ！」

隣で明久が相手を蹴りあげた

「ここで問題です！貴様らはチケットを手に入れました！さて、そのチケットは次のうちどれでしょう？

？天国への片道切符

？地獄への片道切符

？地獄への無限往復切符

さあ、どれ！」

「んなもん知るかよ！」

右のハイキックがくる。だが遅い軸足を払い転ばせて踵落とし

「がつ……」

「不正解です。まったく……一つ聞く、彼女に手を出したのはどれだ？」

愛子を示しながら問う。男は指を指して一人を示す

「ありがとう。しばらく死んでろ」

鳩尾に蹴りをかまして気絶させる

「最終勧告だ！依頼主と依頼内容その他を言え！そうすれば俺個人としてはアレ以外なら加減してやろう」

愛子に手を出したというやつを指さすが、返答はない

「仕方ない……『貴様らは金縛りにあう』」

そう言った瞬間、チンピラ共の動きは止まった

「なあっ！？」

「どうなってんだ！？」

「『彼女から手を放す』」

葉月ちゃんを示してチンピラに冷たく言う。すると男は手を放した

「これで安全だから先に戻ってろ。あと、この上着使え」

自分の上着を愛子に渡す

「あ、ありがとう。でも、無茶しちゃ駄目だからね」

「おうよ！まだ料理作ってやってないしな。怪我はしない」
「うん。じゃあボクは先に戻ってるね！」

部屋から出ていく愛子たちを見送りつつ言う

「明久、気がすんだらあつちにつけ。康太や秀吉が多いに越したことはない」

「わかった。後は頼んだよ」

手をひらひらさせて送り出す

「次は『お前がこいつを殴る』」

指さしながら言うと、まるで操り人形のようにその通りに動く

「おい、水月。半分よこせ」

「雄二、何をいきなり……………ああ」

霧島さんのことで追い詰められ気味だったからストレスたまっていたのね

「わかったよ。相手は動いた方がいい？」

「当たり前だ。だからさつさと糸をどかせ」

おっと、気付かれてたか。まあ目を凝らせば見えるしな
つまり、俺は『指鋼糸』でチンピラ達を操っていたわけだ

「じゃあ、あの辺りを解放するぜ」

「くはははは！それにしても丁度良いストレス発散の相手が出来たな！生まれてきたことを後悔させてやるぜええっ！」

「では俺は死の恐怖を深く深く、どこまでも深く植え付けて差し上げよう」

その後犯人たちは生まれてきたことを後悔しつつも死ぬのは怖いという地獄を味わったとか……

Fクラス教室

「すまんな愛子、もうちょっと待ってくれ」

あの後、後始末で時間をとられてしまい、すぐに学園長がくるらしい

「ボクは別に明日でも構わないんだよ？でもまあ、待たせてもらうけど……それにしても、学園長と取引してたなんてね」

「はっはっはっ。誰にでも秘密の一つや二つ、あるものだ」

『あ、あのババア！僕らに何か隠してたのか！』

明久、確かにその通りだがもう少し言い方ってもんを考える

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに随分とご挨拶だねえ、ガキどもが」

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め！」

「わざわざご足労いただき、ありがとうございます学園長」

一応依頼人だし、目上だし、敬語は忘れない

「まったく、アンタらも水月を見習ったらどうだい？」

「そんなことは今はいい。話を聞かせろ」

「はあ……。アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね……」

「簡潔に言っと『白金の腕輪』は高得点だと暴走する」

「なるほど。俺達なら暴走しない、という訳か」

「暴走しないような点数の生徒なら他にも居るんだけどね……」

「勝てる見込みが無かった、と？」

「そうさね。だからアンタたちしかなかったのさ」

「雄二、これは褒められているんだよね？」

違うと思うぞ明久

「いや、『戦略だけのズルいバカ』だと言われているようなものだ」

「なんだとババア！」

「バカは否定出来んと思うがな」

その通りだな

「ところで水月、情報は集まったのかい？」

「勿論です。結論を言いますと、やはり竹原のようですね」

「そうかい。じゃあ引き続き証拠でも集めてもらおうじゃないか」

「了解しました。それでは四方八方囲み尽くしてさしあげましょう」

「おい水月、ということは常夏コンビも教頭が？」

「もちろん。ついでに言うなら三回戦後の明久の会ったチンピラも、

さっきのゴミどももそうだ」

「ねえ水月、一つ聞いていい？」

「なんだ明久改まって」

「これってかなりマズい話じゃない？」

「そうだなあ。下手すりゃこの学園終わるぜ？それに、次の相手は常夏だ。話し合いで解決は不可能だ」

考え込む明久。何か考えがあるのか？

「学園長、質問です」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って総合科目で平均点にいかねければ起こらないんですか？」

なんとなく明久の考えはわかってきた……

「そうさ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

「明久、どうせ苦戦ぐらいはするだろうから、白金の腕輪の披露ではあまり問題ないぞ？」

「そうかもしれないけど……一応、ね」

「そうかい……愛子、すまんがさっきの約束明日でいいか？」

「ボクはいつでも構わないよ？吉井君たちを手伝ってあげて」

「ありがとう」

その後、二人に勉強を教えて時を過ごした

第八問

「ただいまー」

学園祭二日目の朝、俺は教室に到着した

「水月くん、どうしてただいまなんですか？」

あ、姫路さんも島田さんも来てたのか

「ああ、それはだな。朝早くにここでテストを受けた後に愛子を迎えに行つてたんだよ」

「そ、そうなんですか？」

「スゴいよね水月。徹夜明けなのにいつもとまったく変わらないなんて」

「ま、一日なら何の問題も無い。依頼の場合、下手すれば四、五日徹夜もあるしな」

仕事以外だとあまり徹夜はしないがな

「じゃあ水月、後は頼むぞ。俺達は寝るからな」

「おう。二人の分も働いてやるよ」

その後、明久が島田さんと少し話してから屋上に向かったようだ

「水月、本当は11時に起こしてって言われたんだけど、少し遅らせても良い？」

「？なぜ俺に聞く？」

「だってアンタ、二人の分まで働くって」

ああ、そっか。俺に負担がかかるのを考えてか

「別に問題無いぜ。何なら直前まで寝かせておいてもいい。あ、でもそれだと頭が冴えないか」

「じゃあ三十分くらい前に起こすから、それまで頑張ってるよーかい。では、準備を始めるとしようか」

数時間後

「すまん、もうそろそろ三位決定戦だから抜けていいか？」

「今アキたちを起こしに行ってもらってるから大丈夫よ」

「頑張つて下さいね水月くん」

「おう。頑張つて魅せてやるぜ」

まずはAクラスだな

Aクラス内

「相変わらず客多そうだな」

本格的だったしなあ。無理もない

「お待たせ！じゃあ行こつか」

「ああ。相手は俺達の試合は見えないんだろ？」

「うん。代表に『お互いに当たるか負けるまで、相手の試合は見ないようにしよう』って言うておいたし」

「そうか。なら行くか」

少し前の試合でやった実験を見られると計画が狂ってたからな

特設ステージ

『それでは、三位決定戦を開始したいとおもいます。まず、選手の入場です』

俺達の反対側には霧島さんと木下さんが立っている

「さて、悪いが勝たせてもらうぜ」

「……負けない」

「雄二とデートがしたいなら優勝する明久に言えばなんとかなるぜ？」

「……それは最後」

あくまで自分で用意したいということが

『それでは始めてください』

「」「」「試獣召喚！」「」「」

幾何学的な模様の陣から四人の召喚獣が出現する

「先手必勝！」

腕輪で水の鞭を作って攻撃する。しばらくは避けられたが何とか二人の腕に巻き付けた

「愛子！やっちまえ！」

水の鞭の持ち手を愛子に放る

「りょーかい ゴメンね代表、優子」

愛子は持ち手を斧で受ける…………腕輪の発動した斧で

バチイイ！

鞭を通り、二人の元に電撃が走る

「なっ！？」

「…………くっ」

さすがに一撃じゃあ無理か…………だが結構なダメージは与えた

『これは凄い！召喚獣同士の能力でのコンビネーションがきまりましたっ！』

「まだまだあ！」

点数の大部分を消費して大きな龍をつくる

『龍です！水で出来た龍が現れました！』

「何よ！それくらい…………」

迫る龍を睨む木下さん。何かするつもりなのかもしれんが甘いな

「見た目は龍でも水なんだぜ？形を変えるなんて簡単だ」

そういつて龍を崩す。ただの大津波になった水に木下さんが戸惑いのまれる

「えいつ！」

再び轟く電撃の音。ついに木下さんが戦死した

『な、なんと工藤・影隠ペア、反撃さえ許さず一人を撃破っ！』

「さて、あとは代表だけだね」

「いや、もう勝った」

水のレールを高速移動して斬りつけた

「……私たちの負け？」

「すまん。手早く終わしちゃって」

「……構わない。これも勝負の結果」

『な、なんと圧倒的な勝利！三位決定戦は工藤・影隠ペアの勝利です！』

さて、これで俺達の大会は終わりだ

「じゃ、俺は店に戻らせてもらっぜ。決勝組や応援組で人数足りないんでな」

「あははっ、大変そうだね。じゃ、頑張ってね！」

「おう！」

（side 愛子）

行っちゃった……学園祭、一緒にまわりたかったな

「愛子、後夜祭の事だけど、参加する？」

優子がそんなことを聞いてきた。そうだ…後夜祭でも水月とは別に
なっちゃうんだ……

「その様子じゃ不参加ね。Fクラスにでも混ぜてもらえば？」

「そう……だね。うん。ありがとう優子！」

じゃあ鏡花に聞いてみよう。もちろん水月には内緒で

第九問

「いらっしゃいませ！」

先程の三位決定戦以降、客が増えてきている。さっき出ていった明久達が勝てばより一層増えることだろう

「ちよつと手が離せんな……仕方ない。アイツに依頼するか」

ちよつと裏方に行つて電話をかける

「おう、ちよつと請け負ってもらいたいことがあるんだが、今大丈夫か？」

「かまわない。何だ」

「教頭を追い詰める事、もしくはウチの中華喫茶の手伝いのどちらかだ」

「資料は？」

「全て入手済。鏡花のおかげだな……あと、手段は任せる」

「そうか。報酬は？」

「如月ハイランドのプレオープンプレミアムチケット」

明久達と交渉して一枚確保させてもらったものだ

「わかった。前者で請け負わせてもらおう」

ま、あの二人なら『幸せになる』為の強行手段も大丈夫だろう

「じゃ、頼んだぜ。失敗するなよ？」

『無論だ』ブツッ

あ、切れたか

「さてと、資料を届けなければ……」

鞆以外に持ってきておいた袋からあるものを出す

「コマンド 配達。ターゲット 水明山紫」

『了解。行動を開始します』

明らかな人工音声を話したのはカラスの様なものだ

「やっと完成して、動作確認その他も終わって初実戦がこれとはな」

見た目はカラスだが、音声入力で動く偵察用のロボットだ。ちなみに電源は太陽光だ

「やっとこつちに専念出来るな」

アイツなら上手くやるはずだ

side 紫

「やれやれだ」

「どうしたの？ 依頼？」

隣に居る詠々が聞いてくる

「そうだ。水月からのな」

「そうなんだ……」

「どうした詠々？」

迷っているような雰囲気だな

「えっと、あの………についていっちゃダメ？」

そう言うことが……

「何が起るかわからないぞ？」

頷く

「怪我じゃあ済まんかもしれんぞ？」

また、頷く

「………本当に、いいんだな？」

静かに、だが力強く頷く

「………わかった。一緒に行こう」

「やったあ」

「今回はそれほど危険でもなさそうだしな」

「えっ？じゃあさっきの質問は？」

「脅し、みたいなものだ。あれで駄目なら来ない方がいい」

ホッと胸を撫で下ろす詠々。一つ釘でも刺しておくか

「だからといって油断は禁物だからな。気を引き締めろよ」
「わかりましたあ！」

……………テンションがおかしくなっていないか？

「はあ、少し落ち着け」

十分後

「ごめんなさい紫くん」

「気にするな。もうそろそろ資料を持ってくるだろう」

「資料？」

「なんでも、教頭が何か企んでいるらしい」

「教頭先生が？」

「ああ。つとあれか？」

カラスが紙束を持って飛んでくる

「これは水月の作か。相変わらずふざけた技術だ」

触つてみると中が固くなっている。しかし外側は柔らかく、あまり熱くもなっていない

「こんなの作れるんだねえ水月君って」

「の、わりには理系が駄目なんだがな」

工学は理系の分野だろうが……

「ふむふむ……………アイツもふざけた依頼を回してきたもんだな」
「何で？」

「この依頼の失敗は学園の崩壊に繋がる。社会的な意味の崩壊だ」
「えっ？ええええええええええ！？」

驚きすぎだ……………物理的崩壊でないだけマシな方だぞ

「という訳だ。早く行くぞ」
「ま、待ってよ」

あたふたしながら追ってくる詠々を見て、こんな状況にもかかわらず笑ってしまった

教頭室

「と、言うわけで貴方のやったことは全て挙がっています。おとなしく降参して頂きたい」

水月のまとめた資料を淡々と読み上げてから言った

「それを私がやったという証拠はあるのかな？」

「会談、この場合は裏取引と言うべきか……………の写真があります。詠々」

「はい。こちらになります」

詠々がコピーを教頭に渡す

「なっ！？……………これでは内容まではわからないだろう？」

バレバレなのにまだ足掻くか……………愚かな

「なら動画をお見せしましょうか？それとも、証言者を呼びましょうか？」

「そちらの用意した証拠では情報が操作された可能性がある。私は認めない」

往生際の悪い奴だ

「諦めろ。お前の協力者も全員手を引いたぞ」

「そ、そんな馬鹿な！確実に利益のある取引だ！降りる筈が無い！」「前提が崩れていてもか？」

「は？」

「要するに、欠陥は直ってました。ってことですよ教頭先生？」

「どうやら技術のある支援者を雇ったようだな。意味が無ければ皆降りる」

これは半分嘘らしい。なぜなら、平均点より少し高い…Cクラス程度までなら大丈夫

夫だが、A、Bクラスだとやはり暴走するらしい

「くっ………こいつらを捕まえる！」

教頭の声と同時に飛び出す幾人かの影。どうやら用心棒らしい

「詠々、教頭を頼む。やつは武道に疎い筈だ。いざとなったらフオーする」

「わかった。お願いね」

のんきなものだ。敵は……七人か

「用心棒というより、寄せ集めだな」

よく見るとチンピラばかりで、殺気も無いに等しい

一人目が正面から来た。もちろん突きを避けて壁まで蹴り飛ばす

二、四人目は鉄パイプというオーソドックスなチンピラ装備だった。

一本もぎ取り、薙ぎ払う

五、六人目はナイフで斬りかかってきたがパイプで刃を折り、叩き伏せる

そのとき七人目が……

「銃、か」

リボルバータイプの拳銃をこちらに向けてきた

「仕方がないな」

制服の内ポケットから大振りなナイフを取り出す

「銃にナイフで対抗するつもりかあ？ バカにしゃがって！」

バンッ

カキンッ

「は？」

「どうした？ もう終わりか？」

「ふざけんな！」

バンッ

カキンッ

バンッ

カキンッ

バンッバンッ

カキンッカキンッ

バンッ

カキンッ

「終わりだな」

「な、何で防げるんだよ!？」

「答える筋合いは無い」

一撃で倒れるチンピラ

「こっちも終わったよ」

言われてそちらを見ると詠々とミノムシ（教頭）が目にはいる

「さて、これで依頼終了だな」

「じゃあまた一緒に回る？」

「ああ。詠々が活躍したから、何か奢ってやるっ」

「やったあ!じゃあ綿あめがいいな」

その後、学園長に連絡をしてから学園祭へと戻った

第十問

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「……………（コクコク）」

「大丈夫？ 秀吉君……」

「何だもうへばったのか？ 俺はあと二日はいけるぜ」

「単位がおかしい……」

ふむ、確かに少しは疲れたが……………

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

「ん？ お義父さんが気になるのか？」

「なっ！？ べ、べつにそういうわけじゃなくて！」

「明久お前、雄二の言葉が『義理の父』だと思っぐらいには気になつてるんだな」

「そ、それは……………」

「後夜祭の後で話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じやな」

「きつと、大丈夫……」

まあ、Fクラス二人組が優勝し、契約を果たしたし、喫茶店も成功と言える。これなら何とかなるだろう

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

あ、俺もだ

「ええっ！？どうして!？」

「どうして、って言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょ？」

「すみません。すぐ戻りますので」

「私も……」

鏡花も顔を赤くしている。忙しい時は気にならなかったんだろう

「なんじゃ似合っておるのに……」

女物のチャイナ服をばっちり着こなしている状態の秀吉に言われても……ねえ？

「そ、そうかな……？」

「そう言う秀吉は着替えてこないのか？」

「おお、そうじゃった。では」

「させるかっ！せめて二人だけは着替えさせない！」

「なっ！？何をするのじゃ明久！」

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

俺も行かなくては……まあ俺は男物だし、そこまで気にしないが

「学園長室じゃと？二人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「俺もだ。鏡花は……まあ、好きな様にすればいい」

「じゃあ……行く」

「ならワシもついて行って構わんかの？」

「大丈夫だろ。多分」

その後、康太も加わり大人数で学園長室へと向かった

学園長室

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

明久達がノックをして、間髪いれずに扉を開く

「失礼します」

「水月以外に敬意を感じられんのじゃが……」

「そうだね……」

秀吉、アイツらには常識は一部通用しないから無駄だ

「依頼完了の報告に来ました」

「竹原の事は聞いたよ。優勝の方は……ね」

賞品その他を授与したのが学園長だからな

「依頼？何のことじゃ？」

「ああ、『白金の腕輪』に欠陥があつてな。少しは改善させたが完全じゃない」

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二がこれをゲットするっていう取引を学園長と」

「待て明久！その話はマズい！」

何を……くつ、油断した！

「……………盗聴の気配」

「やられたか！」

くそっ！気配からすると常夏だ。アイツらにも教頭の事は伝達したはず……

「あのバカ共！ヤケおこしやがったか！」

「どういうこと？」

「盗聴されていたんだ。録音された可能性もある」

「失礼します。雄二、明久、先に行く」

全力で廊下を駆ける

（side 明久）

「水月待つ……って早ー！」

「鏡花、奴らの行きそうな場所は分かるか？」

「すぐに事を起こすとは考えづらい。とすると……教室ぐらいしか……」

ピリリリッ

「あ、僕の携帯だ」

携帯を耳に当てる

『すまん！逃がした！』

「えっ、逃がした？今どこ？」

『昇降口付近だ。外に出たのかも分からん』
「ついでに聞くけど、何で逃げられたの？」
『看板の撤収作業にぶち当たった』
「そっか。じゃあ僕達も探すよ」
『頼む』

電話をきってポケットにしまう

「逃げられたみたい」
「そうか。じゃあ二つに分けるか」

横を見ると鏡花が秀吉とムツツリー二に常夏コンビの写真を見せてる

「では、ワシとムツツリー二は外を探そう。鏡花はここで情報を集めて指示をしてほしいのじゃ」
「わかった……」

前髪をあげる鏡花。今はさほど外見に変わりはない

「……………明久」
「ん？ 双眼鏡？」
「……………予備」

普通なら必要ないのでは？

「目標を見つけたら携帯に連絡を入れてくれ！」
「うむ！」

さて、じゃあ僕達は屋内だから……

「明久！まずはこの階の放送室を押さえるぞ！それから三年の教室だ！」

「side水月」

「どこ行つた？」

考えられる場所は大体探した。とすると、今はどこかに隠れている可能性があるな

「飲食店なら厨房、その他の店でも休憩スペースぐらいあるだろうし……」

そこまでは調べられない

「なら待ち伏せするか。放送なら……放送室か」

どっか他にあつたかな……あ

「屋上、か」

あそこなら放送機材があるのは今だけで、盲点になりやすい

「屋上なら下でも見てれば屋外を探せるしな」

そうと決まれば即移動だ

屋上

「秀吉と康太が屋外、明久と雄二が屋内って感じかな？」

「いまだ常夏は来ていない」

「ん？明久達が出ていった？」

「ということは屋内には見当たらなかったのか？」

ギィィ

「（来た来た）」

テープを出したらその場で壊す
そう考えて待っていると……

ヒューーン バアアアン

「（は、花火？）」

元を辿ると明久と雄二、それに召喚獣が……

「やれやれ、爆破は良いがテープが生きてたらどうするつもりなんだか……ねえ、先輩？」

「「は？」」

明久達からは気付かれない位置に立っているので砲撃は止まない

「さあ、大人しくテープを出して頂けませんか？」

「アイツら、仲間がいるのに止めないぞ!？」

「くっ、そこをどけ!」

「嫌です」

こっちに飛んできたな…………

「ほいっ」と

すべてを避けながら問う

「テープを渡すなら砲撃を止めさせましょう。どうしますか？」

先の砲撃で機材は全滅。もうここでの放送は無理の筈だ

「教頭も捕まっています。この行為は無意味です」

「……………わかった」

案外素直に渡したな

「念のため、ボディチェックをさせてもらいます」

ビクッともいうように反応した。やはりダミーか

と、その時、何を間違えたか教頭室に火花が直撃。明久達は鉄人に追いかけられている

「申し訳ありませんが、時間切れです。学園長につき出します」

抵抗しだした常夏を縛り上げる

その後、携帯を取り出す

「あ、もしもし学園長でしょうか？」

携帯を肩にはさんで通話しながら屋上からロープを垂らし、片方は柵に結ぶ

『なんだい？』

「盗聴してた馬鹿を捕まえたので人を寄越して下さい」

『あんたはどうするんだい？』

「明久達が鉄人に追われてまして……話を付けてもらえませんか？」

『いいだろう。じゃあこのまま電話を渡しな』

「了解しました。少々お待ち下さい」

柵を越え、一気に降下……着地

「さてと……鉄人先生ー！」

「西村先生だ馬鹿者」

「あなたにお電話です」

携帯を渡す

「？ただいま代わりました……学園長！？……いや、しかし……はい……はい分かりました」

携帯を返してくる鉄人

「貴様ら二人は厳重注意で済ませ、だそうだ」

「ありがとう水月！」

明久、よくは知らんが鉄人の注意だぞ？生易しいものではないだろう……

「じゃ、俺は教室の片付けに戻るぜ。つと、秀吉達にも伝えなきゃな」

電話をしながら遠ざかる。後ろで個性的すぎる悲鳴が聞こえたが気にしない事にした

エピソード（前書き）

今回はこれにてラストです！

次の更新はいつになるのやら……

あまり早期の更新を期待せず、
気長に待っていていただけると幸いです

エピソード

「後夜祭が公園って……怒られたりしないだろうな？」

聞いた話によると、上位クラスほど後夜祭も豪華な傾向があるらしい

「結局、まだ愛子に料理作ってやってないんだよな……」

「ボクは構わないよ？」

「そうか。そりゃよかった……は？」

気のせいかな愛子の声が聞こえた気がした

「えいつ」

後ろから抱きつかれました

「あ、愛子！？何でここに！？」

背中に柔らかい感触が……ってマズい！落ち着け俺、落ち着け俺、
落ち着け俺

「Aクラスの後夜祭って豪華すぎて、何か近寄りがたい感じだった
からね」

「そ、そうなのか……」

「ん？水月、顔赤いよ？」

「そ、そうか？」

「実技してみたくなくなっちゃったかな？」

それは笑いながら聞くことでは無い！

「何でもそこに繋げるのはやめろ！」

「むきになるのが怪しいね」

「なっ!？」

「あはははは、嘘だよ」

そう言っただけから離れる愛子

ホッと一息つく。心臓に悪いやりとりだな

「そうだ。ボク、お礼を言っただけだね」

お礼？何のことだろう？

「あの時助けに来てくれてありがと、水月」

「ああ……でも、あれは俺が巻き込んだ訳で……」

「それでも、だよ。助けに来てくれたことが嬉しかったんだから」

「そう言ってもらえると助かるが……」

「はい、お礼」

愛子の言葉を聞き、振り向いたところで頬に当たる柔らかな感触

「あい……こ？」

「あはは、いきなりは刺激が強すぎたかな？」

やられたのはもちろんキスである

「あ、ああ……」

「……えっと、大丈夫？」

「多分……喉渴いたからジュース取ってくる」

この場にいるとどうにかなってしまいそうだ
ジューズのある位置まで来て一つ取る。周りを見ると……明久が姫
路さんに抱きつかれてる

「つと、島田さん」

「ん？何よ、水月」

無言で指をさす

次の瞬間には指をさした方に移動する島田さん。このクラスのやつ
らは変なところでスペックが高過ぎる気がするぞ

『……ウチが少し目を離したら、その隙に一体何をして……！』

『え！？み、美波！違うんだ！これは別に何も……！』

「……何か、いつも以上に手加減がないな」

歩きながらジューズを一気に飲む

「おつ、あつちには鏡花と秀吉が……ん？」

明らかに幼児化している……まさかつ！

「酒、か……」

頭が回らなくなってきた……

（side 愛子）

「遅いなあ、水月」

もうそろそろ戻ってもおかしくない

「おっ返しだあ」

「わひゃっ!？」

えっ、今ボク水月に抱きつかれてる？

「す、水月？」

「わははは!どうだあ!」

背中に当たる水月の体がやけに熱い。それに何やら酒の様な匂いもする

「水月、酔ってる？」

「わははははははは………」

あれ?止まった?

「……寂しいよなあ」

「えっ？」

何が寂しいんだろう？

「みんないつかは離れていくんだよなあ………」

「……………」

「いつまでも一緒に居てくれる人なんて、いないのかな………」

水月がこんなことを考えてたなんて………なにか辛いことでもあったんだろうか

「Z Z Z……」

「ボクでよければいつまでも一緒にいてあげるよ……」

肩に顎をのせて眠る水月に言う。いつか面と向かって言えることを
考えながら……

数分後

「で、どうしよう、この状況……」

その後、秀吉と雄二に助けられるまではこのままだったとさ

第一問（前書き）

久々の更新！あと、ちょっととした修正やら章を分割してみました
今回はプール編の最後まで投稿するつもりです（まあ、次の更新は
また先になりそうですが…）

第一問

「週末、プールに入りたくないか？」

「……は？ ということだ？」

何を言い出すんだ？ 雄二のやつ

「なに、鉄人から週末にプールを使うのを許可されたからな」

「鉄人の出した条件は？」

「プールの掃除だ」

「プールにくるなら手伝え、ということか？」

「話が早くて助かる。どうだ？」

確かに最近は暑いから気持ち良さそうではあるが……

「愛子も誘っていいか？」

「ああ。女子は掃除も免除するつもりだ」

そうか。なら安心だ

「じゃあ、行かせてもらおう。……っと、当日は白金の腕輪を持って来てくれ」

「なぜだ？」

「銅の指輪と召喚獣の腕輪を使う為だ」

銅の指輪を使えば腕輪の効果も実体化出来るから早く終わるだろう

「……なるほど、そう言うことか。いいだろう持って行く」

……あとは姫路と島田ぐらいだな」

眩きを残して去っていく雄二。霧島さんは誘ったんだろうか……

昼休み（Aクラス教室）

「って訳なんだが、愛子はどっだ？」

恒例の弁当交換のときにきりだしてみただ

「えーと……その日って部活なかったっけかなあ？」

鞆に予定表でもあるのか、中を探っている

「あつた。えーと……部活は無いみたいだね」

そうでなくては入れないだろうからな

「じゃあ、ご一緒させて貰おうかな（水着どうしよう……）」
「オッケー。じゃ、伝えとく」

その後はいつも通り他愛ない話をして昼休みが終わった

週末

どうやらもう皆集まっているようだな

「俺達が最後か……悪いな」

「あ、水月。遅かったね」

最後ではあったが、遅刻はしてないぞ？

「おっし、全員揃ったな。女子は翔子についていってくれ。鍵を渡してある」

雄二についていく俺、明久、康太、秀吉、葉月ちゃん

……葉月ちゃん来てたんだ

「こらこら。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ。霧島さんについていかないとダメだよ」

明久の脳内ではいまだに秀吉が女扱いのようだ……
鏡花と付き合いだしてから、大分男として扱われる様になったんだがな

「えへへ。冗談ですっ」

「最近はマシになったと思っていたのじゃが……」

明久、康太の二人には永遠に理解されないだろう

「ここは仕方ない。秀吉はプールの便所でも使って着替える」

「む、仕方ないのう……今だけじゃぞ」

各々着替えに行くなかで愛子が振り返って言った

「覗くなら、バレないようにね」

ブシャアアアア

あ、康太が鼻血を噴き出して倒れた…………と、思ったらクーラーボックスから輸血用の血液パック（？）を取り出した

「あれ全部輸血用なのか…………」

「最初から予防を諦めてるのが男らしいよね」

「そうか？　っと、お前は行かないのか？」

「ピンポイントに2つも殺気が飛んでくるからね」

だろうな。向こうで雄二も冷や汗かいてるし

姫路さんも大分影響受けてるな

「そういう水月には行かないの？」

「ああ。相手の嫌がるようなことはしない」

「（僕はすいぶん弄られてるような…………）でも、工藤さんはああ言うってたんだし」

「もし冗談じゃなかったとして、あっちにいるのは愛子だけじゃないだろう？」

「じゃあ冗談じゃなかったとして、工藤さん一人だったら覗くの？」

「…………まあ、俺も男だしな」

「（うわーあんまり想像出来ない）そっか。じゃあ僕達も着替えようか」

二十分後

「ようやく女子のおでましか」

プールサイドには秀吉を除く男子全員が集まっている

そんななか、一番に現れたのは島田シスターズだった

「おっ、似合ってるじゃないか」

葉月ちゃんは典型的な小学生スタイルで島田さんはスポーツタイプのようだ

「ビーチバレーの選手みたい。とても言うべきか……島田さんはどちらかって言うとスレンダーだからそんな感じのが似合っんだろうな。なあ明久」

明久が地雷を踏まないようにパスをだしてやる

「あ、ありがとう。……どうかなアキ？」

「そうだね。手も足も胸もバストもほっそりとしていて、凄く綺麗だと脚の親指が踏み抜かれたように痛いっ！」

バカが。俺のパスを華麗にスルーしやがって。島田さんがご立腹だぞ

「やつほー。お待たせ！」

「おっ、愛子……ってそれ、部活用か？」

まるで水泳選手の着ているような、いわゆる競泳用の水着だった

「実は去年までの水着を捨てちゃってたのを今朝思い出してね。ホントならもっと普通のやつが良かったんだけど……」

「いいんじゃないか？ 凄く似合ってると思うぞ」

「ありがと（でもやっぱり普通の水着も水月に見て欲しかったな……」

……」

何か物足りなさそうだな

「まあ、この面子なら夏休みにも一回くらいはプールかどこか行く
だろ。そんなときまでに用意しとけばいいんじゃないか？」

「それもそうだね。そういう時は誘ってね」

「おう。……いつの間にか全員揃ってるみたいだな」

秀吉はなぜか女物の水着だが……おそらく店員に女子と間違われた
んだろう。可哀想に……

第二問

『お？なんだ？ いきなり足が……おわあっ！？ だ、誰だ！？
誰が俺を水中に（ガボガボガボ）』

『……雄二。早く溺れて』

『ぶはあっ！ しよ、翔子！？ 何をトチ狂って……！ （ガボガボガボ）』

……あっちは何をやってるんだ？

「楽しそうだな雄二のやつ。なあ愛、こおお！？」

俺もか？ 俺もなのか！？

「……………ぶはあっ！ 愛子！ 何を……………って逃げてるし！」

泳ぎ去る愛子を捉える。よし、まだ十分追いつける距離だ

「待あてえええ！」

「きゃっ！」

足を掴んで軽く沈めてやった

「どうだ愛子！ きつちりお返ししてやったぜ！」

『ほら葉月ちゃん、あれくらいがちょうどいいんだよ。さすがに溺れさせたら駄目だからね』

『はいですっ！ 今度からそうします』

明久の差し金か……上等じゃないか。後悔させてやる

「明久」

「な、何？ 水月。工藤さんと仲良く遊んでたんじゃないの？」

「少し殺ることが出来てな」

「誤変換……だよね？」

「いや。あつてるぞ」

「あはははは……さらばっ」

必死に逃走（逃泳？）する明久。しかし、やはりさっきの愛子ほどじゃない

「沈めええっ！」

「ちよっ、待つ（ガボガボガボ）」

結果は、少しやりすぎて明久が気絶してしまったが上々だった

「何だ、水月じゃないか」

プールの周りを囲うフェンスの外側から声がかかる。この声は

「紫、と四季さんか。何でここに？」

「生徒会の仕事だ。学力強化合宿の為の打ち合わせがあつたからな」

「生徒会？ 紫って生徒会に入ってるのか？」

「一応副会長だ」

「私は会計です」

そうだったのか……

「ところで、水月こそなぜここに？」

「ああ、実は」

「なるほど。さすがFクラスと言ったところか」

「まあな。二人もどうだ？って、水着持ってるはずないか……」

「持ってますよー」

……………なぜ？

「本当は紫君とプールでも行こうって話だったんだけど、こっちのほうが好きそう」

「いいのか、紫？」

肩を竦める紫。おそらくは『詠々が良いなら』とか考えているんだろう。熱々ですねえ

「じゃ、適当に着替えて入ってくればいいよ」

「りょーかいしました。行こ？」

「ああ」

更衣室入口のある方に歩いていく二人を水に浸かりながら見送った

第三問

「で、何なんだこの状況？」

お、紫か。早かったな

「何か賭けをしているようだぜ。（どうせ明久関連だろうなあ）」
「よほど重要な事のようにだな」

そう考えてもおかしくない。なぜなら迫力が凄まじいからだ

「お待たせー。……何、あれ？」

「女どうしの熱い戦いらしいぜ」

「そうなんだ。…あ、今サーブが垂直に落ちたよ!？」

島田さんのペアの……清水さんだったかが打ったらしい。

『お姉さまごめんなさい！ 美春は嘘をついていました!』

『いいのよ美春！ これからも友達でいましょうね!』

そんな会話と共にヒシと抱き合う二人。が、なにやら片方だけ異様に黒い笑みを浮かべている

『うつふつふ。これぞまさしく千載一遇のチャンスですわ。こうして近づけばお姉さまの胸の谷間へと思う存分……うつふつふ。うつふつふつふつふつふ!』

『ちよつと美春！ 離しなさい!』

「」「……………」

向こうで二人ほど鼻血を噴き出して倒れた。アイツら耐性低すぎないか？

その後、ボールが弾けとぶというアクシデントに見舞われ、勝負はお流れとなった

「だいぶ遊んだせいかな、小腹が空いたな」

「あ、それならボクマフィンを作ってきたんだ。何人来るか分からなかったから12個なんだけど……」

12個：一ダースか、当初の人数だと足りていた訳だ。まあ、ここまで増えるとは俺も思わなかった

「あ、あの、私も作って来たんですけど……」

「そうなんだ。じゃあ皆にあたりそうだね」

「失敗しちゃって、二つだけですけど」

「お、ならジャストじゃないか」

『第一回っ！』（雄二の声）

『最速王者決定戦っ！』（明久の声）

『ガチンコ、スピード対決　っ！！』（二人の声）

『イエーツ！』（康太、秀吉の合いの手）

みんな必死過ぎないか？……俺は未だに食った事がないから分からないのだが

「（つてか、俺らが奪い合う意味あるのか？）」

「（何を言ってるんだ水月！ あんなものを女子に食べさせる訳にはいかないよ！）」

「ルールは簡単だ。このプールを往復して戻ってきた順に1位2位

…という単純な勝負だ」

雄二によるルール説明。しかしなんとも穴だらけなルールである

「（まさかとは思うが、妨害するつもりか？）」

「（さすがにバレたか。なら殺るしかないな、明久と共に）」

それは『明久も殺る』なのか『明久と協力して俺を殺る』なのか、
教えて欲しいところだ

「1位から順にどちらが食べたいか選ぶ。それで異存は無いな？」

「「おう！」「」

「……ま、いつか」

（side 紫）

「どういうこと……？」

「多分、姫路さんと工藤さんの作ってきたお菓子のどっちになるかを決めるんじゃないかな？」

鏡花と詠々の会話を何とはなしに聞く。……俺には生命いのちの危機に直面し、生き残りをかけた戦いの幕開けにしか見えない

「紫くんは参加しないの？」

「あのテンションにはついていけない」

「そうかも……（実は面白がつてるでしょ？）」

「（まあな。Fクラスの連中は見てて飽きないしな）」

鏡花は俺が『実は面白い事好き』だと知っている。まあ、幼馴染み

だから無理もない

「じゃあ誰が1位だと思う?」

「水月」だろうな」

詠々の質問に、二人の返答が揃う

「あのルールだと穴が多すぎる。アイツならその穴を見つける」

「で、どうなるの?」

「……そこは見てのお楽しみ、だな」

side 明久

「それじゃ、ボクが判定してあげるよ」

「タッチの差でもきちん頼むぞ」

「どういうこと?」

「（水月を特別扱いするな、と言うことだ）」

「（なっ!? べ、別にそんなつもりは……）」

雄二が工藤さんをからかっているようだ。わが親友ながら何て性格の悪いやつだ

「位置について よーい、スタート!」

「くたばれええっ!」

やはり雄二も同じ事を考えていたようだ。蹴りの向かう先は……僕らに挟まれた位置の水月だ

「甘いな。雄二、明久」

そう言った水月の居場所は　水面上！？

「ルールに穴を作りすぎたな！　あのルールならこれもアリだろ！」
言いながら折り返す水月は、水面を走っていた

「そんなデタラメ人間の存在を誰が考慮するってんだ！」
「仕方ない。ゴールだけは妨害してやる！」

雄二と共に飛び込む。もちろん水月のいるコースだ

「俺なんかに構っていいのか？　康太も秀吉ももう折り返しだぞ」
「くそつ！　明久は秀吉を！　俺はムツツリー二を止める！」
「わかった！」

）side水月）

「まったく、往生際の悪いやつらだ。一度止めても自分がゴールで
きなきや意味無いだろうに」

1位でゴールしたのち、プールを見ながら呟いた。捕まえて脱落で
もさせる気か？

「水月、あれってありなの？」
「あれ、つてのは今あそこで起こっている事か？」
「違う違う。ボクが聞きたいのは水月のやったこと」
「ああ……ま、いいんじゃないか？」
「簡単だねえ。ところで、水月はどっちを選ぶの？」
「うーん……やっぱり愛子の、かな。愛子の作った菓子って食った

こと無いし」

姫路さんの手前、即答も問題かと思ひ少し悩んだフリをする

「あ、何か大変な事になつてゐる！」

言われてプールを見る

水着の上が無い秀吉、鼻血を噴き出す康太。そして、瞬く間に広が
りゆく血、血、血、血。

脳裏に浮かび上がる記憶

それは普通の登校風景……のはずが一瞬で真っ赤に染まる。そして
俺は

「『うわあああああ！』」

絶叫した

（side 愛子）

プールを見たまま水月が硬直してしまった。

「どうしたの？ 水げ「うわあああああ！」す、水月！？ 大丈
夫！？」

皆が注目するなか（ムツツリー二君は救出済み）、水月の前に行き、
肩を揺さぶる

よく見ると目が虚ろで、おそらく何も見てはいない

「あ、ああ……」

「愛子、離れて！ 紫は水月押さえて！」

鏡花の声に咄嗟に後ろに下がる。と、ほぼ同時に水月が暴れだした

「世話のかかるやつだ、な！」

水明山君が水月の首を叩くと糸が切れたように倒れた

「……」

皆、無言で水月を担ぐ水明山君を見ていた

「……鏡花、説明、してもらってもいいか？」

「……雄二」

坂本君が鏡花に質問して、代表が止めようとしている。でも、本当は知りたいのだろう。あまり力が入っていない

「……中学校の頃に、トラウマができちゃって……」

「血にトラウマができたのか？」

「ある程度なら大丈夫。でも、大量になると……」

「そうか……とりあえず、ムツツリー二は救急車だとして、水月はどうする？」

「今まで通りなら大丈夫……」

「そうか。じゃあ島田と姫路は救急車を待っていてくれ。紫は水月を保健室に。俺達は……仕方ない、鉄人に報告だ」

「……愛子も保健室に。顔色が悪い」

代表たちが支持を的確に出す。ボクは反論できずに詠々ちゃんに連れられて保健室に向かう

第三問（後書き）

ふざけすぎた感じがする水泳対決：（もはや泳いでないし）
ちなみに水月は鋼糸で足場を作ってその上を走ったという設定です

第四問（前書き）

本日の更新はこれにて終了です

次回はいつかな？ 夏休み中に一回ぐらいは更新すると思います
が…

まあ、次回のことはさておきプール完結編どうぞ！

第四問

「……ここは？」

見た記憶の無い天井。まわりにかかったカーテン
……カーテンとベッドってことは保健室か？

「あ、水月。起きた？」

「愛子か。俺はどうしてここに？」

愛子がカーテンを通り、ベッドの横のパイプ椅子に座る

「プールが血で赤くなって、それを見て暴れだしたんだけど、水明
山君が気絶させてここまで運んだの」

思い出した……あの時の事を思い出して、暴れだしたのか

「面倒かけて悪かったな。 皆は？」

「みんな帰ったよ。怪我人もいないし、プール掃除もあれだと本格的にやらないと駄目だったことで業者に頼むらしいよ」

「そっか……」

「……」

「……」

「……ねえ水月、聞いてもいい？」

「……」

「何が、あつたのか」

「……俺が中学一年の時の話だ」

「」

あの日、俺は当時の親しい友達たちと学校に向かって歩いていた
クラスでの事、その日の授業の事…そのほかにもさまざまな話を話
していた

そんないつもの日常が、唐突に崩れ去った

キキイイ！！

車のブレーキ音が後ろから聞こえ、俺はとっさに安全地帯までバツ
クステップした

そう『俺だけ』が……

目の前でトラックと塀に挟まれて押し潰されていく友人たち。その
様はひどくゆっくりに見えて、とても現実味がなくて…でも、どう
しようもないくらい現実だった
トラックが塀を崩しながら止まり、その隙間からは血がどんどん溢
れてきて地面を赤く染めていく
そんな中、気付いてしまった。

友人の顔がこちらを向いているのを……

その顔も半分ほども潰れかけていたがそれでもこちらをしっかりと見
ている

生気の抜けた目になりながらずっとこつちを見ている。その表情はよくわからない

それでも、自分だけ逃れてしまったことを責めているように感じて、気付くと俺は走り出していた。けれど

逃げ出しても『あの顔』が頭から離れない…

がむしゃらに走っていても『あの顔』だけは消えてくれない…

家に逃げ帰り、布団にもぐりこんでも『あの顔』は追いかけてくる…
やつのことで眠っても、夢の中で『あの顔』が四方八方から迫ってくる…

それからというもの、俺は『血が広範囲に広がっていくこと』に恐怖するようになった。

あの日あの時の友人を重ねてしまい、耳元で責められているように感じるようになった…

「　　ということだ…」

「そう、だったんだ…」

夕日が差し込み、オレンジ色に染まった保健室が沈黙に包まれる
数分の後、意を決した様子で愛子が話しかけてきた

「でも、今の水月なら大丈夫なんじゃない？」

「わからない…確かにあの時から進歩はしてるけど…」

「文化祭のときだつてボクを助けてくれたじゃない」

「いや、あの時は命の危険とかそんなんじゃない」

「それなら、なおさらしつかりしないと。トラウマのせいで誰かを守れませんでした、とかいったらその友達もかわいそうじゃない？」

その言葉に驚いて俺は愛子を凝視する

愛子は俺の手を握って真正面から俺を見据える

「忘れられるのは嫌だろうけど、自分のせいで水月が苦しむのはもつと嫌なんじゃないかな？」

「……………ははっ。そうかもな」

一度区切り、深呼吸して

愛子を抱き寄せた

「ふえ！？」

「ありがとう愛子。いくらか吹っ切れた気がするよ」

「ふふっ。それはよかった」

愛子も俺の背中に腕を回して、しばらくの間二人でそうしていた。

時間としては…短くはなかったただけ言っておこう

その後、二人して赤面。帰るとき気まずかったのは言うまでもないことだろう

第四問（後書き）

いかがだったでしょうか？

書き始めた当初は暗い過去なんか持っていない、普通（ではないだろうが）な高校生の設定だったんですけどね…

こんな感じの設定を付け加えようと思ったのは一巻の内容を書き終わったあたりでした。こういった設定は人によって好き嫌いが出るんでしょうが、楽しんでいただけると幸いです

第一問（前書き）

あれ……夏休み中に一回更新するつもりみたいに書いてたんだけどなあ……

まあ、作者は大学生なためまだ休みなのですけどね……

とりあえず今回は如月ハイランド編の終わりまでです。では、どうぞ

第一問

とある土曜日、いつもの様に情眠を貪っていると、携帯の着信に起こされた

「ただいま電話にできません。御用の方はピーという発信音の後にメッセージを残すな」

『残させるよ!』

「おつ、その声とツツコミは雄二か」

『声とツツコミで判断するな。というか携帯の表示を見る』

「は？ 非通知だったぜ？」

『つとスマン。さっき変えてそのままだったか』

非通知でかけるような用事でもあったんだろうか？

「で、用件は？」

『依頼がしたい』

ほう……

「では、依頼内容を」

『今日、翔子と如月ハイランドに行くことになったんだが……』

今日はプレオープンだろ？ とすると……

『プレミアムチケットで行くことになってな、あくまで普通程度の特典なら良いが……』

「行き過ぎた特典は妨害しろ、と？」

しかし意外だ。あの雄二が普通程度なら良いとくるか……………

『そうだ。あと、明久達が何かしてきたらそれも』

「…………面白い。どうせ暇だったし、無料でやってやるよ」
『いいのか？』

「あえて言うなら、報酬はその面白さだな」

『真面目にやるんだろ？』

「その辺は手抜きしないさ。わが社の名にかけて」

『そうか。じゃ、たのんだぞ』

携帯をしまい、準備を始める

「おーい鏡花」

リビングに居た鏡花に声をかけてみる

「何？」

「今日暇か？」

「秀吉君に呼ばれてる…………吉井君が手伝ってほしいって」

行動が早いな明久。だが甘い

「依頼だ。雄二達へのちょっかいを防ぐやつ」

「えっ、じゃあ…………」

「明久達の事も含めてな。秀吉をこちら側にするのもアリだ」

「…………じゃあ、それで」

そう言うと、少し離れて電話をかける

『秀吉君？あの、実は』

様子を見る限り、大丈夫そうだ

その後、秀吉と合流して如月ハイランドに向かった

如月ハイランド

従業員の服に着替えて作戦の開始を待つ

『ターゲット、入場ゲートに到着』

襟につけた小型無線機から鏡花の報告を聞く

「了解。作戦を開始する」

と、一歩先に明久が行った

「すまん鏡花、回避コード001頼む」
『了解』

場内に放送が響く

《従業員の吉井明久さん、ご家族がおいでです。至急、控えまで来てください》

さあ、どう出る……

『そんな馬鹿な！』

《『アキくん……』》

『ね、姉さん！？』

実は電話を放送のマイクと繋いだけなんだから

《『早く来ないとアキくんのあんなことやこんなことを喋ってしま
いますよ？』》

『なっ！？…………ちよつと失礼』

カメラを持ったまま走り去る明久。いやあ、まさか前に海外の仕事
で会った玲さんが明久の姉とはね…………数日前に聞いてみていて良か
った

「予備のカメラをお持ちしました」

変装はしているが雄二は気が付いた様だ

「あちらに撮影にいい場所があります。そちらで撮影いたしまし
ょう」

雄二と霧島さんをそちらに向かわせる

「（誰だ貴様は）」

エセ外国人が聞いてくる

「（貴方より上の立場の者です。確認してみます？）」

懐から身分証（偽装）を出す

「（そ、それは…………失礼しました）」

「（いえいえ。この二人は私が担当します）」

「（わかりました。失礼します）」

あのエセ外国人、簡単に引き下がったな

「（秀吉、康太がその辺にいるはずだ）」

『（了解じゃ）』

二人のもとに向かう

「さて、ではそのイスに並んでお座りください」

隣り合ったイスの間隔はほぼゼロだ

「……雄二」

「……………わかった」

長い沈黙の末にしぶしぶ座る雄二

「じゃあ撮りまーす」

カシャッ

「……はい、オッケーです。今なら加工が選べますが……」

サンプルの写真を見せる

？ 私達、結婚します

？ 私達、凄く幸せです

？無加工

「一人種類ずつお選びください」

「……？」

「？だな」

「かしこまりました。加工したうえで、後程お渡しします」

『ああっ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおうよ！』

『オレたちの結婚の記念に、か？そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

……… なんと不快な声と態度だな

「それでは、当園をお楽しみ下さい」

雄二と霧島さんを遠ざけた。これで大丈夫だろう

『おいっ！ 無視してんじゃねえよ！』

「申し訳ありません。お客様にはきちんと個別に対応せよ、と言われてまして……」

『じゃいいよ！ さつさと撮れや！』

「その前に、これはプレミアムチケット限定ですのでチケットを拝見させていただきます」

『ああっ！？ いいじゃねーか！オレたちやオキyakサマだぞコルア！』

うつさいなあ。どっか行けよ

「ルールも守れない輩はお客様ではございません。チケットを見せますか？ それとも諦めますか？」

『けっ！ サイアクな気分だぜ！ おい、行こうぜ』

『まったく、何て対応なんだろうねリユータ』

そんなことを言っても負け犬の遠吠えにしか聞こえないのだが……
……まあ、いいか

第一問（後書き）

声とツッコミで判断するといったら、化物語の神原さんですね
いつかやるうと思っていたので使ってみました

第二問

あれから時間は過ぎて、今は昼過ぎである

「お客様、特典のお食事の用意ができました」

あくまで口調は崩さないように声をかける

「そうか。行くぞ翔子」

「……………うん」

？ 沈黙が長くなかったか？

「翔子、どうした？」

「……………なんでも、ない」

「……………」

「……………雄二。急がないとはくれる」

「お、おう」

雄二も何か気が付いたようだ。……………もしかして、弁当でも作ってきたのか？

だとしたら失敗したな……………この流れじゃあ戻せない

「こちらです」

レストラン……………と、言うよりクイズ会場に到着した

「それでは、ここからは彼についていって下さい」

ボーイ（秀吉）を示しながら言う

「……秀吉。ボーイの真似事か？」

「いいえ、真似事ではなく本物のボーイです（安心せい。ワシは味方じゃ）」

「（そうか……）」

「それでは、こちらへどうぞ」

「あ、ああ……」

秀吉の役者っぷりに若干引きぎみの雄二。まだ半信半疑なのかもな

「お客様は未成年とのことで、こちらをご用意させて頂きました」

ノンアルコールのシャンパンを注いでいる

数十分後

《皆様、今日は如月ハイランドのプレオープンにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

これ、俺がやってます

《なんとプレミアムチケットをお持ちのペアがいらっしやるのとことで、特別イベントをご用意いたしました》

雄二がむせているのが目にはいる。このイベントは霧島さんがやりたそうだから残したのだ

《題して『如月ハイランドウェディング体験』プレゼントクイズ！》

さつきから「どういうことだ」というような視線を感じるのだが…
…ま、気のせいだろ

《五問正解で最高級ウェディングプランの体験、不正解ならその場で終了です！さあ、お二方どうぞこちらへ》

素直に歩き出す霧島さんとしびしび歩く雄二。どうせ間違えるつもりなのだろう

《では、第一問！》

用意された問題を読み上げる

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか？》

雄二、さつきから殺気が凄いんだが……

ピンポーン

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！ 恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ」

《正解っ！ 夫婦漫才のようなやりとりでオマケして二問分とします》

「なんだって！？」

雄二、お前の殺気は底なしなのか？

《では第三問、お二人の出会いはどこでしょうか？》

流れるような動作で雄二の目を潰す霧島さん

「ふおおおおっ！？ 目が、目があっ！」

憐れ雄二。せめて安らかに……

「……小学校」

《正解です！ 出会いのことは自分で話したいというピュアな翔子さんにはさらに一問分オマケです！》

「無茶苦茶だ！」

くだらない出来レースの時間を縮めるためだ

『ちょっとおかしくな〜い？ アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜？』

なにやら五月蠅い客が紛れ込んでいたようで、ステージまで出てきた

「お客様、ただいまイベントの最中ですのでご不満な点がございましたら係員にお申し付け下さい」

『ああっ！？グダグダとうるせーんだよ！ オレたちやオキヤクサマだぞコルア！』

「だから、さつきも言ったがルールを」

「じゃあ、こっぴつのはどうだ？」

雄二？何をする気だ

「お前らが最後の問題を出す。で、正解したら俺達、不正解ならお前らが体験をする。というのは」

『いいだろう！　じゃあ、問題だ』

空気が張りつめ、周囲も静まり返る

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

ヨーロッパ…ユーラシア大陸にある六大州の一つ。断じて国ではない

「……………えっと、司会者としてはマズいことかもしれませんが、答えをお教え頂けませんか？」

『どうやら答えられないようだな。キャンベラだろうが』

キャンベラ…オーストラリアの首都。断じてユーラシア大陸にはない

《坂本雄二さん、霧島翔子さん、おめでとうございます。準備がございますので、スタッフについていって下さい》

秀吉と鏡花がそれぞれ雄二と霧島さんを連れて退場する

『おい待てよ！　あいつら答えられなかっただろ！？　オレたちの勝ちじゃねえかコルア！』

『マジありえない！？　この司会バカなんじゃないの！？』

彼女も正しいと思ってるあたり、救いようがないな

「うつせえなあ。ヨーロッパはそもそも国じゃないし、キャンベラはオーストラリアの首都だ」

『なにバカなこと言ってるんだこいつ?』

『ホントバカじゃないのこの司会』

お前らにバカと言われるくらいなら明久に言われる方がマシだ

「俺がいま言ったのは常識であり一般教養だ。オーストラリアの首都が言えないだけならまだいい。だがヨーロッパが国だというのはいくらなんでも……バカだ。なんなら携帯でも使って調べてみるんだな」

その後彼らは調べたらしく、おとなしくなった

第三問

「で、何のつもりだ水月？」

やべえ。雄二の後ろに鬼が見える……

「何のつもりも何も、二人に楽しんで欲しいだけさ。まあ、損をする様なものでも危険なものでも無い。霧島さんの為に付き合ってやんな」

実はこれも危険だったんだが、そこは無理矢理ねじ伏せた

「はぁ……」

「んで、こちらが我らの自慢のメイク担当です」

「秀吉……」

「先に言っておこう。手加減は出来んぞい」

「こちら、衣装になります」

サーーと青ざめる雄二。その後、激しい抵抗の末に着替えが終了した

特別会場

↓side雄二↓

《 皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！ 》

どうやら司会は水月らしいな。さっさと終わることを祈っておくか

「何っ!？」

何なんだこの設備は……………やはり逃げるが吉か？

《それでは新郎のプロフィールの紹介を 省略します》

これでいいのか如月ハイランド？

□

□

□

！

□

！

何やら最前列で小声で話し合っているヤツがいる。しかもよく見るとさっきのバカどもじゃないか

《 それでは、いよいよ新婦のご登場です》

ライトが消え、スモークが立ち込める。このあたりの演出はさすがだな

《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》

一条の閃光。後に左右からも光が降り注ぐ

□

……………綺麗

そんなことをいったのは誰だったのだろう……………俺は言葉も出せずに固まっていた

白くしわ一つ無いドレス

薄く塗られた口紅
引き立つ白い肌
胸元で不安げに揺れるブーケ

誰だ？ この少女は……

「翔子、か……？」

「……うん」

まるで初めて会ったような、新鮮な感覚が体を駆け巡る

「……どう……？ 私、お嫁さんに、見えるかな……？」

「ああ、大丈夫だ」

苦し紛れに何か言っただろうとも思ったが、この場で言うのはやめておこう

「……雄二……」

動きを止め、小さな声で俺を呼ぶ

「お、おい。翔子……？」

何かマズいこと言っちゃったか！？

「……嬉しい……」

顔を俯かせて、かすかに震えだす。これはまるで

《ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁が泣いているように見えますが……？》

静かに涙を流している翔子を見る。しかし涙の理由は分からない

「お、おい。どうした……？」

観客の小さなざわめきが聞こえる

「……ずっと……夢だったから……」

涙で掠れた声。いまだに表情はうかがえない

《夢、ですか？》

「……小さな頃からずっと……夢だった……。私と雄二、二人で結婚式を挙げること……。私が雄二のお嫁さんになること……。私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……」

なぜこんな俺のことをここまで想ってくれるのだろうか

「……だから……本当に嬉しい……。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」

ここで間違ってはいけない、俺はアイツの間違いを正すんだ。そう思ったが、なかなか口が動かない

「翔子。俺は」

『あーあ、つまんなーい！』

突然の声に口が止まる。それどころか、思考能力まで少しとんだ。

耳に入るのはアイツをバカにするような低レベルな言葉

《んだとテメエらっ！ もういつぺん言ってみやがれ！》

《あ、明久君！ 落ち着いてっ！ ステージが台無しになっちゃいます！》

明久に姫路、か……

《霧島さん！？ 皆様、花嫁さんを探してください！？》

アイツ、いつの間に……まあ、いつか

バタバタと走り回る周りの連中をよそに外へ向かう。あの二人組はもういなかった

「坂本様」

「何だ水月、探すのはパスだぞ。便所にも行きたいしな」

「いえ、写真のほうが出来上がりでしたので。あと、御手洗いはそちらを進んだところにございます」

水月の指した方向は、看板とは真逆。気付かれたか

「これが写真です。どうぞ」

写真たてに入った写真が二つ、片方は加工の施されたものだ。が…

「……ずいぶん綺麗に撮れてるな」

「光栄です」

俺の頼んだ無加工の写真は落ち着いた色の写真たてに入っていた

「後片付けなどはコチラでさせていただきますので、この後はどうぞご自由に」

「そうかい。じゃあ便所だけ行って帰らせてもらうかな」

「それでしたらお帰りの直前にでも、私をお呼び下さい。霧島様のお荷物をお渡しします」

アイツの荷物？……………ああ、あのやけに大きなカバンか

「わかった。じゃあ後で行く」

準備体操は……………必要なさそうだな

「！
『！』
『？』

どうやら自分が想っていた以上にキてるらしく、奴らの声がノイズにしか聞こえない

「なあ、アンタら」

「？
『？』
『。』
『。』
『？』
『！？』

やはり理解出来ない。が、威嚇しているのはわかる

「いや、大した用じゃないんだが」

上着を脱ぎ、タイを緩める

「 ちょっとそこまでッラあ貸せ」

第四問（前書き）

本日、というか今回はこれにて終了！
次回はいつになるのやら……

第四問

「どうした？　ずいぶんお疲れのご様子だな雄二」

週明け、しかも朝から机に突っ伏している雄二に声をかける

「ああ……………」

「一体何があつたのさ？」

「明久か……………これをやるから俺に構うな」

雄二が渡したのは何かのチケットのようだ

「これって……………今話題の恋愛映画のペアチケット？」

「そうだ。《気になる相手》でもいるなら一緒に行くといい」

雄二のやつ、すっかり明久に復讐してやがるな。明久は姫路さんと島田さんに詰め寄られているし

「で、何があつた？」

「……………色々とな」

曰く、霧島さんと一応付き合うことになったり、その霧島さんがあの体験イベントの結果、ことあるごとに結婚のことを話題に出すようになったとか。

「一応？」

「ああ。まあ、悪い気はしないし、嫌になったらすぐ別れたらいいってことでな。だが……………」

「だが？」

「早速問題が発生した」

ああ、さっきの結婚話云々のことだろうな

「あのバカ、いきなり婚姻届けを取り出しやがったんだ」

「は、はははっ……」

すまん。まさかそこまでの影響があるとは……

「んで、逃げ回って逃げ回って、やっと今に至る。って訳だ」

「……雄二」

「何だ……って、翔子！？なぜここに!？」

「……雄二、ここにサイン」

「人の話を聞けよ！」

夫婦喧嘩が始まったようだ。ひとまず退散だな

「夫婦じゃない！それに、見てるくらいなら助ける!!」

「有料です」

「……ああもう！それでいいから助ける！」

その後霧島さんには雄二がまだ結婚出来ないことを言っただけで時間を稼いだ。

……まさか「……わかってる」とくるとは思わなかったがな。どんだけ用意周到なんだよ

第四問（後書き）

さて、如月ハイランド編いかがだったでしょうか？
しかし、この作品の如月ハイランド編には第二部が存在する！！
と、言うことで秀吉と鏡花、水月と愛子の絡みが読みたい方、もうしばらくお待ちください。第二部ではその四人をメインに進行いたしますので……

第一問（前書き）

次回予告的な感じで、これだけ投下！
続きは……今書いてます故、しばしお待ちください

第一問

土曜日の夕方、この日は雄二たちの為に尽力したわけで俺、鏡花、秀吉は少しの疲労感を滲ませていた

「しかし、今日一日で園内を走り回った気がするのじゃが、どうせなら遊びに来てみたいものじゃのう」

「確かに……」

「でも一般公開が始まったら今日みたいにすいてはいないと思うぜ？」

「それもそうなのじゃが……今日は見ているだけじゃったし」

「そんなお二人に嬉しいプレゼントがあるんだが、欲しいかい？」

取り出したのはこのプレオープンペアチケット。二枚を重ねならなように挟んで二人の顔の前に持つていく。二人は一瞬意味が理解出来なかったのか顔を見合わせると、秀吉が問いかけてくる

「なぜ二枚あるのじゃ？ 確かおぬしらが勝ち取ったのは一枚じゃつたはずじゃが」

「ちょくつと譲り受けてきただけだよ。頭の弱い先輩から、な」

「それは窃盗……」

「何も盗んできたわけじゃないぞ？ 花火が降り注ぐ中で頼んでみただけだ」

「それは罪状が窃盗から脅迫に変わるだけだと思っただけじゃが……」

「常夏からの迷惑料って考えとけばいいんだよ。どうする？ 要らないなら換金しまうけど」

「そういうことなら、頂こうかのう。鏡花、明日の予定は空いておるか？」

「うん……」

秀吉にチケットを渡すと、二人が明日の集合時間など（デートプランともいう）を話し始めたので数歩下がった場所について行く俺の方はというと、恒例となっている弁当交換の日に愛子と予定を立てており、明日行くことになっている。もし雄二たちも明日だったら手伝いはしていなかっただろうな…図らずも下見が出来て良かったと思っておこう

「そういえば、水月はどうするのじゃ？」

「俺？ 俺は明日愛子と行く予定だが？」

「（確か、水月と工藤は付き合っておらんのじゃよな？）」

「（うん……そのはず……）」

「（もう付き合ってしまったえば良いと思うのじゃがの）」

ん？ 何か二人でヒソヒソと話し始めた。変な事言ったか？

そうこうしているうちに俺たちの家が見えてきた。前の二人が名残惜しそうに見つめあっているが俺は何も見えていない。俺は空気をそういうことにしておいてください…

お、どうやらお別れも済んだようで鏡花が歩き出した。俺も自然な流れで斜め後ろを歩いて行った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0208n/>

バカとテストと鏡花水月

2011年10月4日07時41分発行